

吉塚祝町 1

— 吉塚祝町遺跡第1次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第624集

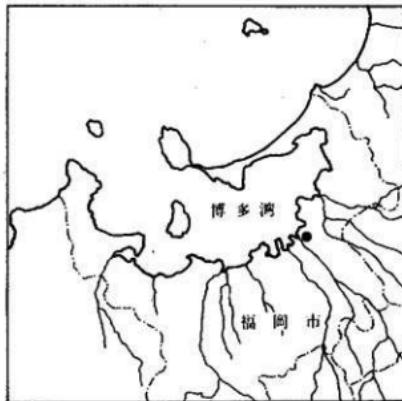
2000

福岡市教育委員会

吉塚祝町 1

—吉塚祝町遺跡第1次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第624集



調査番号 9723
遺跡略号 YZI-1

2000

福岡市教育委員会

序

玄海灘に面し、「活力あるアジアの拠点都市」を目指す福岡市には、豊かな自然と歴史が残されており、これを後世に伝えていくことは、現代に生きる私達の重要な務めであります。福岡市教育委員会では、近年の開発事業によって失われていく埋蔵文化財について、事前調査を実施し、記録保存に努めてまいりました。

本報告書に収録した吉塚祝町遺跡第1次調査は、福岡県庁およびJR吉塚駅と新国道三号線・福岡市都市高速道路とを結び、都心周辺部の交通の利便性を高め、慢性的な渋滞を緩和するために計画された、都市計画道路吉塚駅東線の拡幅に伴うものです。吉塚祝町遺跡は、今回新たに発見された遺跡であり、多くの貴重な成果をあげることが出来ました。

本書が、文化財保護へのご理解と認識を高める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。また、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 竜一郎

例　　言

1. 本章は、道路拡幅に先立って福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、吉塚祝町遺跡群第1次調査（福岡市博多区吉塚2丁目）の概要報告書である。
2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は、大庭・大濱菜緒・折茂由利・倉野正明が作成し、折茂由利が浄書した。
4. 本章の遺構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。
5. 本章に使用した遺物実測図は、大庭康時・佐藤信・大濱菜緒・森本朝子・井上涼子・上塘貴代子が作成し、大庭・井上・大濱が浄書した。
6. 遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
7. 遺物・記録類の整理には、今井民代・上塘貴代子・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵があたった。
8. 出土した銅錢の鑄落し・整理・判読・拓本は、大庭智子が行なった。
9. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9723		遺跡略号	YZI-1	
調査地地番	博多区吉塚2丁目地内		分布地図番号	吉塚35	
開発面積	8160m ²	調査対象面積	2000m ²	調査実施面積	382m ²
調査期間	1997年6月3日～1997年10月31日				

目 次

第一章	はじめに	1
1.	発掘調査にいたる経過	1
3.	遺跡の立地と歴史的環境	2
第二章	発掘調査の記録	5
1.	発掘調査の方法と経過	5
3.	遺構と遺物	6
(1)	第1区	6
(2)	第2区	7
(3)	第3区	8
	第1面	8
	第2面	8
(4)	第4区	10
	第1面	10
	第2面	11
	01号遺構	13
	10号・13号遺構	13
	14号遺構	14
	19号遺構	14
	23号遺構	17
(5)	第5区	18
	第1面	18
	第2面	19
	01号遺構	21
	05号遺構	22
	38号・39号遺構	13
	40号遺構	24
(6)	第6区	24
	第1面	25
	第2面	26
	第4面	27
	34号遺構	28
	37号遺構	30
	42号遺構	31
(7)	第7区	33
	第1面	33
	第2面	33
	第4面	34
	01号遺構	39
	17号遺構	40
	25号遺構	41
	76号遺構	41
	81号遺構	42
(8)	第8区	43
	第1面	43
	第2面	44
	第4面	46
	01号遺構	46
	05号遺構	51
	11号遺構	53
	14号遺構	57
	15号遺構	59
	55号遺構	62
	65号遺構	63
	67号遺構	66
	68号遺構	69
	74号遺構	71
	95号遺構	72
	107号遺構	72

(9) 第9区	74
第1面	74
第4面	77
59号・63号遺構	79
(10) 第10区	80
第1面	80
第4面	80
16号遺構	83
54号遺構	84
第2面	80
第5面	82
25号遺構	83
63号遺構	85
第3面	80
14号遺構	83
26号遺構	83
(11) 第11区	86
第1面	86
25号遺構	91
91号遺構	92
第2面	86
29号遺構	91
93号遺構	92
第3面	88
41号遺構	91
108号遺構	93
(12) 第12区	94
第1面	94
01号遺構	96
25号遺構	98
第2面	94
02号遺構	96
27号遺構	99
第3面	96
10号遺構	97
(13) 第13区	100
第1面	100
13号遺構	105
第2面	100
20号遺構	105
第3面	100
29号遺構	110
(14) 第14区	110
第1面	110
道路状遺構	114
22号遺構	115
27号遺構	116
40号遺構	117
60号遺構	119
71号遺構	122
第2面	110
13号遺構	114
24号遺構	115
28号遺構	116
41号遺構	118
68号遺構	120
第3面	112
17号遺構	115
25号遺構	115
30号遺構	117
46号遺構	118
69号遺構	121
(15) 第15区	123
第1面	123
04号遺構	126
28号遺構	128
第2面	124
07号遺構	126
第3面	125
13号遺構	128
(16) 第16区・第17区	129
第1面	129
16区08号遺構	134
16区34号遺構	135
16区52号遺構	137
17区01号遺構	140
17区24号遺構	141
第2面	129
16区23号遺構	134
16区35号遺構	136
16区58号遺構	138
1号集石遺構	141
17区25号遺構	142
第3面	130
16区26号遺構	135
16区37号遺構	136
16区63号遺構	139
17区15号遺構	141
(17) その他の出土遺物	142
第三章　まとめ	152

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたる経過

平成8年10月4日付けで、福岡市土木局道路建設部街路課（現東部建設二課）から福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区古塚二丁目地内についての事前審査願いが提出された。申請地は、都市計画道路吉塚駅東線の道路整備にともなって、既存道路を拡幅する用地である。

事前審査願いを受理した埋蔵文化財課では、申請地そのものは福岡市文化財分布地図に登録された埋蔵文化財包蔵地からはずれているものの、吉塚遺跡の北側の砂丘上に位置することから、試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、平成9年1月21日、29日、2月4日をかけて実施された。申請地内には、若干の未買収地も残っており、それを避けて5本のトレンチを設定した。その結果、中世の包含層と遺構が残っているのを確認した。遺構面は複数あり、柱穴・土坑を主体に、密度が濃いことが予想された。この結果発掘調査を前提とした事前協議に入ったのである。

発掘調査は平成9年度で実施、調査担当は年度当初博多区千代町で、同じく土木局東部建設二課の都市計画道路千代柏屋線の発掘調査を担当していた大庭康時が、千代柏屋線調査終了後当たることとなった。

平成9年6月3日、千代柏屋線の発掘調査事務所から発掘調査器材を搬入、6月5日より表土掘削を開始し、吉塚祝町遺跡の発掘調査に着手した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田 英俊（前任） 西憲一郎（現任）
調査総括	同 埋蔵文化財課	課長	柳田純孝（前任） 山崎純男（現任）
	同	第二係長	山口謙治（前任） 力武卓二（現任）
調査庶務	同	第一係	河野敦美 谷口真弓
試掘調査担当			杉山富雄 榎本義嗣
調査担当	同	第二係	大庭康時
調査補助	大濱菜緒	倉野正明	
調査作業	石川君子 大庭智子 曾根崎昭子 早川浩	井口正愛 岩隈史朗 江越初代 大久保五枝 大久保学 折茂由利 河野恒子 清水明 杉山正孝 岡加代子 都野浩之 永瀬和代 長田嘉造 能丸勢津子 野口ミヨ 宮崎タマ子 村崎祐子 山内恵 吉田清	

3. 遺跡の立地と歴史的環境

吉塚祝町遺跡は、今回新たに発見された遺跡である。地形的には、博多湾岸に形成された、南北に伸びる砂丘状に立地している。調査区は、この砂丘を東西に横断する形となった。歴史的立地環境としては、南西の砂丘に博多遺跡群、北の砂丘に箱崎遺跡と、歴史時代の福岡を代表する二大港津遺跡にはさまれている。

吉塚祝町遺跡の周辺では、砂丘ごとに遺跡の存在が知られ、また調査例も多い。以下にそれらの遺跡群について概要を見ておきたい。

吉塚遺跡群

これまで、5回の発掘調査例がある。弥生時代から近世に及ぶ遺構・遺物が出土している。貨泉・銅鑄・山陰系土器などの出土が報告されており、弥生時代から注目を要する遺跡である。

また、吉塚遺跡群が乗る砂丘の東端には、平安時代以来、堅粕奏師として親しまれてきた東光院が残る。東光院の境内は福岡市指定の史跡、仏像は国指定の重要文化財となっている。数基の板碑が現存している。

豊遺跡群

吉塚遺跡群の南側に、遺物散布地として想定された遺跡である。地形的には、砂丘群の後背湿地となる。たびたび試掘調査が実施されたが、遺構の検出例は全くない。

堅粕遺跡群

吉塚遺跡群のひとつ海側の砂丘上に立地する。9次（第2次調査は欠番）の調査を実施している。古代の集落遺跡であるが、越州窯青磁・綠釉陶器・墨書土器など特殊な遺物も見られ、律令期の公的施設の存在も考えられている。なお、この遺跡群の北側からは、古墳時代前期の方形周溝墓が調査されており、古代を中心とする南側とは別の性格の遺跡である可能性が強い。

吉塚本町遺跡

堅粕遺跡群の北側に位置する。これまでに4次の調査を実施している。弥生時代後期から古代の集落遺跡である。土鍤や製塙土器などの漁具・生産用具の一方で、瓦や鏡も出土しており、やはり何らかの公的性格が想定される。

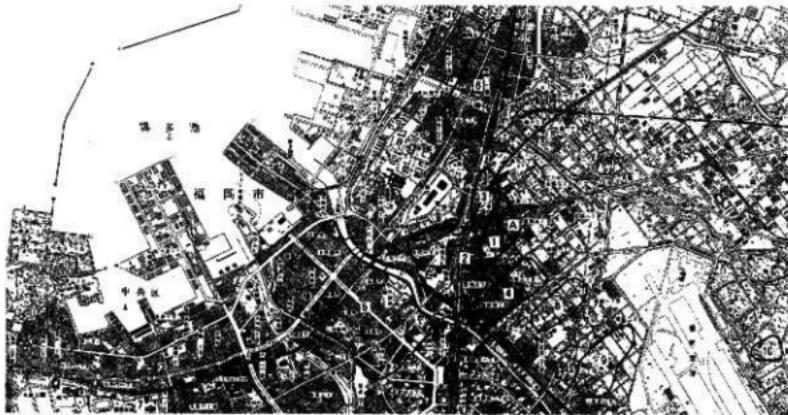
箱崎遺跡群

吉塚本町遺跡のさらに北側に位置する。柏屋平野を西流してきた宇美川が、流れを大きく北に転じて形成した南北に伸びる砂丘上に乗った遺跡である。10世紀に勧請された箱崎八幡宮の門前町であり、中世には箱崎津としても知られる。現在までに17次の発掘調査がなされ、古代末から近世の遺構が検出されている。

博多遺跡群

吉塚遺跡群・堅粕遺跡群の西に位置する。言うまでもなく、中世都市「博多」の遺跡である。これまで120次を越える発掘調査を実施している。弥生時代中期から現代まで続いた複合遺跡である。わが国最大の対外貿易の港であり、膨大な量の輸入陶磁器が出土することで著名である。調査次数が重なるにしたがって、町割りの復元など、中世の都市景観も検討できるようになりつつある。

吉塚祝町遺跡は、遺跡分布図を見ると堅粕遺跡の延長にも見えるが、昭和前期の地図から地形を復元すると、堅粕遺跡の砂丘とは深い谷を隔てている。中世の遺構を欠く堅粕遺跡群とは、性格的にも大きく異なり、全く別の遺跡として新たに登録することとなった。



1. 吉塚祝町遺跡 A 第1次調査地点
2. 堅粕遺跡 3. 吉塚本町遺跡 4. 吉塚遺跡
5. 博多遺跡群 6. 筑崎遺跡群 7. 福岡城址, 福岡城跡 8. 龍遺跡
10. 斎田青木遺跡 9. 櫻田遺跡

Fig.1 周辺道路分布図 (1/50,000)

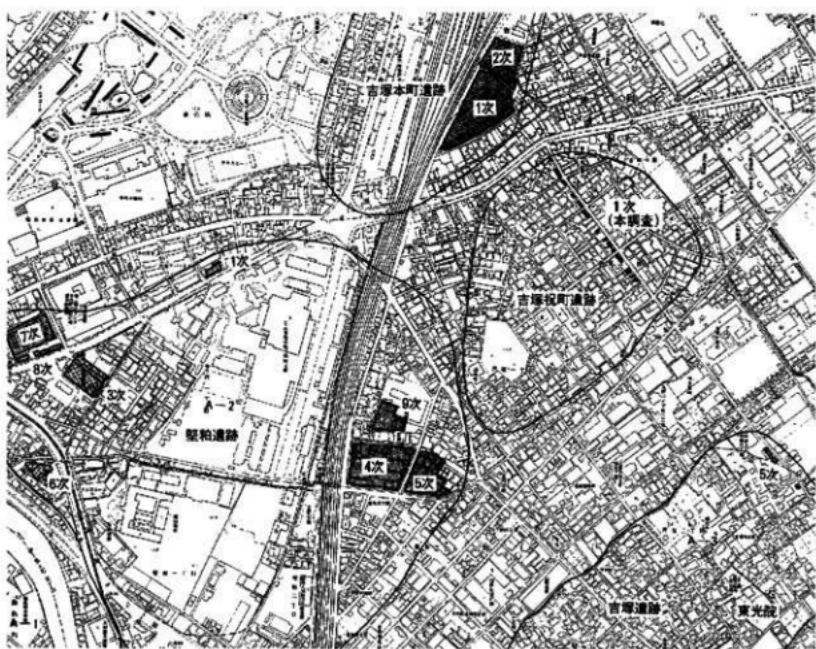
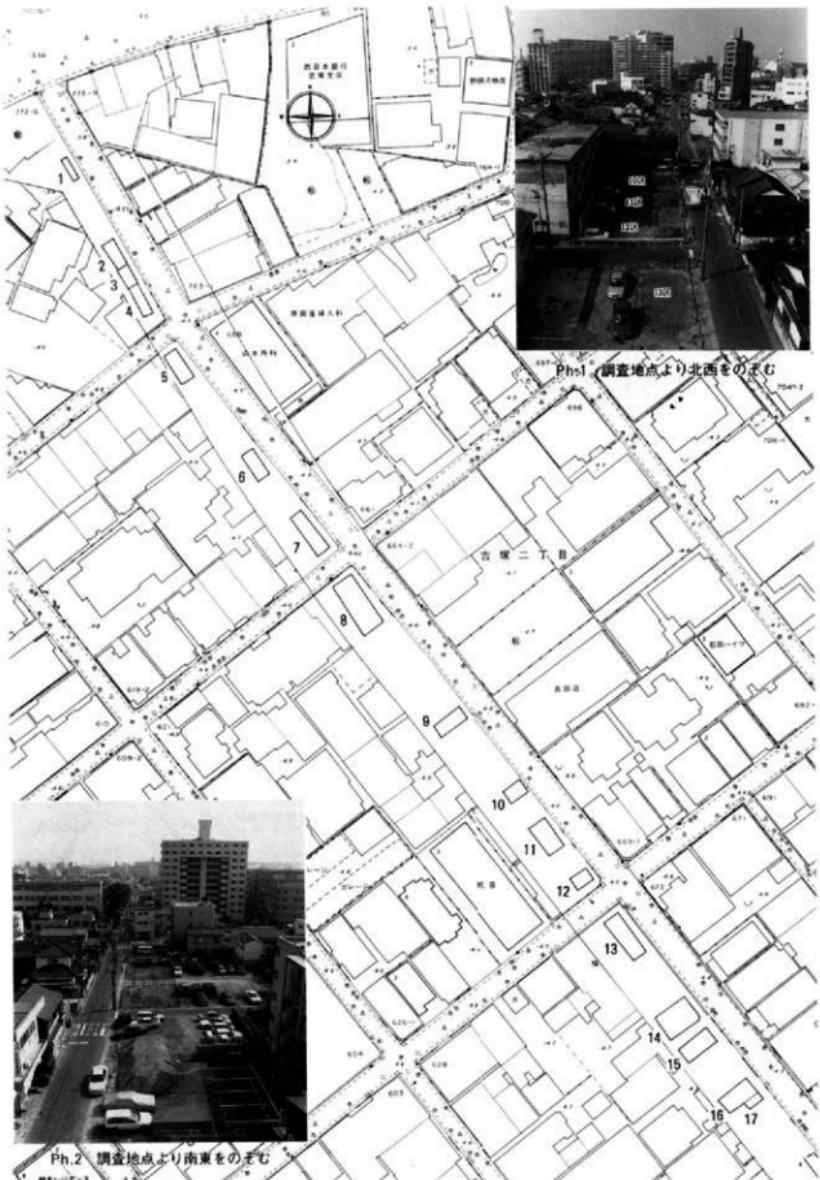


Fig.2 周辺発掘調査地点分布図 (1/8,000)



第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

発掘調査対象地は、全面的に現在の道路に面していた。そのため、一息に表土を剥ぐことはおろか、家屋・店舗・駐車場への進入口を確保する必要性から、細切れな調査区を設定せざるを得なかった。さらに現道や民家の安全確保のため十分な引きを取りねばならず、膨大な未調査部分（調査不可能部分）を生むこととなった。

発掘調査は、着手しやすい部分から適宜調査することとし、着手した順にA区・B区…とした。実際には、順次着手したと言うよりも、同時に2~3の調査区を設定し、掘り下げ・精査・実測の諸工程を噛み合わせて、作業手順に無駄がでないようにした。これは、小面積の調査を繰り返さざるを得ず、ひとつひとつの調査区を、順を追って終了していくと言う方法では、必要以上に時を浪費する恐れがあったためである。なお、各調査区の呼称は、調査段階につけたA区・B区…のままでは全く規則性がなく混乱する恐れがあるため、資料整理段階で、北西から南東に向かって1区・2区…と付け直している。

表土掘削は、可能な限りバックホーによったが、一部の調査区で、狭すぎてバックホーが使えず、人力で掘削した。発掘調査の残土は、未調査部分または調査終了部分に送って山積みにし、埋め戻しに際して戻すこととした。表土除去は、表土から旧耕作土までとし、包含層以下は生活面を捜しながら人力で掘り下げていった。調査区によって若干の相違はあるが、おもむね3面前の遺構検出面を設定することができた。したがって、掘り下げ・遺構検出・遺構精査・写真撮影・実測のサイクルを遺構検出面ごとに繰り返しながら、徐々に掘り下げていき、砂丘面にいたるという作業となった。

調査記録作成について、調査中の遺構写真は、35ミリ、6×7版でそれぞれモノクロとカラースライドフィルムで撮影した。遺構実測は、調査区が点在し総延長が長いことから、各調査区ごとまたは隣接した数調査区ごとに基準点を設定し、それぞれの基準点は、国土座標で測量した。遺構全体図は、20分の1で、個別の遺構図は10分の1で作成した。

発掘調査の経過は、表1に示す。

月	区	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
6	上旬																	
	中旬																	
	下旬																	
7	上旬																	
	中旬	*14	14	17														
	下旬																	
8	上旬																	
	中旬																	
	下旬																	
9	上旬																	
	中旬																	
	下旬																	
10	上旬																	
	中旬																	
	下旬																	

Tab.1 吉塚祝町遺跡第1次調査工程表

2. 基本層序

土層実測図は、各区ごとに作成しており、以下の報告で適宜示すが、基本的な堆積状況は共通しており、Fig.4の模式図で説明する。

表土部分は、黒灰色土層で硬く絡まっている。表面が、パラスで覆われている地点もある。表土下には、旧耕作土である茶褐色土が見られる。しまりは弱く、畑の土壤である。旧耕作土層の下は、多くの調査区で直に遺物包含層となり、遺構が掘り込まれている。包含層中には整地土を含めた数枚の堆積がみられ、生活面の重層が見て取れる。包含層の下部は、褐色もしくは暗褐色の砂層となる。古代の包含層または遺構埋土である。地山は淡黄色砂で、砂丘砂層上面に当たる。

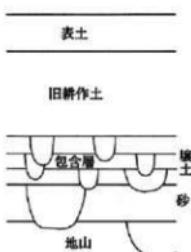


Fig.4 土層模式図

3. 遺構と遺物

(1) 第1区(F区)

現行道路との関係で幅が狭く、バックホーで掘削し状況を確認するととどめた。井戸状の大型土坑がみられたのみで、遺構密度は極めて薄い。砂丘砂層の標高は、3.27メートルである。6.1平方メートル。

井戸状遺構は、径300センチ以上の円形を呈する。調査し得た最深部は、標高2.55メートルである。土師器の小片が出土したのみで、時期は判断できなかった。

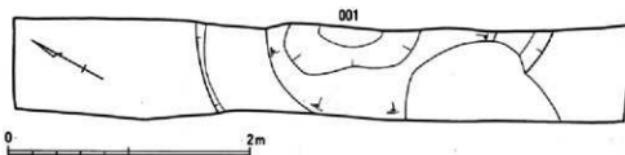


Fig.5 第1区1面遺構全体図 (1/40)



Ph.3 第1区全景 (南東より)



Ph.4 第1区001号遺構 (西より)

(2) 第2区(G区)

第1区と同様に、地山の砂層上面で遺構検出を試みた。しかし、壁面の観察では明らかに地山上の包含層中に遺構の掘り込みが認められたため、第2区(G区)にひき続いて調査した第4区(H区)・第3区(I区)では、包含層から遺構検出を行うこととした。地山砂層の標高は、3.48メートルである。第2区から第4区までは連続した調査区で、40.5平方メートルとなる。

遺構密度は薄い。01～03・07号遺構は、切り合い関係にある土坑である。前後関係は、03→01号遺構、03→07→02号遺構となる。05号遺構も、土坑である。04・06・08・09・11・12号遺構は、柱穴である。11・12号遺構は、10号遺構の底面から検出したもので、10号遺構に先行する。10号遺構は、灰茶色土を埋土とする大型の落ち込みで、遺構検出面から3～4センチ下がって平坦な底面となる。

遺物は、01・02・03・05・06の各遺構から出土したにとどまる。01号遺構からは土師器・須恵器・越州窯系青磁・滑石の小片、02号遺構からは土師器・黒色土器A類統・須恵器の小片、03号遺構からは土師器片、05号遺構からは褐釉陶器壺片、06号遺構からは須恵器片が出土した。大半が古代の遺構で、05号遺構のみ中世に属する。

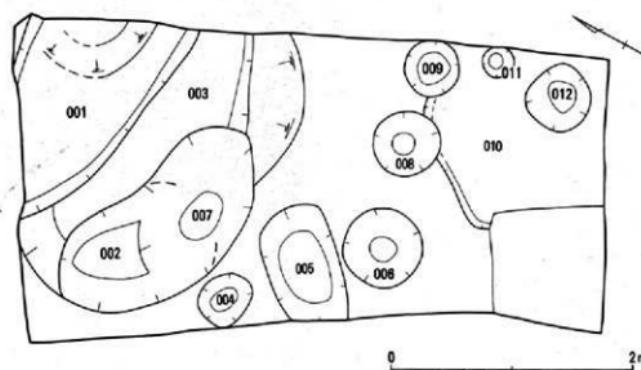


Fig. 6 第2区1面遺構全体図(1/40)



Ph. 5 第2区全景(南東より)



Ph. 6 第2区南東半分(西より)

(3) 第3区(Ⅰ区)

バックホーによる表土掘削を包含層上面で止め、人力で掘り下げたが、明瞭な遺構検出面を確認できず、結局暗褐色砂上面で第1面、地山砂層面で第2面を設定した。調査区北壁面での土層実測図をFig.7に示す。

第1面

標高3.69メートルである。包含層最下層である、暗褐色砂上面で設定した。溝状遺構と柱穴を検出している。

01・03・04・06号遺構から底部糸切りの土師器片が、04号遺構から中国陶器の小片が出土しており、細かい時期を特定することはできないが、中世の遺構と知れる。

第2面

地山である淡黄色砂層の上面で設定した遺構検出面である。標高3.45メートルをはかる。

溝状遺構・土坑・柱穴などを検出した。

溝状遺構は、3条検出されている(20・22・28号遺構)。20・22号遺構は灰色砂を埋土とするもので、柱穴・土坑などに切られており、この調査区では最も遡る遺構と思われる。埋土に粘土粒・炭粒を含んだ28号遺構からは、土師器と白磁の小片が出土した。

その他、11号遺構から土師器小片、12・15号遺構から土師器・須恵器片、21号遺構から土師器小片が出土した。

12・15・22号遺構が古代、23～28号遺構は、中世に下る遺構と考えられる。



Ph.7 第3区北東壁土層(南西より)

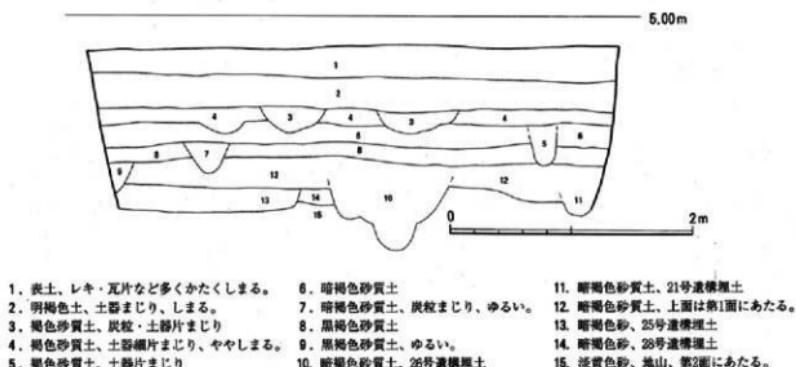


Fig.7 第3区北東壁土層実測図(1/40)

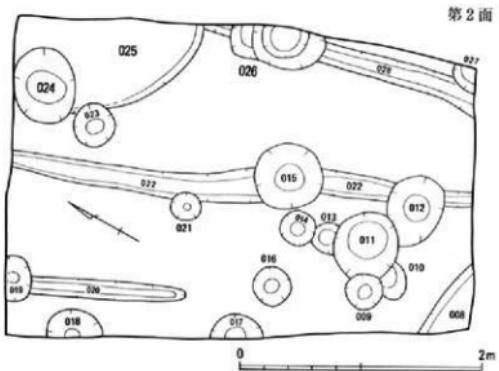
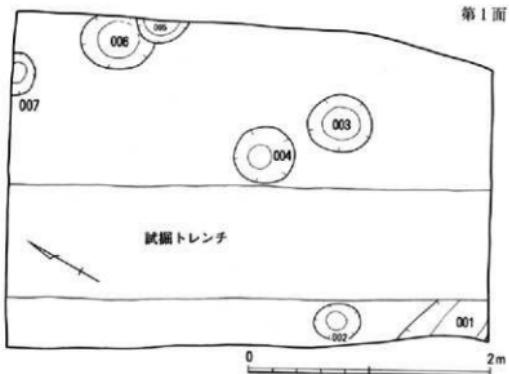


Fig.8 第3区1面・2面連構全体図(1/40)



Ph.8 第3区1面(北西より)



Ph.9 第3区2面(北西より)

(4) 第4面(H区)

第3区の東に連続する調査区であるが、別々に着手しているため、遺構検出面が若干上下し、厳密にはつながりを欠く結果となってしまった。表土掘削は、畑の土壤まで止め、包含層以下を調査している。調査区北東壁面での土層実測図を、Fig.12に示しておく。

第1面

包含層上面で設定した遺構検出面で、標高4.1メートル前後を測る。炭粒混じりの暗褐色土の面で、整地された層ではない。

溝状遺構・土坑・柱穴を検出した。01号遺構は、大型土坑としたが、大半が調査区外に出ており、性格不明である(後述)。溝状遺構は、重複して2条を検出した。13号遺構が、10号遺構を切っている(後述)。溝状遺構は東西に通り、柱穴は建物としてはまとまらないが、南北に並ぶようである。

すべての遺構から、底部を回転糸切りする土師器が出土しており、中世の遺構と思われる。

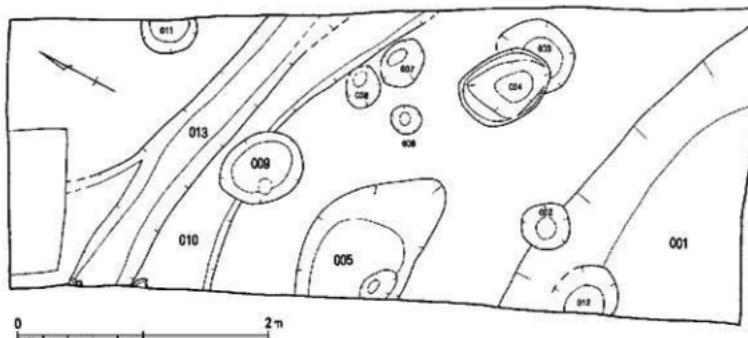


Fig.9 第4区1面遺構全体図(1/40)

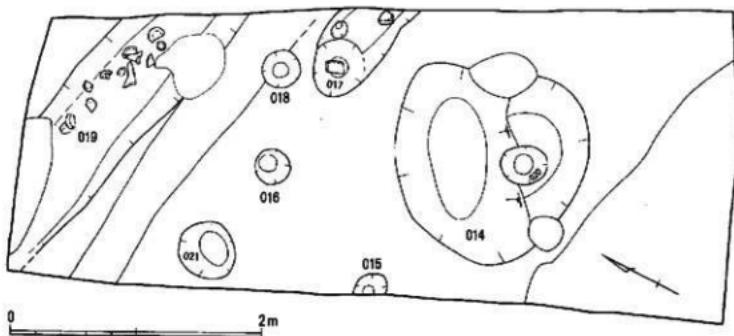


Fig.10 第4区2面遺構全体図(1/40)



Ph.10 第4区1面（北西より）



Ph.11 第4区2面（北西より）

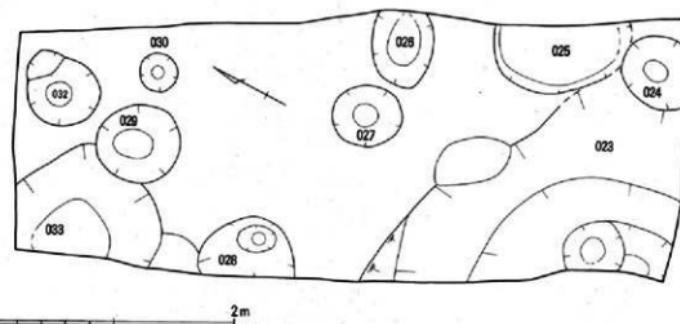


Fig.11 第4区3面遺構全体図 (1/40)

第2面

濃褐色砂層で設定した遺構検出面である。標高は、3.8メートル前後を測る。

柱穴・土坑・溝状遺構を検出した。溝状遺構(19号遺構)は、第1面の溝状遺構と同方向を指し、第1面の溝状遺構の前身であることが推測できる(後述)。柱穴は、建物を復元するにはいたらなかったが、溝状遺構に沿うように並んでいる。溝状遺構との間隔は、80~100センチである。溝状遺構の規模は、雨落ち溝とするには広すぎるが、柱の並びから約半間離れている訳で、位置的には軒先の真下に当たると見えよう。なお、17号遺構



Ph.12 第4区3面（北西より）

の底には、偏平な石が据えられており、柱を受ける礎板の石と考えられる。

すべての遺構から遺物が出土している。14号遺構から10世紀前後と思われる土師器類が出土している以外は、底部を回転糸切りする土師器の小片ばかりで、中世の遺構がほとんどと思われる。

第3面

地山砂層面での遺構検出面である。標高3.3メートル前後を測る。地山砂層を若干削り込んで遺構検出しており、そのため、本来第3区から連続する筈の溝状遺構などは、飛ばしてしまったましく検出できなかった。

柱穴・土坑を検出した。調査区南隅の23号遺構は、第1面の01号遺構と場所が重なり、一見同一遺構のように見えるが、間に第2面の土坑が挟まっており、別の遺構であることは明かである。すり鉢状を呈する（後述）。柱穴は、おおむねJ字型に配されている。軸線の方位は、南北、東西である。

23・24・28・29・32・33号遺構から、土師器・須恵器片が出土した。第3面で検出した遺構の埋土は、褐色もしくは灰色の砂であり、古代の遺構検出面と考えられる。

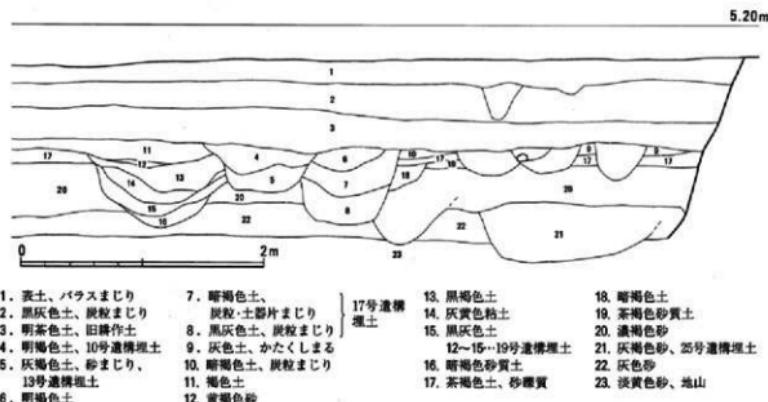


Fig.12. 第4区北東壁土層実測図 (1/40)



Ph.13 第4区北東壁土層



Ph.14 第4区南東壁土層

01号造構

第1面の南隅から検出した、大型の土坑である。深さ30センチの段落ち状となる。全形は、知り得ない。埋土は、締まっていない、ベタベタの黒色土である。

出土遺物の一部をFig.13に図示する。すべて土師器であり、底部を回転糸切りし、見込みに撫で調整を加える。1~4は、小皿である。口径7.7~8.2センチ、器高1.1~1.4センチを測る。5・6は、壺である。口径12.0、12.8センチ、器高2.35、2.6センチである。

この他、同安窯系青磁皿・白磁・褐釉陶器・瓦質土器鉢・鐵釘などが出土した。おおむね、14世紀頃の遺構であろう。

10・13号造構

第1面で検出した、2条の溝である。13号造構が、10号造構を切る。また、両者は共にN-76°-Wを指して並行しており、13号造構が10号造構の掘り直しであることが推定できる。

溝の幅は10号造構で60センチ以上、13号溝で48センチを測る。断面形は逆台形、深さは土層実測図に表れており、それぞれ65センチ、38センチであり、規模が縮小していることがわかる。埋土からは、水が流れていった痕跡は、認められない。

10号造構の出土遺物をFig.14-1~8に示す。1~6は土師器で、底部を回転糸切りする。1~4は小皿で、4には、内底部に撫で調整、外底に板目圧痕が見られる。口径8.0~8.3センチ、器高1.2~1.6センチを測る。5・6は、壺である。6には内底の撫でと外底の板目圧痕がみられる。口径12.6、13.2センチ、器高2.7、2.8センチを測る。7・8は、土鍤である。この他、瓦質土器火舎・白磁・平瓦片などが、出土している。

13号造構の出土遺物をFig.14-9・10に図示する。



Ph.15 第4区001号造構（北より）

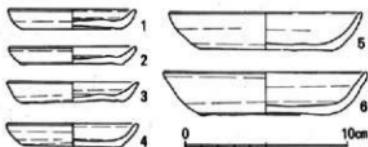
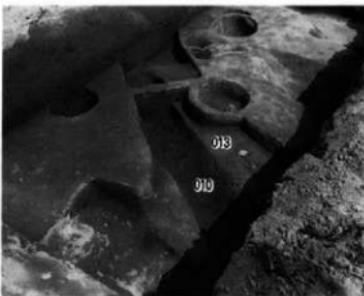


Fig.13 001号造構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.16 第4区010号・013号造構（西より）

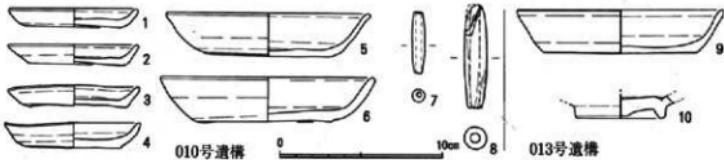


Fig.14 010号・013号造構出土遺物実測図 (1/3)

9は、土師器の壺である。底部は回転糸切りで、内底には撫で調整、外底には板目圧痕が残る。口径1.2.8センチ、器高2.6センチを測る。10は、青磁碗の底部である。外底部は、露胎となる。その他、白磁片、鉄釘等が出土している。

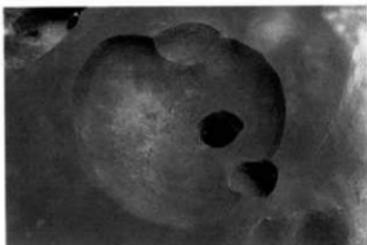
出土遺物を見た限りでは、両遺構の間にあまり大きな時間的隔たりは感じられない。ともに、14世紀前半頃の遺構と思われる。

14号遺構

第2面から検出した土坑である。直径160センチ前後の略円形を呈する。底面は二段掘り状となっているが、埋土からは切り合ひ関係とは見なし難い。検出面からの深さは、浅い部分で26センチ、深い部分で34センチを測る。ちょうど段差がつく部分で、柱穴が検出されたが（20号遺構）、14号遺構に伴うものではない。埋土は、暗茶色砂である。

出土遺物を、Fig.16に示す。1・2は、土師器の碗である。1は、丸みの強い体部から、反転して外反する口縁部を作る。調整は、横撫である。破片からの実測で、口径17.8センチに復元できたが、やや大きすぎるくらいはあるか。2は、高台を付けた底部片である。高台脇から、直線的に立ち上がる体部を持つ。高台は厚く、直立する。横撫で調整である。

3は、黒色土器A類（内黒土器）の碗である。高台径は大きく、「ハ」字形に高く踏ん張る。外面は横撫で、内面は荒磨きする。内面には炭素が吸着し、黒色を呈する。



Ph.17 第4区014号遺構（南西より）

4は、土師器の壺である。口縁部は、緩く外反している。口縁部の内外面は横撫で調整、体部内面は横削り、外面には指頭痕が認められる。

おおむね、10世紀頃の土坑であろう。

19号遺構

第2面の北角近くを東西に通る溝である。第1面の13号溝に切られている。Fig.12の土層実測図にみると、19号遺構の上には褐色土が堆積し、それを切って13号遺構が掘り込まれている。前項で

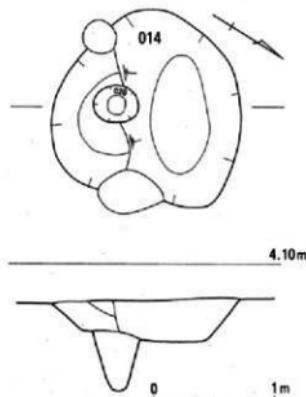


Fig.15 014号遺構実測図（1/40）

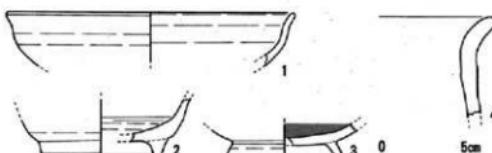


Fig.16 014号遺構出土遺物実測図（1/3）

述べたように13号遺構は10号遺構を切るが、10号遺構は土層図を見ると、19号遺構上の褐色土と層序的につながる暗褐色土層に掘られており、19号遺構→10号遺構→13号遺構という変遷が追える。ただし、19号遺構と10号遺構の間には褐色土層が堆積しているわけで、溝状遺構としては断絶していることになる。したがって、19号遺構は最も先行する溝であるが、単純に10号遺構が19号遺構を掘り直したものであるとは考え難い。

溝幅は75~80センチ、検出面からの深さは、12~15センチを測るが、土層断面の観察から、60センチ近い深さがあったことがわかる。

溝の北壁に沿って、黄灰色粘土塊が広がっており、粘土中から土師器・火薬などが出土している(Ph.19)。黄灰色粘土と共に、一括廻棄されたものであろう。

出土遺物をFig.18に示す。すべて、黄灰色粘土中から出土したものである。1~8は、土師器である。1~3は小皿で、底部は回転糸切りする。体部は横撫で調整で、2には内底に撫で調整、外底に板目圧痕がみられる。口径はそれぞれ8.0・8.0・8.6センチ、器高は1.0・1.3・1.15センチを測る。4~8は壺である。底部は回転糸切りで、5~8には内底部に撫で調整、外底に板目圧痕が認められる。口径はそれぞれ12.8・12.9・13.0・13.2~13.4・13.4センチ、器高2.2・2.3・2.7・2.7・3.0センチである。なお、7には油煙の付着がみられ、灯明皿として用いられていたことがうかがわれる。

9~11は、土師質土器である。9は、こね鉢である。口縁部は若干肥厚し、内面を受け口状に面取りする。横撫で調整で、体部内面は板状工具を用いて撫でている。指り目はみられないが、破片のため残っていない可能性もある。10は、土鍋である。内面は横撫で調整、口縁部の上面から外面には刷毛目調整を施す。また、外面には、厚く煤が付着している。11は、火鉢であろう。口径44.0センチ、底径36.2センチ、器高11.25センチと、浅く広い作りで、脚が付かなければ中国の磁灶窯の黄釉陶器の盤に似た器形であり、あるいは盤の可能性もある。直接接合できない破片のため、実測図の拓本には入っていないが、低い脚の破片も一点出土しており、おそらく鼎脚状に三ヶ所に脚が付いたものと推測される。体部内面は、横方向の刷毛目の上から撫で調整を加え、刷毛目痕を撫で消す。

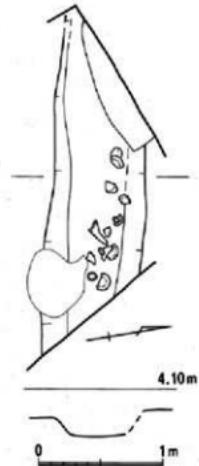
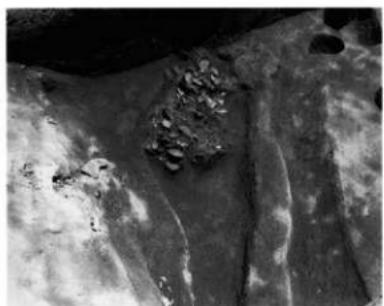


Fig.17 019号遺構実測図 (L/40)



Ph.18 第4区019号遺構（西より）



Ph.19 第4区019号遺構遺物出土状況（西より）

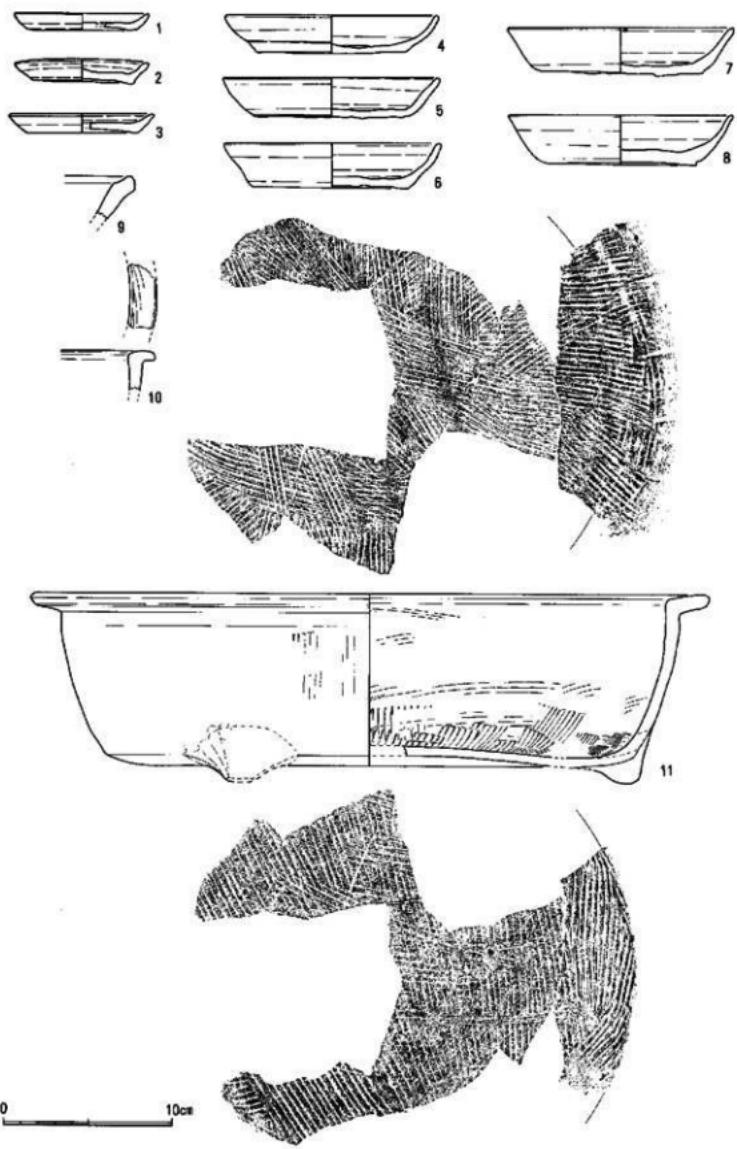


Fig. 18 011号遺構出土遺物実測図 (1/3)

内底部は、体部の撫で調整の後、粗い刷毛目調整を放射状に施す。口縁部上面は横撫で調整である。体部外面は、縦方向の刷毛目を撫で消す。外底部は一方向の刷毛目の後、周縁部分に乱雑な刷毛目調整を加えている。低い瘤状の脚は、撫でて成形する。

土師器小皿・壺の法量・器形からは、第1面の10号遺構・13号遺構と時期差を感じられない。しかし、前述したように層位的には明らかに両溝よりも先行しており、積極的な根拠はないが、13世紀後半頃に位置づけておきたい。

23号遺構

第3面の南角付近から検出した、大型の土坑である。大部分が調査区外に出ていて全形を知り得ないが、おそらく直径4メートルほどの円形を呈するものと思われる。摺り鉢状の断面で、検出面からの深さは、90センチ前後で、標高2.48メートルにあたる。形態的には、井戸の可能性もあるが、井側などの施設は出土しておらず、判断の材料に欠ける。

土師器壺・須恵器破片が出土しているが、図示に耐えるものはなかった。遺構の重複関係から、第2面の14号遺構（前述）よりも先行するのは確実で、おそらく古代の遺構であろう。

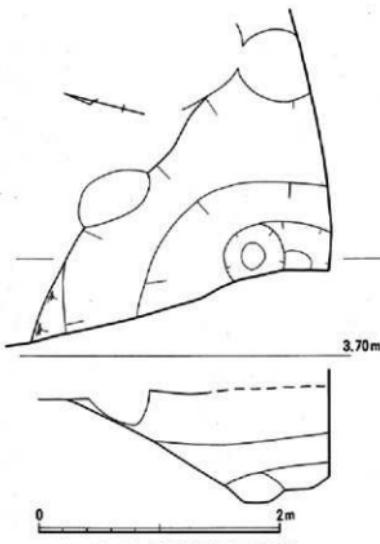


Fig.19 023号遺構実測図 (1/40)



Ph.20 第4区023号遺構 (北より)

(5) 第5区(L区)

第5区は、パックホーが入らず、人力で掘り下げた。包含層は薄く、厚さ30センチ内外で、包含層上面で第1面、包含層下部付近で第2面、地山砂丘面で第3面を設定している。

第1面

包含層の上面で設定した遺構検出面で、標高3.85メートル前後を測る。この面では、遺構密度はさほど濃くない。柱穴・土坑などを検出した。

01号遺構は、土層図を検討すると、第2面の38・39号遺構埋没後のくぼみに堆積した土壤のよう、土坑と見るのは当たらない(後述)。柱穴には、柱痕跡をとどめるものがあった(02・03号遺構)。直径20センチ強の丸柱である。しかし、残念なことに柱穴の配置から掘立柱建物跡を復元することは

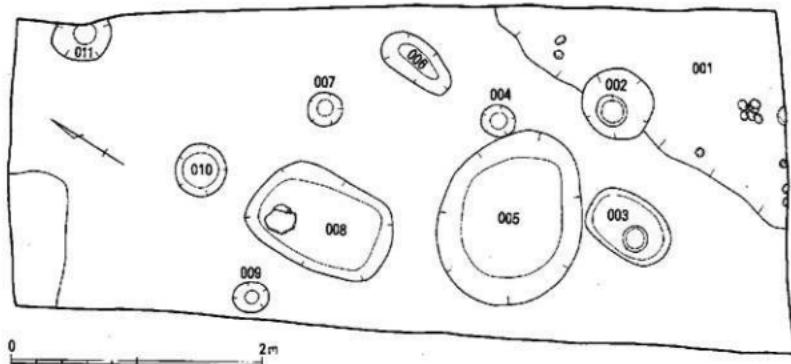


Fig.20 第5区1面遺構全体図 (1/40)

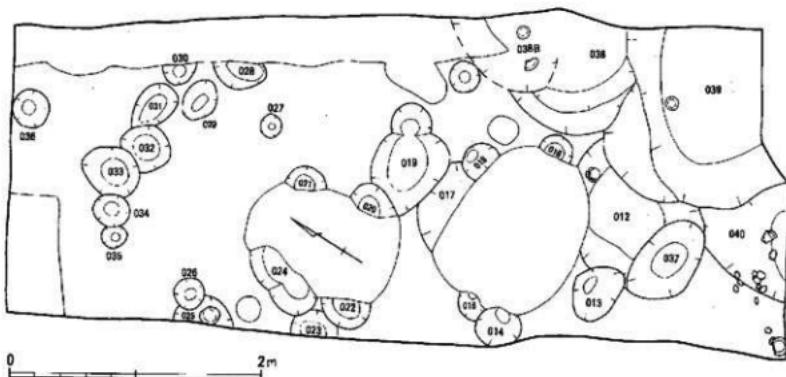


Fig.21 第5区2面遺構全体図 (1/40)



Ph.21 第5区1面(北西より)



Ph.22 第5区2面(北西より)

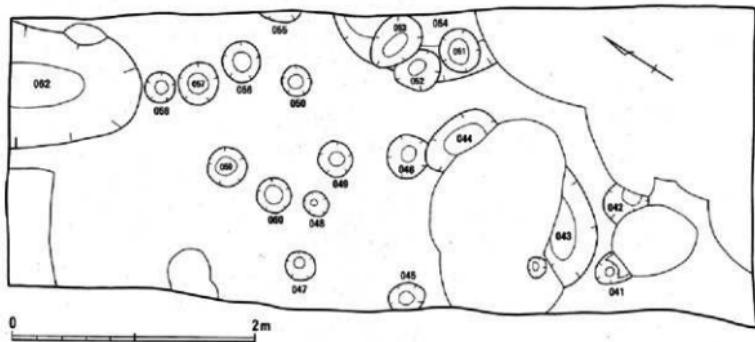


Fig.22 第5区3面遺構全体図(1/40)

できなかった。

13世紀頃の遺構検出面と考えられる。

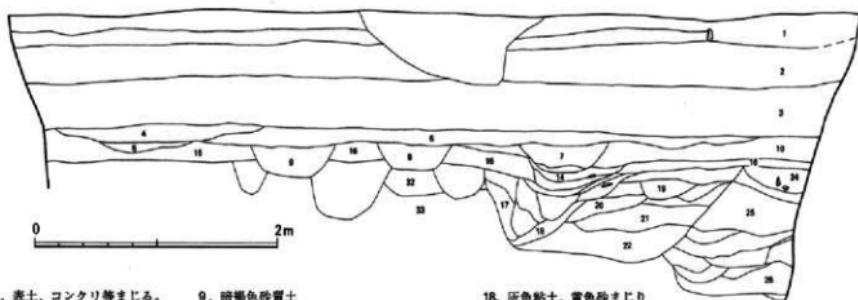
第2面

包含層下部、かなり地山が近くなった層で設定した遺構検出面である。部分的には地山の頭が覗いていたが、地山面で上からの遺構の掘り残しに煩わされるのを避けるため、あえてこの層で止めて、遺構検出面を設定した。標高3.65メートルである。

土坑・柱穴などを検出した。遺構密度は、比較的濃いと言える。調査区の東隅付近から、38・38B・



Ph.23 第5区3面(北西より)



1. 表土、コンクリ等まじる。
2. 明褐色砂質土
3. 褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 暗褐色砂質土
6. 暗褐色砂質土、細砂が網目状に入れる。
7. 暗褐色砂質土
8. 暗褐色砂質土
9. 暗褐色砂質土
10. 暗褐色砂質土、細砂が網目状に入る。
11. 褐色砂質土、炭化物まじり、玉砂利が入る。
12. 暗褐色砂質土、15との境は不明確
13. 黄褐色砂質土、炭化物・土脚屋まじり
14. 暗褐色砂質土、粘土粒まじり
15. 暗褐色砂質土、粘土粒がまばらにまじる。
16. 暗褐色砂質土、細砂が網目状に入る。
17. 黄褐色砂
18. 灰色粘土、黄色砂まじり
19. 暗褐色砂質土
20. 黄褐色砂、黒褐色砂まじり
21. 黑褐色砂質土、灰色粘土粒まじり
22. 黄褐色砂、黒褐色砂が斑らに入る20~22~38号遺構埋土
23. 黑褐色砂質土
24. 黄褐色砂質土、土脚屋多い。
25. 断面褐色砂質土
26. 黄褐色砂
27. 黑褐色砂質土、若干粘性をもつ、炭化物まじり
28. 黄褐色砂
29. 黑褐色砂質土、若干粘性をもつ、38号遺構埋土

Fig. 23 第5区北東壁・南東壁土層実測図(1/40)

39・40号遺構を検出した。いずれも大型土坑で、38B号遺構が38号遺構を、38号遺構が39号遺構を、39号遺構が40号遺構を切る。レベル的には、第2面よりも上位から掘り込まれた土坑群である。12号遺構は、39号遺構・40号遺構に切られた土坑である。底部糸切りの土師器と共に、楠葉型瓦器碗の破片が出土している。柱穴は、おおむね東西・南北に並んでいるように見えるが、掘立柱建物跡を復元することはできなかった。

第2面では、前述したように一部砂丘が出てしまっているため、遺構の時期にも幅があり、11世紀頃から13世紀までの遺構を検出している。

第3面

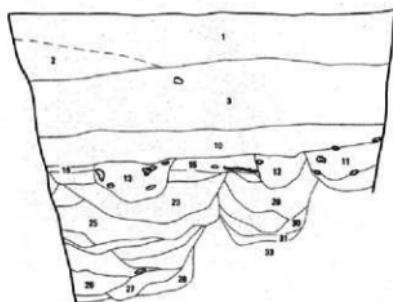
地山砂丘面で設定した遺構検出面である。ただし、実際には砂丘砂層を若干削り込んだレベルで、



Ph.24 第5区北東壁土層039付近(西より)



Ph.25 第5区南東壁土層(北西より)



29. 暗褐色砂質土、粘土粒まじり
 30. 黄色砂質土、黒色砂質土まじり
 31. 黄褐色砂、まじりはなく均質
 29-31-40号遺構埋土
 32. 明褐色砂
33. 淡黄色砂、地山

遺構検出している。標高は、3.48メートル前後を測る。

柱穴・土坑などを検出している。遺構密度は、あまり濃くない。遺物が出土していない遺構が多く、53号遺構から土師器・黒色土器B類、54号遺構から土師器、57号遺構から土師器が出土しているに過ぎない。時期を判断する材料に欠けるが、第3面の遺構埋土は、黒褐色～灰褐色の砂であり、他の調査区の所見では、これらの砂を埋土とする遺構は、古墳時代～古代に属するものが多い。したがって、第3面の所属時期を、古代以前と推測したい。

01号遺構

第1面の南角付近から検出した遺構である。浅い落ち状を呈するが、この部分は、ちょうど第2面で38号遺構・39号遺構・40号遺構といった大型土坑が連続する上に当たる。さらに、土層の観察から、01号遺構の部分は土坑状の人の為的な掘り込みではなく、傾斜した堆積土であることが看取できる。したがって、連続した大型土坑の埋没上にできたくぼみに堆積した土壤を遺構と誤認したものと考えることができよう。

比較的まとまった遺物が出土している。また、遺構全体図中に示しているが、数カ所で円碟の集積が認められた。径3~5センチ程度の玉砂利状の



Ph.26 第5区001号遺構（北より）

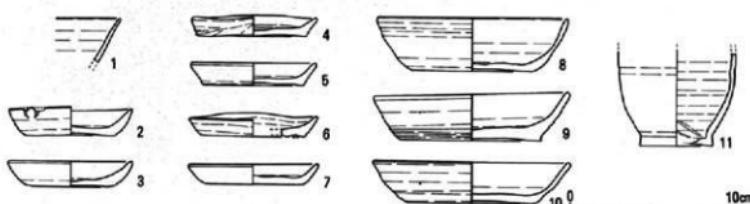


Fig.24 001号遺構出土遺物実測図 (1/3)

碟を数個ずつ集めているもので、その用途・性格については考えが及ばなかった。

出土遺物をFig.24に示す。1は、越州窯系青磁の碗である。器壁は薄く、精品である。2~10は、土師器である。2~7は小皿で、比較的器高が高く、器肉が厚い1・2と、他のものとに二分できる。前者は口径7.2・7.6センチ、器高1.8・1.6センチ、後者は口径7.3~8.1センチ、器高1.3~1.5センチを測る。2の口縁には二ヶ所の打ち欠きがあり、そこに煤が付着している。灯明皿として用いられたものであろう。8~10は、壺である。口径は11.8・12.1・12.2センチ、器高3.3・3.0・2.6センチで、8はかなり器高が高い感がある。土師器の小皿・壺は、底部を回転糸切りする。11は、瓦質土器の瓶である。横撫で調整される。器肉は薄く、成形も丁寧である。この他、青磁鑄蓮弁文碗・白磁口禿皿・瓦質土器こね鉢などが出土した。

14世紀前半頃であろう。

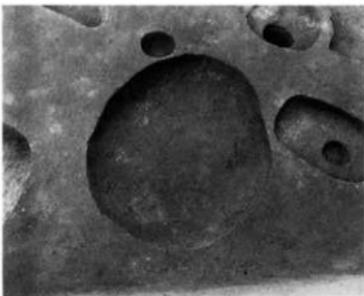
05号遺構

第1面から検出した土坑である。

長軸145センチ、短軸116センチの卵形を呈し、検出面からの深さは30センチ前後を測る。

出土遺物を、Fig.26に示す。1・2は、土師器である。底部は回転糸切りで、内底部に撫で調整を加える。1は小皿で口径7.2センチ、器高1.05センチ、2は壺で、同じく12.3センチ、2.5~3.0を測る。3は、土師質土器の壺の口縁部である。4は、白磁の合子蓋である。

13~14世紀であろう。



Ph.27 第5区005号遺構（南西より）

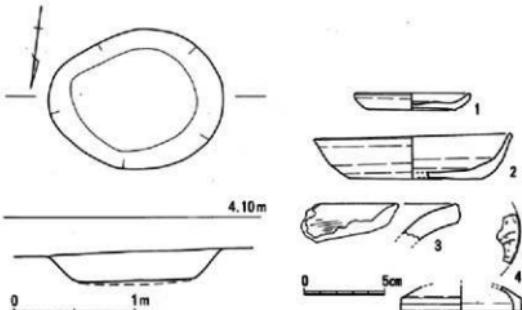
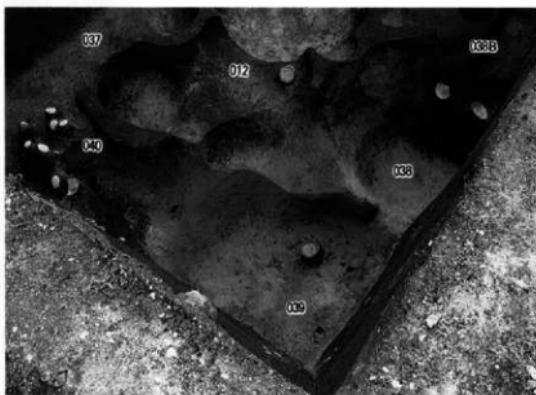


Fig.25 005号遺構実測図 (1/40)

Fig.26 005号遺構出土遺物実測図 (1/40)



Ph.28 第5区2面（東より）

38号・39号遺構

第2面の東角付近から検出した大型土坑である。38号遺構が、39号遺構を切る。さらに38号遺構の北半分の38B号遺構が、38号遺構を切るが、この切り合い関係については土坑の床面を精査した際に気づき、壁面の観察によって確認したもので、当初は認識できなかった。よって、遺物も分別できていない。

38号遺構・39号遺構ともに大半が調査区外に出るため、全体の形状はうかがえない。検出面からの深さは、それぞれ76センチ、107センチ前後を測る。埋土からみて、水が溜まっていた形跡はない。

出土遺物をFig.28に図示する。1~3は、38号遺構出土の土器である。底部は、回転糸切りする。1は小皿で、内底部に撫で、外底部に板目圧痕を持つ。口径7.7~8.0セ

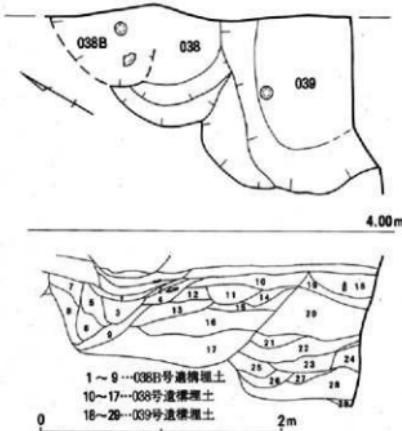


Fig. 27 038・38B・039号遺構実測図 (1/40)



Ph.29 第5区038号・039号遺構 (南西より)



Ph.30 第5区039号・038号遺構 (北東より)

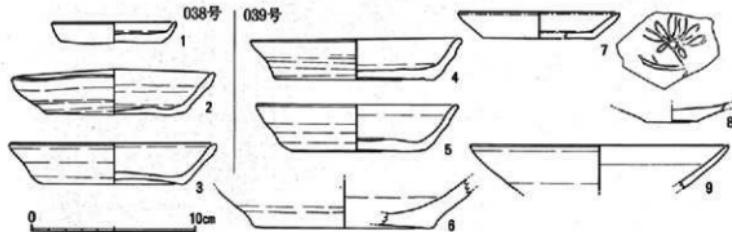


Fig. 28 038号・039号遺構出土遺物実測図 (1/3)

ンチ、器高1.3センチを測る。2・3は、壊である。横撫で調整する。口径12.0~12.6・12.7センチ、器高2.2~2.8・2.5センチを測る。

4~9は、39号造構の遺物である。4・5は、土師器の壊である。底部は回転糸切りで、内底部に撫で、外底部に板目圧痕が残る。口径12.4~13.0・12.4センチ、器高2.4~2.8・2.9センチである。6は、東播系須恵器のこね鉢である。内面は、使い込まれて摩耗している。7~9は、白磁である。7は口禿皿で、口縁部の釉を削り取る。8は平底皿で、外底部露胎、見込みに花文を刻む。9は、碗の口縁部である。

両造構の出土遺物からは、あまり時期差は感じられず、ともに13世紀後半頃と思われる。

40号造構

第2面の南辺から検出した土坑である。大部分が調査区外に出るため、形状は明かではない。検出面からの深さは、42センチを測る。

底部糸切りの土師器壊の破片が出土している。切り合い関係から、前述した39号造構よりも古く、13世紀代の土坑と考えられる。

(6) 第6区(M区)

烟の耕作土層を除去した直下の包含層上面を第1面とし、包含層中で第2・3面、地山砂丘面で第4面を設定した。包含層は比較的厚く、60~70センチの厚さを持つ。なお、調査区の北東辺に沿って、試掘トレーンが入っており、第3面まで達していた。



Ph.32 第6区1面(西より)



Ph.33 第6区2面(西より)

第1面

包含層上面で設定した遺構検出面である。標高3.94メートル前後を測る。

溝状遺構・土坑・柱穴を検出した。調査区のほぼ中央で検出した13号遺構は、埋土中にガラス瓶の破片を含み、現代の掘り込みである。漆器皿が出土している。土坑・溝状遺構には東西や南北を指すものがみられた。特に溝状遺構はきれいに平行しているが、その機能は不明である。

おおむね、14世紀代の生活面と考えている。

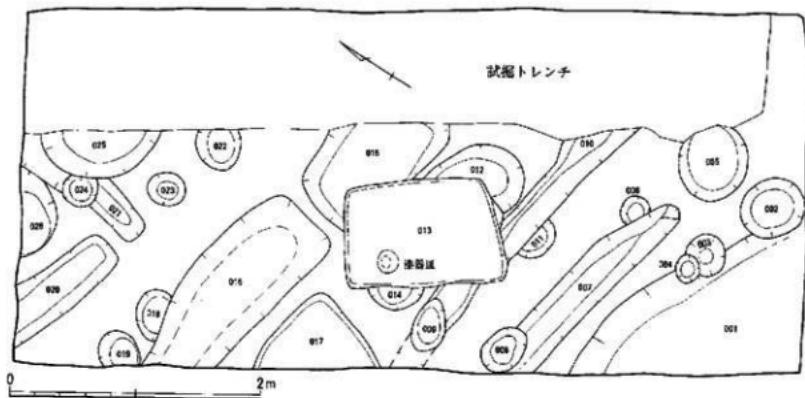


Fig.29 第6区1面遺構全体図 (1/40)

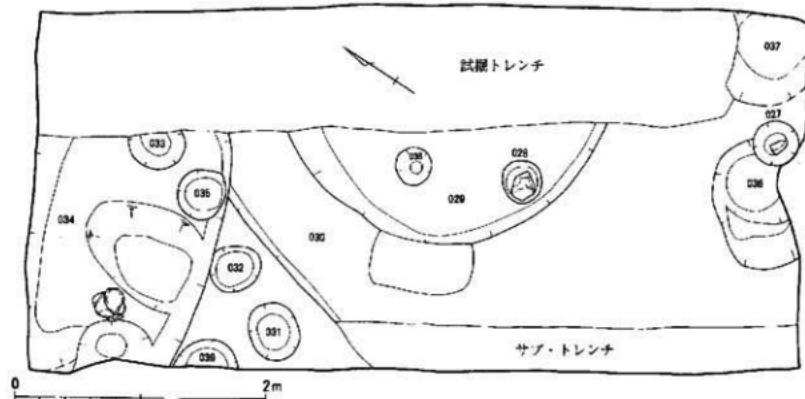


Fig.30 第6区2面遺構全体図 (1/40)

第2面

包含層の中程に設定した遺構検出面である。標高は、3.6メートル前後を測る。

大型の土坑・柱穴を検出したが、遺構密度は薄い。調査区の東三分の二ほどで、全体に遺物が多く遺構のように見えたため、30号遺構として15センチほど掘り下がるが、遺構とは確認できなかった。

13世紀後半頃の遺構検出面と思われる。なお、第1面からの掘り下げ時に、綠釉陶器2点が、出土した。144頁、Fig.184-8・9に実測図を示す。

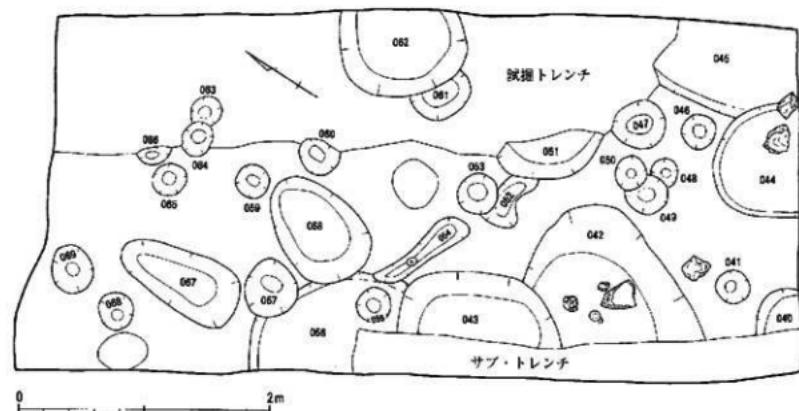


Fig.31 第6区3面遺構全体図 (1/40)

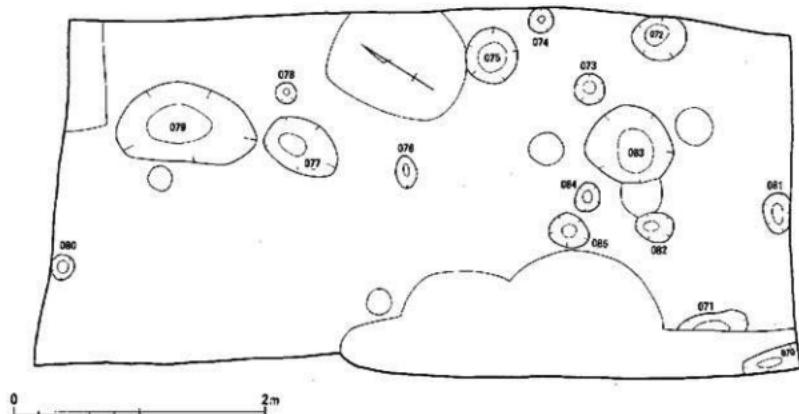


Fig.32 第6区4面造構全体図 (1/40)



Ph.34 第6区3面(西より)



Ph.35 第6区4面(西より)

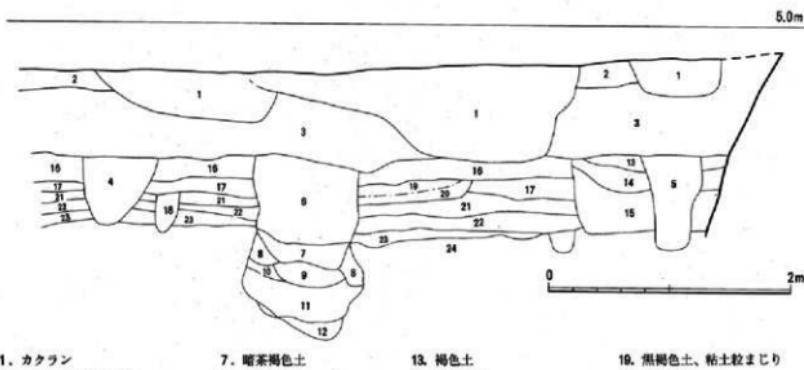
第3面

包含層下位、褐色砂層で設定した遺構検出面である。標高3.34メートル前後を測る。
土坑・柱穴を検出した。調査区東隅の45号遺構は、土層観察の結果、第2面の37号遺構の下部と考えられる。北東辺の中程の62号遺構は、試掘トレンチのため第3面まで検出できなかつたもので、土層観察によれば、第1面に伴う遺構である。

13世紀頃の遺構検出面と思われる。

第4面

地山である砂丘砂層の上面で設定した遺構検出面である。標高3.22メートルを測る。
柱穴・土坑を検出したが、遺構密度は薄い。また、出土遺物も極めて少なく、73号遺構から土師器



- | | | | |
|-----------------|-----------------|------------------|--------------------|
| 1. カクラン | 7. 噴茶褐色土 | 13. 褐色土 | 19. 黒褐色土、粘土粒まじり |
| 2. 表土、バラスまじり | 8. 黄白色砂 | 14. 噴褐色土 | 20. 黑褐色土 |
| 3. 明茶色土、旧耕作土 | 9. 噴褐色土 | 15. 噴褐色土 | 19~20~29号遺構埋土 |
| 4. 噴褐色土、土器片まじり | 10. 噴茶褐色砂質土 | 13~15~45号遺構埋土 | 21. 噴褐色砂質土、第2面にあたる |
| 5. 褐色土 | 11. 噴褐色土、ややベタつく | 16. 噴褐色土、第1面にあたる | 22. 黑褐色土 |
| 6. 噴褐色土、炭粒多くまじる | 12. 灰褐色砂質土 | 17. 茶褐色砂質土 | 23. 灰褐色砂、第3面にあたる |
| | 8~12~62号遺構埋土 | 18. 噴褐色土 | 24. 淡黄色砂、地山 |

Fig.33 第6区北東壁土層実測図(1/40)

の小片が出土したにとどまる。したがって、時期を明らかにできないのだが、これらの遺構の埋土が、砂質であることから、壤土質土を埋土とする中世の遺構とは明らかに異なる。また、第3面までの遺構から、越州窯系青磁片などが出土しており、古代の遺構の存在は確実である。これらの点から、第4面の遺構については、古代に属するものと推定したい。

34号遺構

第2面の西角付近から検出した、大型の土坑である。北側の上端と西側が調査区外東側が試掘トレンチに切られ、全形を知り得ないが、おそらく長軸230センチ以上、短軸160センチ以上の長楕円形を呈するものと推測できる。検出面からの深さは、26センチで、中央が楕円形にくぼんで35センチほどの深さとなる。南辺際の35号遺構は、34号遺構の底で検出したが、埋土の相違からみて、34号遺構を切り込んで掘られた可能性が高い。床面中央のくぼみについては、埋土の違いは認められず、34号遺構に伴うものと思われる。また、床面やや上に40×25センチほどの範囲で、粘土ブロックが認められた。さらに、この粘土ブロックの上面に圧着して、土師器の壊が出土した。土師器壊は、埋土上位からもほぼ完形の状態で出土している。

出土遺物をFig.35に示す。1~13は、土師器の小皿・壊である。底部はすべて回転糸切りで、4・5・9~11・13では内底部の撫で調整と外底部の板目圧痕が認められる。1~6は、小皿であるが、1は器高が高く、6は逆に低い。1で口径8.6センチ、器高2.0センチ、2~5で同じく7.6~8.3センチ、1.3~1.5セ

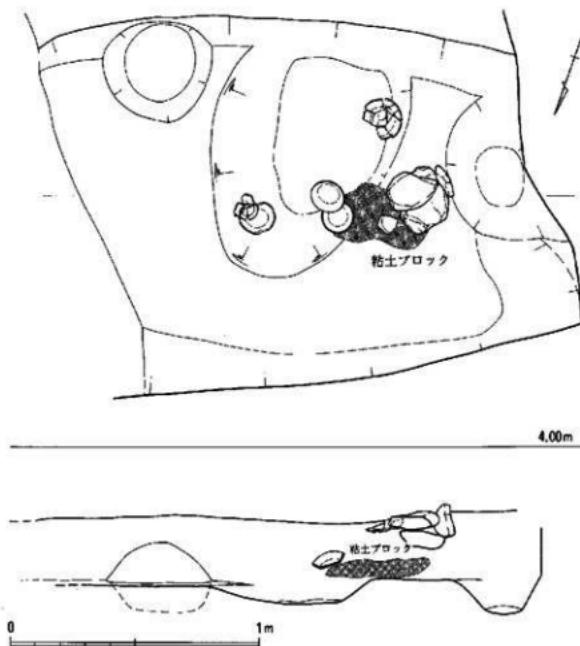


Fig.34 034号遺構実測図 (1/20)



Ph.36 第6区034号遺構（南西より）



Ph.37 034号遺構遺物出土状況（西より）

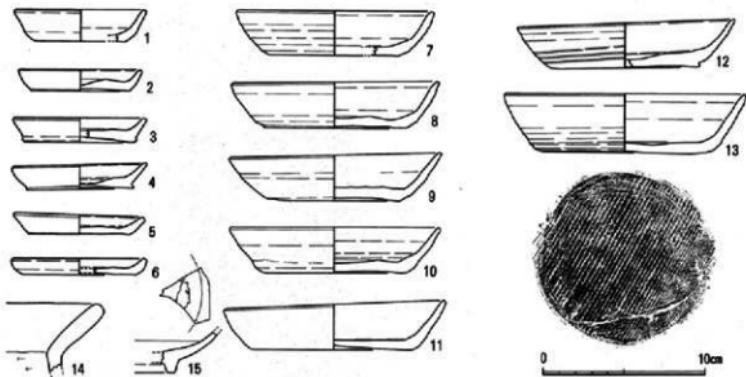


Fig.36 034号遺構出土遺物実測図 (1/3)

ンチ、6では8.4センチ、1.0センチを測る。7~13は、坏である。7~12は口径12.2~13.5センチ、器高2.6~2.9センチ、13はこれらより一回り大きく、口径15.0センチ、器高3.6センチである。13の外底部の板目圧痕は、簾目状を呈する。14は、土師器の壺である。口縁は「く」字状に外折する。口縁部は横拂で調整で、体内部は横方向に範削りする。15は、越州窯系青磁碗の、底部破片である。全面施釉で、見込みと疊付きに目痕が残る。この他、須恵器片・鉄釘・第5区の01号遺構で見られたのと同様な玉石などが出土した。

これらの内越州窯系青磁碗や須恵器片は、明らかに下層からの混入遺物であり、おおむね、13世紀後半頃の土坑と考えるのが妥当であろう。なお、機能としては、廐棄土坑と思われる。



Ph.38 第6区036号遺構（西より）

36号遺構

第2面の南辺で検出した土坑である。半ばほどが調査区外に出るが、長軸100センチ、短軸85センチほどの橢円形を呈するものと推測できる。途中小さな段が付いて二段掘り状となる。検出面からの深さは、35センチ程度を測る。埋土中から、土坑壁面の傾斜に沿うように、土師器坏と糠が出土した。埋没過程で、流れ込んだものであろう。

出土遺物をFig.36

に示す。すべて底部糸切りの土師器である。1は小皿である。器高は高く、体部は直立気味である。口径7.6センチ、器高1.9センチを測る。2・

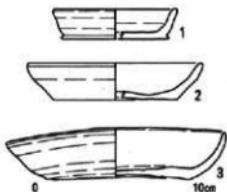


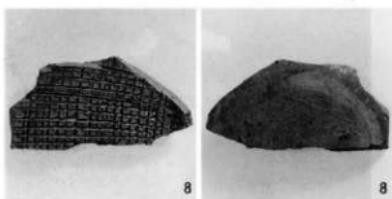
Fig.36 036号遺構出土遺物実測図 (1/3)

3は坏である。内底部に撹で調整、外底部には板目圧痕がみられる。2は口径10.8センチ、器高2.3センチ、3は同じく12.3~13.6センチ、2.3~3.2センチである。この他、瓦質土器片、青磁片が出土している。

おおむね、14世紀前半頃の土坑である。

37号遺構

第2面の東隅から検出した土坑である。土層観察の所見により、第3面の45号遺構とは同一の遺構であると考えられる。大半が調査区外に出ているので、試掘調査のトレレンチにかかっているため、全体の形状は知り得ない。調査区北東壁の土層実測図によれば、本来第1面に伴うもので、第1面から土坑床面までの深さは65センチ、床面は平坦で、土坑壁はほぼ直立する。



Ph.39 037号遺構出土遺物

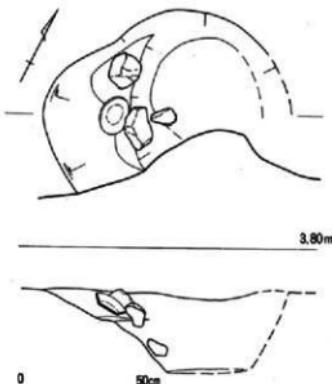


Fig.37 036号遺構実測図 (1/20)



Ph.40 第6区037号遺構 (北東より)



Ph.41 037号遺構遺物出土状況 (北西より)

埋土中位から、流れ込んだ様な状態で、土師器壺・古瀬戸陶器などが出土した。

出土遺物をFig.39に示す。1~6は、土師器である。1・2は小皿である。底部は回転糸切りで、内底部に撫で調整、外底部に板目圧痕が認められる。1は口径7.4センチ、器高1.2センチ、2は8.2~8.4センチ、2.0センチを測る。1は肉厚な割に体部の立ち上がりが小さく、2は器高が高い。3~6は、壺である。底部は回転糸切りで、4にのみ内底部の撫で調整と外底部の板目圧痕がみられる。口径11.2~12.9センチ、器高2.5~2.6センチである。7は、白磁の口禿皿である。施釉した後、口縁部の釉を削り取る。8は、瀬戸陶器の卸皿である。底部の2分の1程度の破片で、口縁部は出土していない。外底部は回転糸切りで、内底には窓で卸目が刻まれている。灰緑色の釉がかかり、体部下位から外底部は露胎となる。古瀬戸前三期に編年される。この他、中国陶器の小片が出土している。

13世紀後半の遺構である。

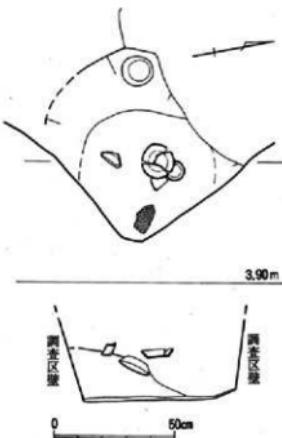


Fig.38 037号遺構実測図 (1/20)

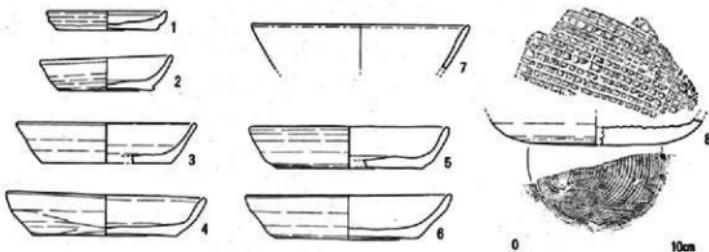


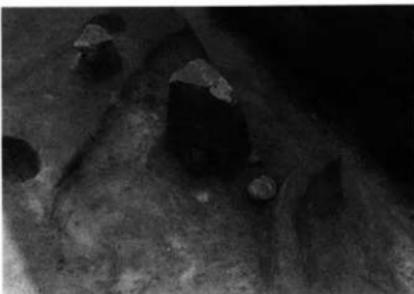
Fig.39 037号遺構出土遺物実測図 (1/3)

42号遺構

第3面より検出した大型の土坑である。過半が調査区の南西壁にかかり、全体の形状は知り得ない。検出面からの深さは、23センチを測る。

床面から若干浮いた状態で、土師器の皿・壺が出土した。

出土遺物をFig.40に図示する。1~4は、土師器である。底部は回転糸切りで、内底部には撫で調整、外底部には板目圧痕が残る。1・2は小皿で、法量はそれぞれ口径7.3~7.6・7.4センチ、器高2.0~1.4センチを



Ph.42 第6区042号遺構 (北より)

測る。3・4は壺である。口径11.9・12.2センチ、器高2.5~3.2・2.3~2.7センチを測る。この他、滑石製の石鍋の小片が出土している。13世紀頃の遺構と思われる。

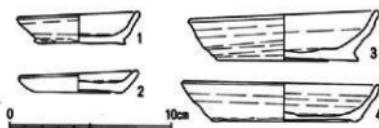


Fig.40 042号遺構出土遺物実測図 (1/3)

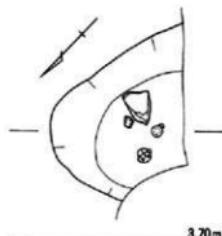


Fig.41 042号遺構実測図 (1/40)

62号遺構

第3面の北東壁中程より検出した土坑である。試掘トレンチの底から検出したが、土層実測図に見るよう、第1面から掘り込まれたものである。一部が調査区外にでているが、おむね直径100センチ前後の略円形を呈するものと思われる。第1面からの深さは、150センチ強を測る。土層図からみて、円筒形の土坑と思われる。埋土の堆積状況からは、掘り直しされていることがうかがわれる。土坑の形態的には、井戸を思わせるが、最下部の標高は2.35メートルと比較的高く、現在では水は湧かない。また、掘り直しの深さは標高3.0メートルにとどまるなど、井戸とは考えにくい。廃棄土坑と思われる。

出土遺物をFig.42に示す。1~3は、土師器である。底部は、回転糸切りである。1・2は小皿で、口径8.2・8.0センチ、器高1.5・1.9センチを測る。3は壺で、口径12.0センチ、器高2.9センチである。4は、瓦質土器のこね鉢である。口縁部は横擦りで、体部は刷毛目調整する。この他、白磁片・鉄釘が出土した。

15世紀頃と考えられる。

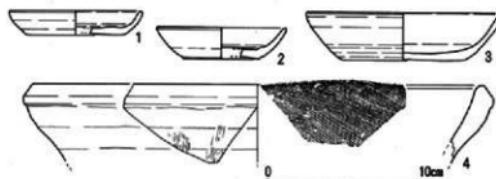


Fig.42 062号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.43 第6区062号遺構 (北東より)



Ph.44 062号土層断面 (南西より)

(7) 第7区(P区)

耕作土層までをバックホーで除去、以下遺構・遺物の状況を観察しつつ人力で掘り下げ第1～第4面の遺構検出面を設定した。調査区の面積は、28.5平方メートルである。

第1面

包含層の上半に堆積した風成砂層の上面で設定した、遺構検出面である。生活面として認識できる要素は薄いが、調査区は中央で、土器群を伴った土坑(01号遺構)に当たったため、あえて設定した。当初01号遺構以外に全く遺構が見えず、01号遺構を残して、全体に10センチほど掘り下げて、遺構検出を行った。標高は、3.57メートルを測る。

土坑・柱穴・溝などを検出しているが、遺構密度は極めて薄い。05号遺構は、東西方向を指す溝で、土師器・白磁・瓦器が出土した。越州窯系青磁破片も出土しているが、混入品と考えられる。11世紀後半の溝であろう。

第1面は、11世紀後半以降の遺構検出面である。

第2面

風成砂層の中程で設定した遺構検出面である。第1面の基盤層とは同一層であり、第1面で検出し



Ph.45 第7区1面(北西より)



Ph.46 第7区2面(北西より)



Ph.47 第7区3面(北西より)



Ph.48 第7区4面(北西より)

そこなった遺構を調査したものと考える。標高は、3.43メートルである。

溝状遺構・土坑・柱穴などを検出した。ほとんどの遺構から、底部を鋭切りする土師器壺が出土しており、遺構の時期が11世紀を主体とすることを示している。ただし、25号遺構は12世紀前半に下る（後述）。11号遺構・18号遺構から高麗青磁碗、28号遺構から高麗無釉陶器、15号遺構から越州窯系青磁が出土し、高麗陶磁器が比較的多くみられる。

第3面

褐色砂層上面で設定した遺構検出面である。標高3.3メートルを測る。

溝状遺構・土坑・柱穴を検出した。底部鋭切りで、体部を横撫する土師器壺や黒色土器A類が出士する遺構が多く、9~10世紀を主とする遺構検出面であることがわかる。

第4面

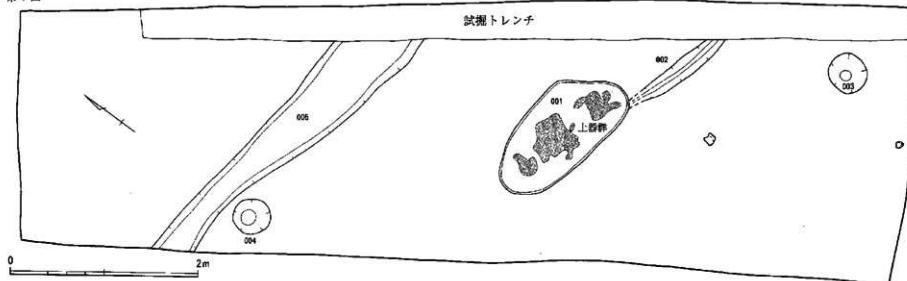
地山である砂丘砂層を、若干削り込んで設定した面である。標高は、3.15メートルを測る。

土坑・柱穴を検出した。遺構埋土は、褐色砂である。遺物が出土した遺構は極めて少なく、時期は決め難いが、第3面の年代観からみても、古代に属することは明らかである。ただし、76号遺構からは、底部糸切りの土師器皿・壺や瓦質土器などが出土しており、第2面以上から掘り込まれた遺構の掘り残しと思われる。

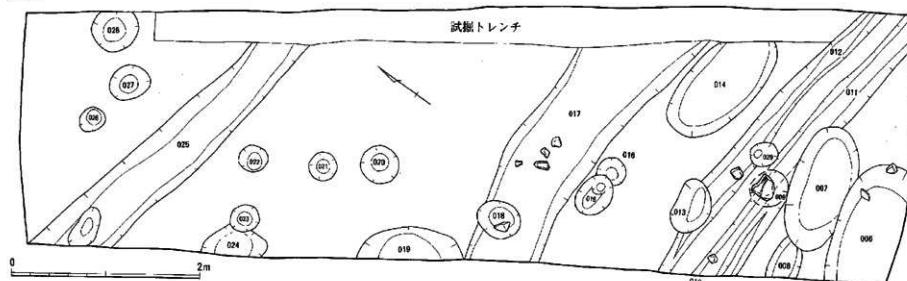


Ph.49
第5区～8区遺構
(北西より)

第1面



第2面



第3面

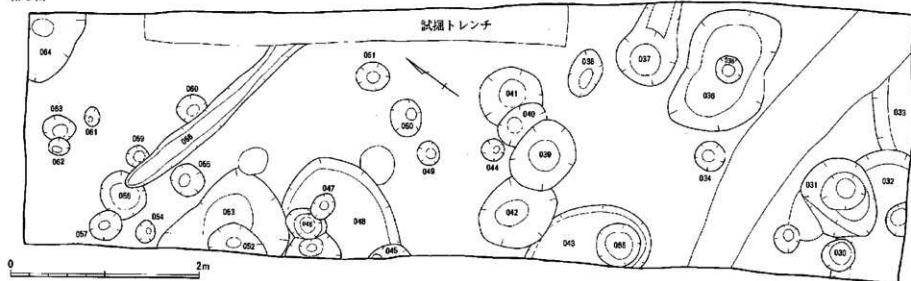


Fig.43 第7区1面～3面造構全体図(1/40)

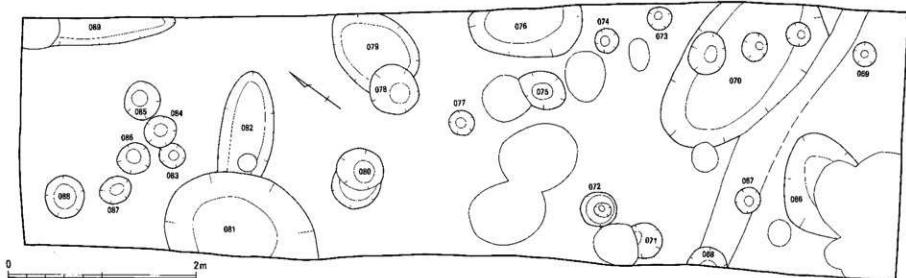
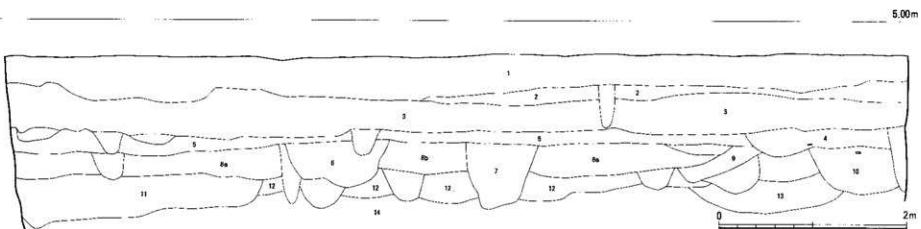
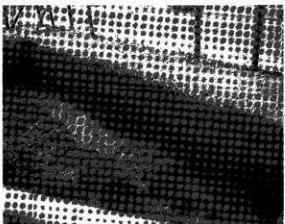


Fig.44 第7区4面遺構全体図 (1/40)



1. 表上、コンクリート・片岩などじむる
 2. 岩盤上:
 3. 灰色土
 4. 砂質砂質土
 5. 灰色砂質土、細粒が網目状に入る
 6. 灰色土上、災紋・土壌部まじり
 7. 短角褐色土
 8. 短角砂質土、細粒が網目状に入る。第1面・第3面
 a. 灰化物、跡しきまじり
 b. 灰化物、砂

9. 棕褐色土、灰化物・土壌部まじり
 10. 黑褐色土層
 11. 铅色土
 12. 黄褐色地帯、第3面
 13. 黄褐色
 14. 淡黄色土、地山、第4面



Ph. 50 第7区北東壁土層（南より）

Fig. 45 第7区北東壁土層実測図 (1/40)

01号遺構

第1面のはば中央で検出した土坑である。長軸164センチ、短軸82センチの長楕円形を呈し、検出面からの深さは3~4センチを測る。掘り下げ時にまず土師器の集積に当たり、その周囲を精査して土坑のプランを検出したものである。

出土遺物の一部をFig.46に示す。1~10は土師器である。1~5は、小皿である。浅く偏平な1~3、器高が高い4、両者の中間の5の三種が見られる。1~3は口径7.7~8.4センチ・器高1.0~1.25センチ、4は同じく7.5センチ・1.95センチ、5は7.8センチ、1.5センチを測る。6~10は壺である。6はひときわ大きく、口径16.6~16.8センチ・器高3.05センチ、7~10は同じく12.3~13.2センチ・2.9センチを測る。また、10においては、内面底部際の横撫でが強く、へこんだ様になり、逆に体部は外反して立ち上がつておらず、他と明らかに異なる形状を示す。



Ph.51 第7区001号遺構（北西より）

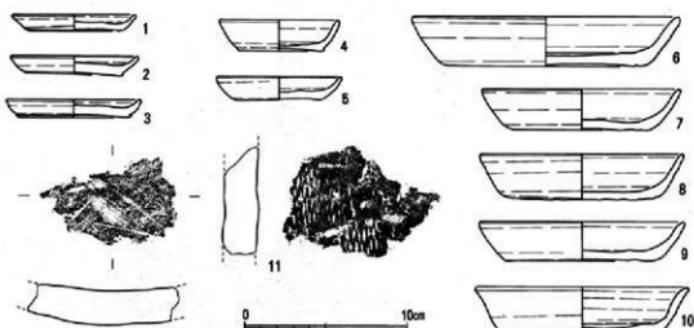


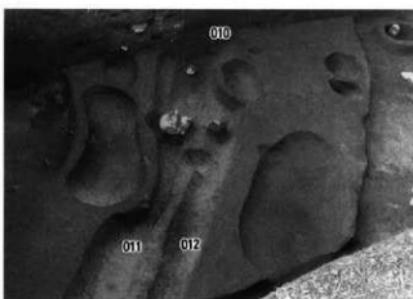
Fig.46 001号遺構出土遺物実測図 (1/3)

小皿・壺の底部は回転糸切りで、1・5~9には内底部に撫で調整、外底部に板目圧痕がみられる。11は、平瓦片である。表面には布目痕らしい痕跡があるが、はっきりとは見えない。背面には繩目の叩き痕が見られる。この他、瓦質土器鉢片・管状土錐・鉄滓が出土した。

13世紀後半の土師器廢棄であろう。

10号・11号・12号遺構

第2面の南近くで検出した、一連の溝状遺構である。11号遺構から12号遺構まで



Ph.52 第7区010号・011号・012号遺構（北東より）

を含めた全体が10号遺構で、その南壁に沿って、11号遺構、北壁に沿って12号遺構が走る。埋土は全体に暗褐色土で、それぞれの区別はつかない。おそらく、11号・12号遺構は10号遺構の床面に掘り込まれた溝で、切り合い関係は持たないものと推測される。主軸方位は、ほぼ東西を指し、N-84° -Wである。

10号遺構は、西端付近で幅80センチ、検出面からの深さ16センチを測る。遺物の出土はみられなかった。

11号遺構は、最大幅38センチ、検出面からの深さ26センチ、10号遺構床面からの深さは10センチ内外を測る。底部窓切りの土師器・高麗青磁碗・瓦器・須恵器破片などが出土している。

12号遺構は、最大幅33センチ、検出面からの深さ25センチ、10号遺構床面からの深さは10センチ内外を測る。底部を窓切りする土師器・須恵器などの破片が出土した。

出土遺物の一部をFig.47に示す。11号遺構からの出土であるが、10～12号遺構の遺物で図示に耐えたのは、これらのみである。1は、土師器の瓶である。細くて高い高台をつける。横振で調整する。2は、須恵器の壺であろう。内面は撫で、外面は叩きである。

図示できなかつたが、瓦器碗が出土したことから、11世紀後半の溝と思われる。

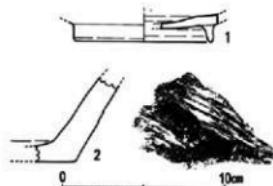


Fig. 47 011号遺構出土遺物実測図 (1/3)

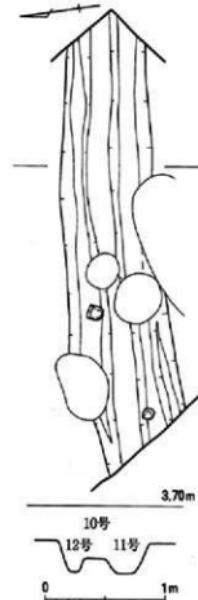


Fig. 48 010号遺構実測図 (1/40)

17号遺構

第2面の中程を東西に通る溝である。幅75～90センチで、検出面からの深さは11～15センチを測る。床面は、西から東に傾斜する。

土師器・瓦質土器鉢・白磁碗・鉄釘・鉄滓などが出土地した。

出土した土師器の一部を、Fig.49に示す。1は、小皿である。口径7.2センチ、器高1.9センチを測る。2・3は、壺である。口径・器高は、それぞれ12.2・2.5～2.8センチ、12.5～12.9・2.4～2.7センチを測る。1～3は、底部回転糸切りで、内底撫で、板目圧痕を持つ。4は、碗である。高台は高く、「ハ」字形に開く。横振で調整する。

4は混入遺物であり、14世紀頃の溝であろう。



Ph.53 第7区017号遺構（西より）

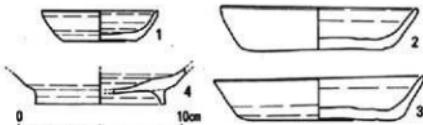


Fig. 49 017号遺構出土遺物実測図 (1/3)

25号遺構

第2面の北側から検出した溝状遺構である。幅47~62センチ、深さ8~10センチ、東から西に傾斜する。

出土遺物をFig.50に示す。1は、底部糸切りの土師器坏である。内底部に横撫で調整、外底に板目圧痕がみられる。口径16.0センチ、器高3.3センチを測る。2は、須恵器のこね鉢である。焼成はやや不良で、瓦質

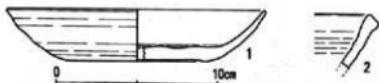
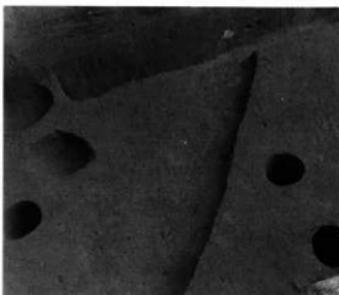


Fig.50 025号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.54 第7区025号遺構 (西より)

となる。外面ともに、横撫で調整する。東播系須恵器の可能性もあるうか。

12世紀代の溝であろう。

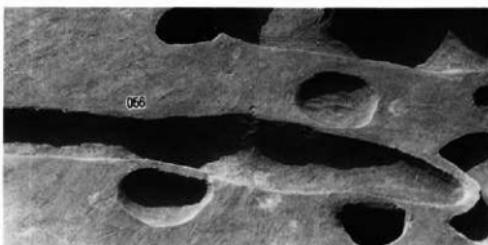
56号遺構

第3面の北側より検出した溝状遺構である。東から延びてきて、調査区内で止まる。最大幅30センチ、検出面からの深さ7~16センチを測る。埋土は灰黒色粘質土である。

出土した土師器を、Fig.51に示す。1は、坏である。横撫で調整で、底部は箆切りする。2は、壺の口縁部である。口縁端部は、内側に小さく張り出す。外面とも、横撫で調整する。この他、須恵器の破片が出土している。

8~9世紀頃の溝であろう。

Fig.51 056号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.55 第7区056号遺構 (北より)

76号遺構

調査区北東辺の中程で検出した土坑である。長軸123センチ、短軸80センチ（推定）の卵形を呈し、検出面からの深さは18~20センチを測る。埋土は、褐色砂である。

出土遺物の一部を、Fig.53に示す。1~4は、土師器である。1は皿で、底部を回転糸切りする。口径8.2センチ、器高1.65センチを測る。2~4は壺である。底部は回転糸切りで、2~4には内底部の撫で調整、外底の板目圧痕が残る。口径12.2~12.6センチ、器高2.8~2.9センチを測る。5は、白磁碗である。高台部分の小片で、内面には白濁した透明釉がかかり、外面は露胎となる。口縁部は

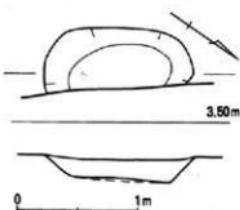


Fig.52 076号遺構実測図 (1/40)

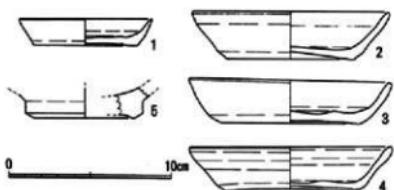


Fig. 53 076号遺構出土遺物実測図 (1/3)

玉縁になるものと考えられる。

この他、瓦質土器鉢・瓶・陶器・鉄釘が出土した。瓦質土器瓶片は、第8区の66号遺構や68号遺構出土破片と接合することができた。65頁、Fig.74-25に図示している。陶器には、ガラスが付着した破片がみられた。博多遺跡群から出土が報告されているような、陶器の壺を用いたガラス坩堝の可能性性が考えられる（山崎一雄・肥塚隆保・白幡浩志「博多で出土したガラスの材質と産地の推定」『博多研究会誌』第4号 博多研究会 1996年）。

13世紀前半前後の土坑であろう。

81号遺構

第4面の南西辺にかかって検出した大型土坑である。三分の一強が調査区外に出て、推定で長軸130センチ、短軸140センチ程度の卵形を呈すると思われる。検出面からの深さは、30センチ前後である。埋土は褐色砂であるが、炭粒が多く含まれていた。

土師器・須恵器片が出土しているが、小片のため、図示に耐えなかった。

古代に属する土坑と考えられる。

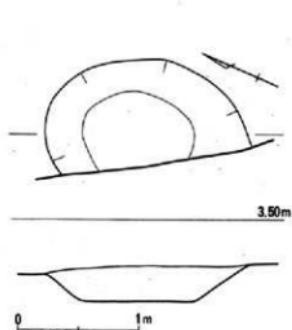
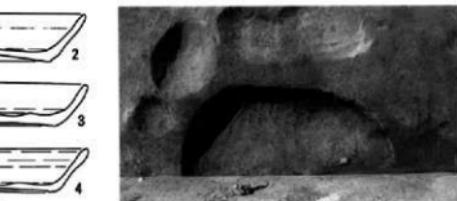


Fig. 54 081号遺構実測図 (1/40)



Ph. 56 第7区076号遺構 (北東より)



Ph. 57 第7区081号遺構 (北東より)

(8) 第8区(0区)

バックホーで耕作土まで除去し、以下人力で掘削し4面の遺構検出面を設定した。調査区のはば中央に大きな擾乱坑があり、南北に二分されている。第1面は北側のみで設定した面で、第2面以下は南北両側で設定した。面積は約60平方メートルで、今回の各調査区の中では最も広い。

第1面

旧耕作土を除去した直下の、褐色風成砂層上面で設定した遺構検出面である。調査区中央の擾乱坑の北側で設定したもので、南側では土器の包含こそ多いが遺構は捉えきれず、第1面の設定は断念した。標高3.68メートル前後を測る。

はば東西方向に幅140センチ前後の硬化面が走り、その南辺に沿って溝状遺構が伸びる(01号遺構)。北辺の一部にも溝状遺構が見られる。硬化面の累重が確認できることから、一時的に使用された、路地のような道路と思われる。02号遺構は、円形の土坑である(後述)。03号遺構は、深



Ph.58 第8区1面(北西より)

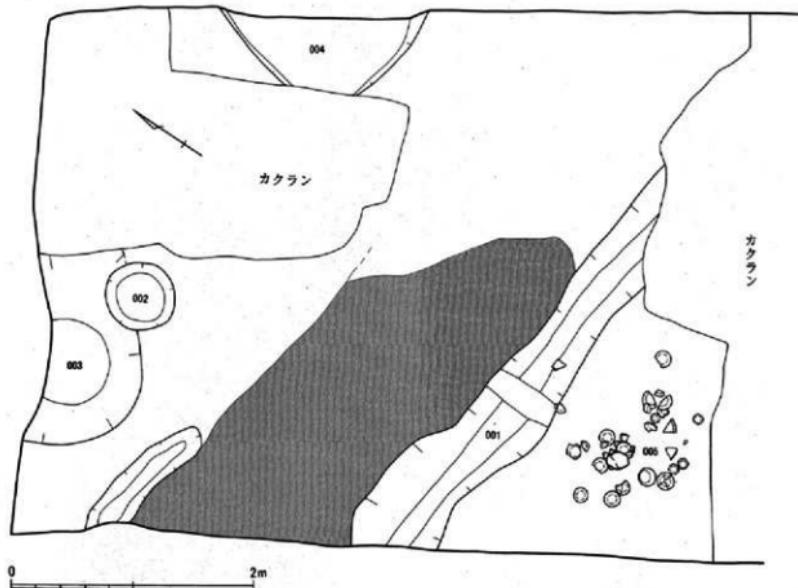


Fig.55 第8区1面遺構全体図(1/40)

さ60センチほどの円形の大型土坑であるが、半分弱が調査区外に出ており、全形を知り得ない。土師器（底部糸切り）・青磁（鎌蓮弁文碗）・白磁・鐵滓の他、陶器を転用したガラス堵塞性が出土しているのが注目される。04号遺構は、深さ23センチ前後で、壁がほぼ直立する、おそらくほぼ方形を呈する土坑である。土師器（底部糸切り）・青磁・白磁・陶器などの他、148頁、Fig.186-87に図示した銅製の留め具が出土した。05号遺構は、土師器を中心とした遺物の集積遺構である。土坑内に廃棄されたものと推測されるが、掘り形は確認できなかった。本来は、より上位から掘り込まれていたのであろう。

14世紀頃の遺構検出面と考えられる。

第2面

褐色風成砂層中位で設定した遺構検出面である。前述したように、搅乱坑の南側では第1面は設定できなかつた。そのため、とは言え、土師器を中心とした遺物が多く露出していたため、10センチほど掘り下げたところで遺構検出を試み、新たな遺構検出面を設定した。搅乱坑北側でも、これと合わせて遺構検出面を設定し、第2面としたものである。標高は、3.55メートル前後である。

柱穴・土坑を調査した。10号遺構は、直径110センチ前後、深さ75センチほどの円形土坑である。土師器（底部糸切り）・白磁・陶器片が、出土している。13号遺構は、試掘トレンチと搅乱坑に切



Ph.59 第8区2面南半(北より)



Ph.60 第8区2面(西より)



Ph.61 第8区3面(西より)

られて、全体を知り難いが、深さ30センチほどの土坑である。土師器（底部糸切り）・鉄釘に混じって、越州窯系青磁の香炉片が出土している（146頁、Fig.185-34）。16・25・27・28号遺構は、柱穴である。底部糸切りの土師器を中心出土している。1・12・14・15・26号遺構については、後述する。

第1面からの掘り下げ時に、古瀬戸壺・鉢皿（Fig.184-25）、越州窯系青磁碗、高麗青磁碗・青白磁梅瓶などが出土した。

14世紀前半頃の遺構を検出したものと思われる。

第3面

風成砂層を除去した、暗褐色土層の上面で設定した遺構検出面である。調査区の南東辺付近では、すでに地山砂層が顔を覗かせている。標高は3.3メートル前後を測る。

第4面では、溝状遺構・柱穴・土坑などを検出した。調査区中央の搅乱坑の北側で柱穴が多く、南側に大型土坑が集中している。また、溝状遺構も、北側に見られる。ただし、これらの溝状遺構は、連続性に欠け、また埋土が曖昧ではっきりしたプランがわかりにくいなど、遺構の認定に若干疑問の余地が残る。

37号遺構で、底部糸切りの土師器と竈切りの土師器が共存し、44・46・53・66・70・76号遺構では竈切りの土師器のみと、12世紀前半・11世紀に遡る遺構がみられるようになる。一方、搅乱坑南側に集中する土坑群は、14世紀前半を前後する時期のものが多く、第2面とあまり変わらないことが知られる。しかし、66号遺構や68号遺構に切られた70号遺構からは、底部竈切りの土師器と須恵器片が出土しており、11世紀以前の遺構が、南側にも展開していたことがうかがわれる。なお、南側の大型土坑群の先後関係は、70号→74号→66号→68号、66号→65号、73号→69号→74号→72号、69号→67号、79号→67号遺構となる。

これらの土坑は、おおむね廃棄土坑と考えられる。特に、67号遺構は、土師器皿の一括大量廃棄土坑で、今回の発掘調査では唯一の検出例となる。また、68号遺構は、隅丸方形を呈する大型土坑であるが、隅付近の壁面に柱穴を作り、断言はできないが、方形竪穴遺構である可能性が考えられる。

第2面からの掘り下げ時に、高麗青磁碗（Fig.185-32）・越州窯系青磁碗（Fig.185-35）などが出土している。

南北分で14世紀前後の土坑を検出してはいるものの、遺構検出面としては11～12世紀代の生活面を調査したものと言えよう。



Ph.62 第8区3面北半（西より）



Ph.63 第8区3面南半（西より）

第4面

地山である淡黄色砂層上面において設定した遺構検出面である。標高3.2メートル前後を測る。

第4面からは、柱穴・土坑などを検出した。遺構密度は薄い。

91号遺構は、褐色砂を埋土とする。ほぼ東西方に向かって落ちが走り、それから北側が全体的に褐色を呈していたものであるが、調査した結果は、あまり明瞭に遺構としての壁・床面を確認することはできなかった。単なる浅いくぼみであろうか。

104号遺構や105号遺構は、第3面の67号遺構の下に当たり、そのため、第3面調査時には確認できなかつたものであろう。107号遺構は、104号遺構に切られた小土坑である。土師器の壊が、3点出土している。内1点は、内面中央にスタンプ文を押した、白色系土師器である。調整手法的には在地土器と大差ないが、系統的に確認できない土師器である（後述）。時期的には、12世紀後半代の遺構であろう。

第4面は、おおむね古代の遺構検出面である。



Ph.64 第8区4面北半（西より）



Ph.65 第8区4面南半（西より）



Ph.66 第8区北東壁土層



Ph.67 第8区南東壁土層

01号遺構

第1面において、調査区を東西に通る溝状遺構である。幅43~62センチ、検出面からの深さ2~12.5センチで、東から西に傾斜する。断面は、浅い「U」字形を呈し、素掘りの溝と考えられる。

01号遺構の北側には、灰色の硬化面が広がっている。硬化面は、東半分において認められ、01号溝に沿って、幅140センチを測る。さらに、硬化面上の標高を検討すると、西から次第に高くなり、消

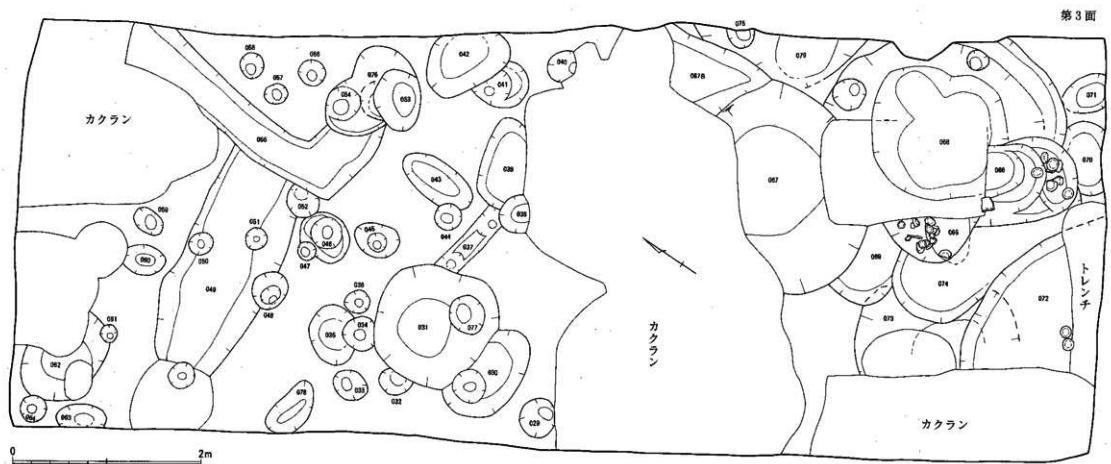
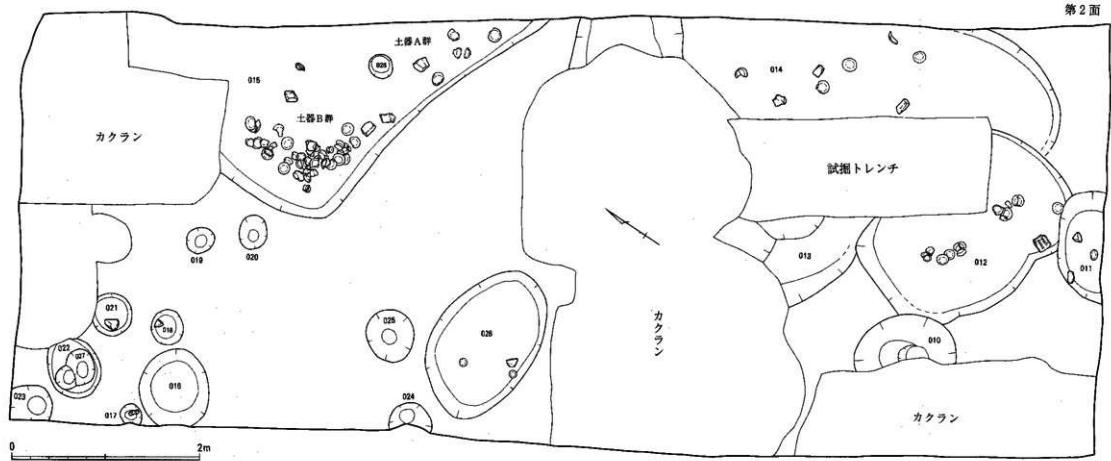
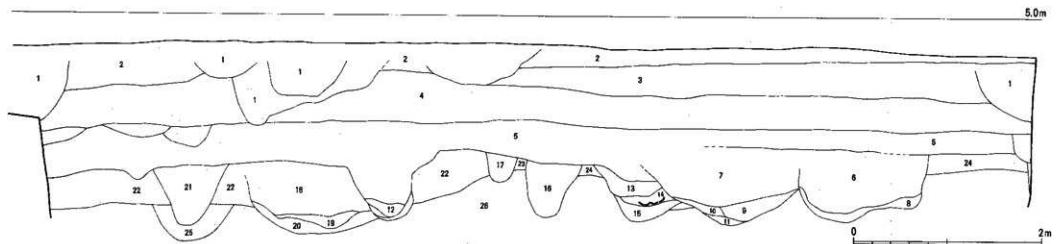
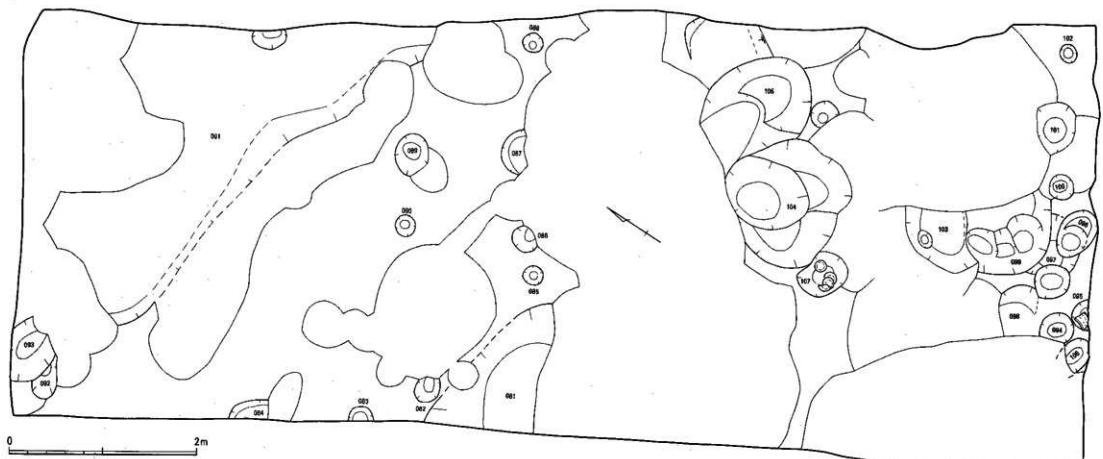


Fig.56 第8区2面・3面連構全体図 (1/40)



- 1. カクラン
- 2. 黒土、バラスまじり
- 3. 黒灰色土、炭粒まじり
- 4. 黒褐色土、田耕作土
- 5. 黄褐色土、細砂が網目状にはいる。第1面
- 6・7. 灰褐色土、細砂が網目状にはいる。
- 細砂は6・7で連続しており、6と7の境界は不明確である。
- 8. 淡黄褐色砂、暗褐色土粒を若干含む。
- 9. 灰褐色土、後灰・木炭の粗粒を含む。
- 10. 暗褐色砂質土
- 11. 淡黄褐色砂、暗褐色土粒を若干含む。
- 12. 暗褐色土
- 13. 暗褐色土、地山砂まで
- 14. 黄褐色土、下面に土御瓢を含む
- 15. 淡黄褐色砂、暗褐色土粒を若干含む。
- 16. 暗褐色土（淡黄褐色砂まじり）
- 17. 黄褐色土
- 18. 黄褐色砂質土
- 19. 淡黄褐色砂質土
- 20. 黑褐色砂質土、淡黄褐色砂まじり
- 21. 黄褐色砂質土
- 22. 暗褐色砂質土、第2面
- 23. 暗褐色砂質土、比較的かたくしめる。第2面
- 24. 黄褐色砂質土、第2面

Fig.57 第8区4面連構全体図・東北盤土層実測図 (1/40)

えていることがわかる。これは、01号遺構の底面の標高にも共通する。この状況からみて、灰色硬化面は、本来西から東に徐々に高まって続いていたものが、東側については削平されて失われたものと推測される。なお、硬化面の北側にも部分的だが、溝状遺構が認められる。

灰色硬化面はおそらく路面であり、01号遺構はその側溝であろう。

土師器（糸切り）・白磁・陶器片が出土した。

14世紀頃の道路・側溝であろう。



Ph.68 第8区001号遺構(西より)

02号遺構

長径61センチ、短径52センチの楕円形の土坑で、検出面からの深さは、21センチを測る。

埋土中位より、土師器壊が出土した。

出土遺物をFig.59に示す。すべて土師器の壊で、外底部は回転糸切り、1・3には内底の撫で調整と外底の板目圧痕が認められる。口径はそれぞれ12.4～12.8・12.6・13.0センチ、器高は2.55・2.5・2.55センチである。

14世紀前半頃の土坑である。

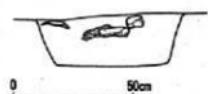


Fig.58 002号遺構実測図(1/20)

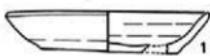


Fig.59 002号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.69 第8区002号遺構(西より)

05号遺構

第1面の、道路状遺構（01号遺構）の南側で検出した遺構である。土師器を中心とした遺物の集積遺構で、遺構検出時に随分と精査したが、土坑の掘り形などを確認することはできなかった。一応、土坑が削平されて、床面付近に廃棄された遺物のみが残ったと考えている。しかし、遺物自体はいささか散漫な分布を示しており、またその範囲が差し渡し150センチにも及んでいる。遺物の出土状況も、水平におかれた状況を示すものが多いなど、土坑の底に堆積したとは見なしにくい要素も認められる。

したがって、面的にばらまかれた遺物で、土坑を伴わない可能性もあるとして、判断は保留したい。なお、古瀬戸の折縁深皿の底部片は、01号遺構埋土の上から出土しており、02号遺構が01号遺構の埋没後の遺構であることは明かである。

出土遺物をFig.80に示す。1~29は、土師器である。1~9は、小皿である。底部は回転糸切りで、1・3・7・9の内底部には撫で調整が、外底部には板目圧痕が認められる。薄く偏平な1~7と、器高が高い8~9がある。前者は口径7.6~8.8センチ、器高1.2~1.55センチ、後者は口径8.6~9.0センチ、器高1.95~1.9センチを測る。さらに、前者では7が器肉が薄く均一で、体部の立ち上がりが深いという特徴を持つ。10~29は、坏である。底部は回転糸切りで、11・13・14・18・20~23・25・27~29には、内底部の撫で調整と外底部の板目圧痕が認められる。形態的にはバラエティーではなく、口径11.2~13.4センチ、器高2.5~3.0センチを測る。

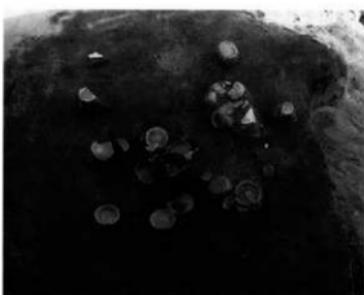
30・31は、貿易陶磁器である。30は、高麗青磁の碗である。口縁に外側から笠を当てて内側に押し込み、輪花に作る。31は、白磁の碗である。体部内面に、櫛描き文が見られる。

32は、国産陶器で、古瀬戸の折縁深皿である。底部片と体部片は別々に出土し、接合できない。全体に灰緑色の半透明釉をかけたものであるが、体部破片においては釉の剥落が目立つ。見込み中央には渦巻状の印花文を押し、見込みの縁には目痕が残る。古瀬戸中二期に編年される資料である。

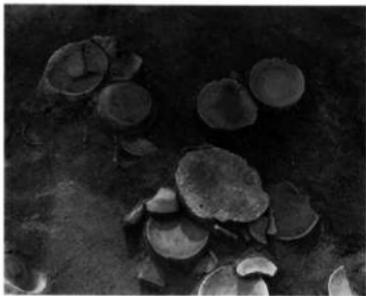
14世紀前半に位置づけられよう。



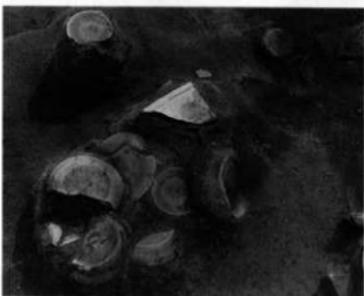
Ph.70 第8区005号遺構（北より）



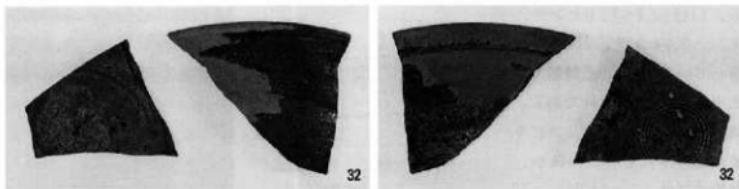
Ph.71 第8区005号遺構（南西より）



Ph.72 005号遺構土師皿、坏出土状況



Ph.73 005号遺構古瀬戸出土状況



Ph.74 005号遺構出土遺物

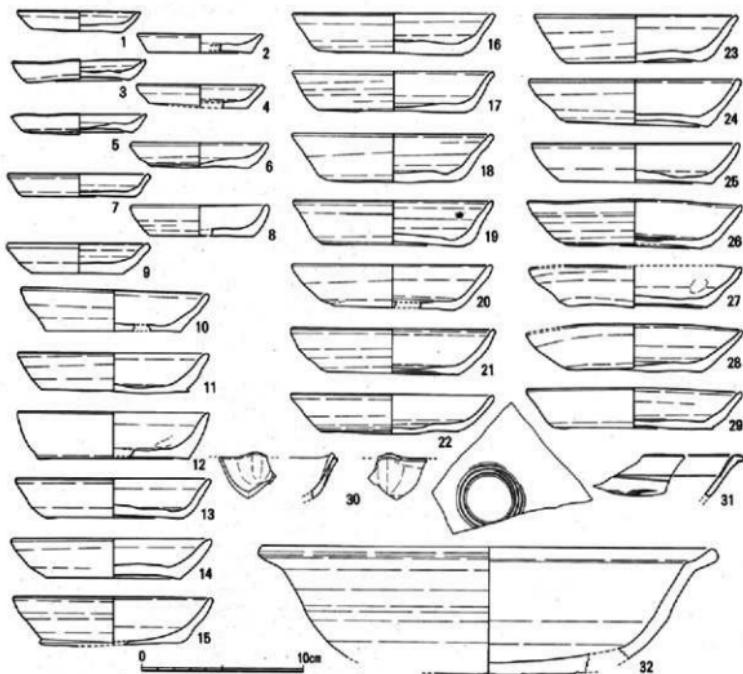


Fig.60 005号遺構出土遺物実測図 (1/3)

11号遺構

第2面の調査区南東辺中程から検出した土坑である。半ば以上が調査区外に出ているため、全形は知り得ない。長軸120センチ以上の楕円形と推測され、検出面からの深さは、40センチ前後である。

埋土中から、土師器の皿・壺を主とした遺物が出土した。

出土遺物の一部を、Fig.62に図示した。1~7は、土師器である。底部は、回転糸切りする。1~3は小皿で、口径7.2~7.8センチ、器高1.2~1.5センチ、短く急に立ち上がる体部を持つ。4~7は、壺で

ある。口径12.4~12.8センチ、器高2.6~3.0センチ、7には煤が付着している。8は、土師器の壺であろう。9は、平瓦片である。土師質がかった焼成で、コビキ痕跡が認められる。このほか、備前焼すり鉢 (Fig.64-30)・瓦質土器壺 (Fig.74-25)・鉄釘・鉄小札などが出土している。

14世紀前半の土坑である。

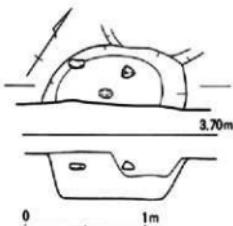


Fig.61 001号遺構実測図 (1/40) Ph.75 第8区011号遺構 (南東より)

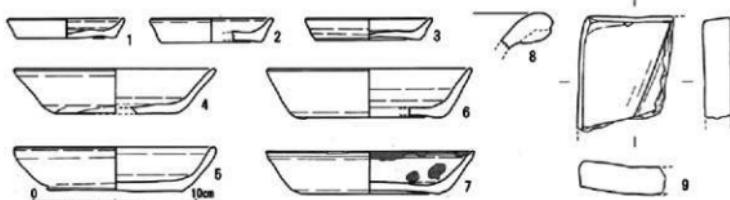


Fig.82 011号遺構出土遺物実測図 (1/3)

12号遺構

第2面から検出した大型土坑である。試掘トレンチのため、一部破壊されているが、長辺210センチ、短辺140センチの隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さは27センチ前後を測る。土坑床面は平坦で、直上及び埋土中位から、土師器を主とした遺物が出土している。

出土遺物をFig.64に示す。1~26は、土師器である。底部は、回転糸切りする。8・11~14・17~19・22~24~26には、内底部の静止撫で調整と外底部の板目圧痕が認められる。1~12は小皿である。1は、体部の立ち上がりが深く、器高が高い。口径7.3センチ、器高2.1センチである。2~5は、比較的器高が高い一群である。口径7.8~8.4センチ、器高1.6~1.9センチを測る。6~12は、浅い皿である。口径7.9~8.6センチ、器高1.05~1.5センチである。なお、4は、白色系土師器で、灯明皿に使われている。13~26は、壺である。口径12.2~13.2センチ、器高2.4~3.2センチを測る。26の底部には、切り込んだ様な痕跡が認められる。

27は、土鍋である。底部の内外は粗い刷毛目、内面は撫で調整、外面には指頭圧痕が残る。外面には、煤が付着している。28・29は、瓦質土器である。28はこね鉢で、内面は摩滅している。29は、すり鉢である。内面の刷毛目の上から、すり目が刻まれる。内面の下位は、使い込んで摩滅している。外面には、指頭圧痕が並ぶ。



Ph.76 012号遺構出土遺物



Ph.77 第8区012号遺構（北東より）



Ph.78 012号遺構出土遺物状況（西より）

30は、備前焼のすり鉢である。口縁部は、やや外傾して、平坦に面取りされる。すり目は、6本を単位とし、口縁端部いっぱいまで、刻み込まれている。なお、内面下位のすり目は、使用のため摩滅している。11号遺構・67号遺構出土破片と接合できた資料である。備前焼3期に編年される。

この他、青磁・白磁（口禿）・石英片（火打ち石？）・鉄釘などが出土している。

14世紀前半の土坑であろう。

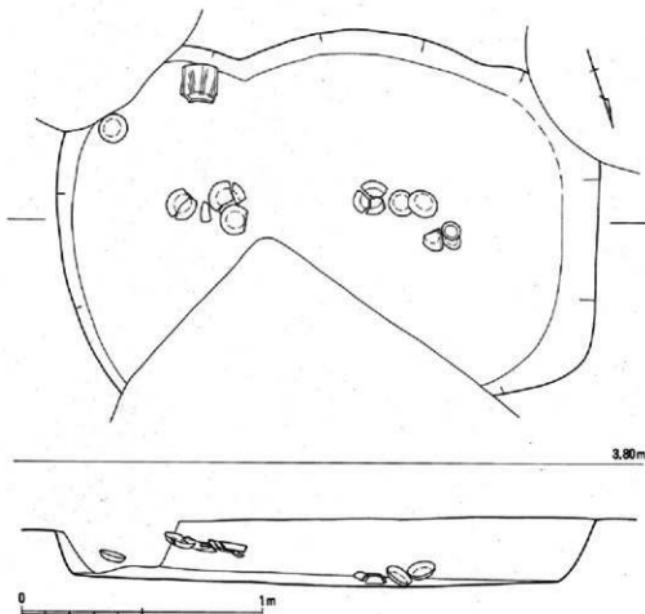


Fig.63 012号遺構出土遺物実測図 (1/20)

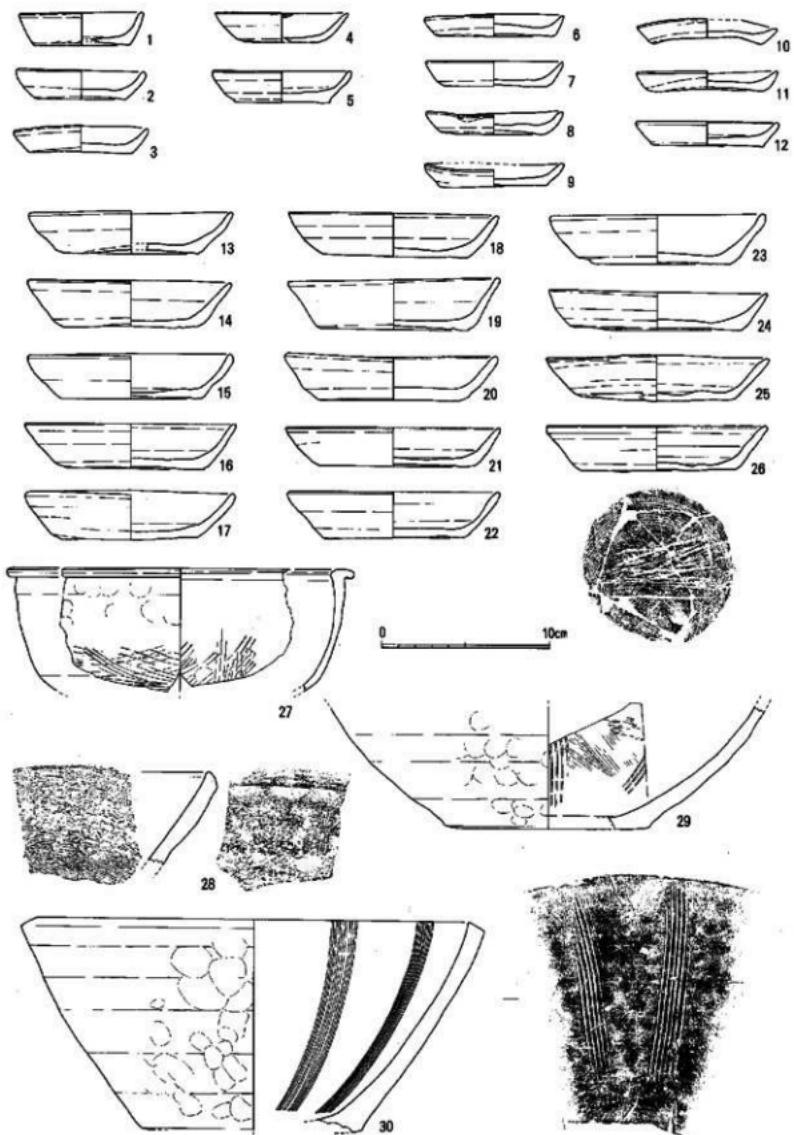


Fig.64 012号遺構出土遺物実測図 (1/3)

14号遺構

第2面の北東辺から検出した大型の土坑である。この範囲で土質が変わっており、第2面上では切り合い等の遺構の重複が確認できなかつたので、全体を14号遺構として認識した。しかし、調査区北東壁の土層観察では、これに合致する遺構は見えず、第3面の68号遺構・79号遺構の埋土上部が該当している。しかも、両遺構の埋土は、その上部、ちょうど第2面に相当する標高付近で、その分別ができなくなつており、これらの点からみて、14号遺構は68号遺構と79号遺構の上部を混同したものと考えられる。

なお、第2面調査時には、14号遺構の明瞭な底面は識別できず、この範囲を全体に25センチほど掘り下げたところで止めている。

出土遺物をFig.65に図示する。1~18は、土器である。1~5は皿で、底部を回転糸切りする。1は、口径6.6センチ、器高1.2センチと、ひときわ小さい。2~5は、口径7.8~8.8センチ、器高1.1~1.4センチを測る。6も皿であるが、底部は回転糸切りしている。口径10.4センチ、器高1.05センチとひときわ大きい。内面に、煤が付着している。7~17は、壺である。底部は、すべて回転糸切りする。口径12.1~13.8センチ、器高2.2~3.2センチである。7は、腰が丸く張り、部体が外反するなど、多と異なる形態的特徴を示す。なお、7と14には、部体に煤の付着が認められる。18は、高台のついた碗である。高台径は広く、高く「ハ」字形に踏張っている。

19は、古瀬戸の柄付片口である。取っ手部分と底部を欠く。全面に灰緑色の灰釉をかけている。注口は、口縁部をU字形に切り込んで、古瀬戸中4期に編年される資料であろう。

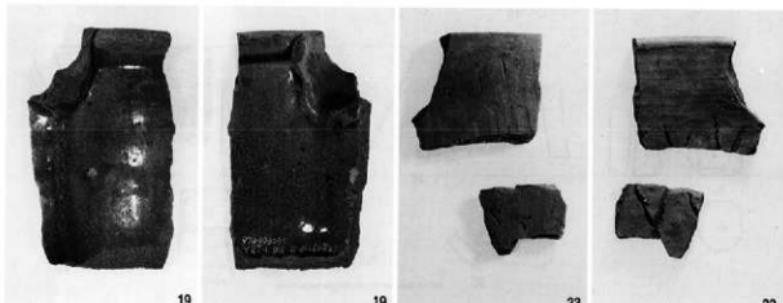
20・21は、白磁の碗である。20は口縁部を肥厚させる、いわゆる玉縁碗である。21は、口縁部



Ph.79 第8区014号遺構(南より)



Ph.80 014号遺構、遺物出土状況(北東より)



Ph.81 014号遺構出土遺物

を小さく外側に引き出す。

22は、土師器の壺である。口縁部は横撫で、体部には叩き痕跡がみられる。外面には、厚く煤が付着している。

23・24は、瓦質土器である。23は鉢であろう。外面は撫で上げ、内面は幅広の範磨きの上から、斜め格子状に深く切り込む。第3面の67号造構から、同一個体が出土している。24は、火舍である。

25は、土師器の支脚であろう。中央に極めて細い穴が貫通する。

26は、土師質土器のガラス培塗である。内面には、風化して白くなったガラスが、付着している。

27は、砥石である。黄灰色の凝灰岩で、仕上げ砥である。表裏面と小口面に使用痕が見られる。

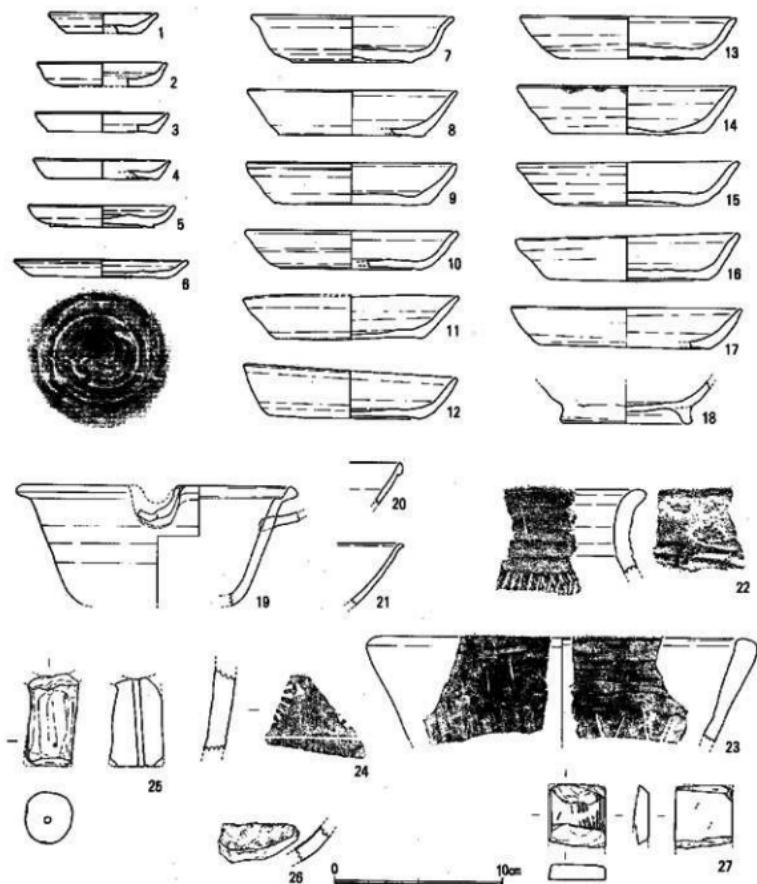


Fig.65 014号造構出土遺物実測図 (1/3)

15号遺構

第2面の北東辺から検出した土坑である。大半が調査区外に出るため、その形状は明かではない。遺構検出面からの深さは18センチ前後で、底面はほぼ平坦となっている。

2ヶ所において、土師器を主とした遺物の集中がみられた。調査区北東辺に近いものをA群、土坑の角に近いものをB群として、遺物取り上げを行った。

出土遺物の一部をFig.66・67に示す。Fig.66は、土師器である。1は、底部を窓切りする皿である。口径10.5センチ、器高1.6センチで、前代の遺物の混入と思われる。2・3は、碗である。肉厚で、高い高台が、貼り付く。底部は、窓切りである。1同様に、混入遺物であろう。

4～8は、小皿である。通常の偏平な一群と、器高が高いものとが見受けられる。4～7は前者で、口径7.5～8.8センチ、器高1.0～1.6センチを測る。底部は回転糸切りで、内底部には静止撫で調整が、外底には板目圧痕が認められる。8は、口径8.0センチ、器高2.0センチと、口径に対し器高が高い。また、器肉は薄手で均一となる。底部は回転糸切りする。内底の静止撫でと、外底の板目圧痕は見られない。4～6は、B群からの出土である。

9～39は、壺である。9～11は、A群から出土している。底部は回転糸切りで、内底部に静止撫で調整、外底部には板目圧痕が認められる。口径12.6～13.0センチ、器高2.7～2.9センチを測る。12～31は、B群から出土した土師器である。底部は回転糸切りで、12～22・26・27・29～31には内底部に静



Ph.82 第8区015号遺構（北西より）



Ph.83 第8区015号遺構B群（北より）



Ph.84 015号遺構土師壺出土状況（東より）



Ph.85 015号遺構瓦質火舍出土状況（南東より）

止撫で調整、外底部に板目圧痕が認められる。口径12.3~13.6センチ、器高2.6~3.1センチを測る。32~39は、A・B群以外の埋土から出土した坏である。底部は回転糸切りで、内底部に静止撫で調整、外底部には板目圧痕が認められる。口径12.2~13.2センチ、器高2.6~2.9センチを測る。

40は、瓦質土器の風炉である。口縁から体部上位にかけて、大きく窓が開く。ただし、遺存部位からは、窓の形状まではうかがえない。外面は上半で横位、過半で縦位の丁寧な範磨きを加える。また、中程と肩部には、菊花のスタンプを押す。内面は、上半と下位で横撫で、中程と内底には指頭圧痕が強く残る。なお、形状は不明だが、外底に脚が剥がれた痕跡があり、おそらく黒脚が付いていたもの

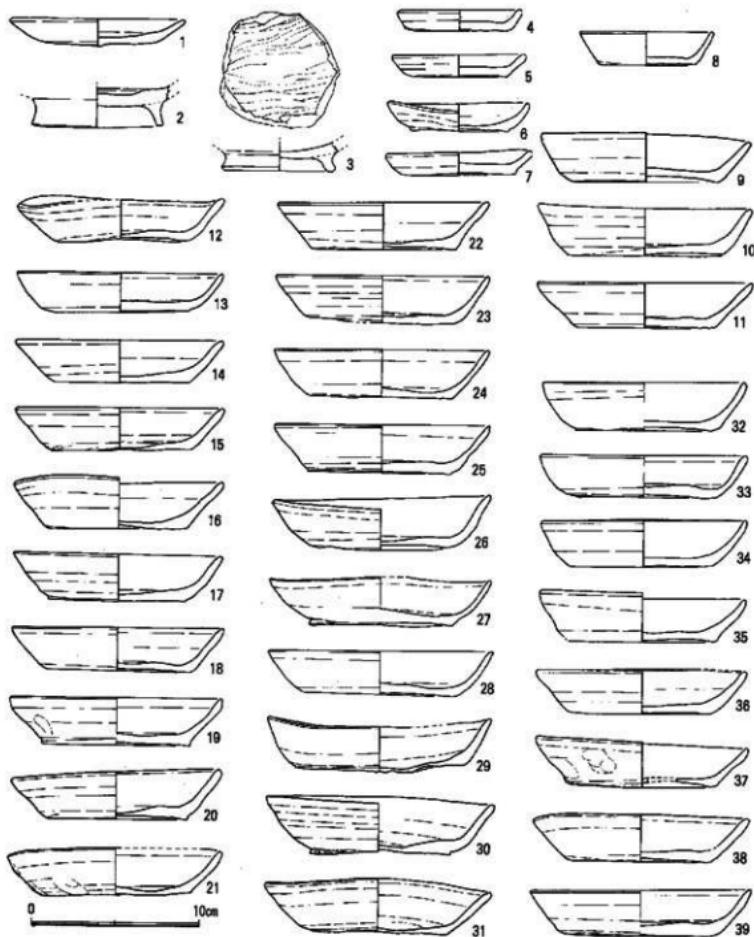
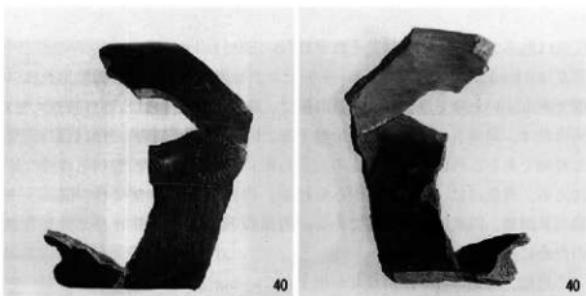


Fig.66 015号遺構出土遺物実測図1 (1/3)



Ph.86 015遺構出土遺物

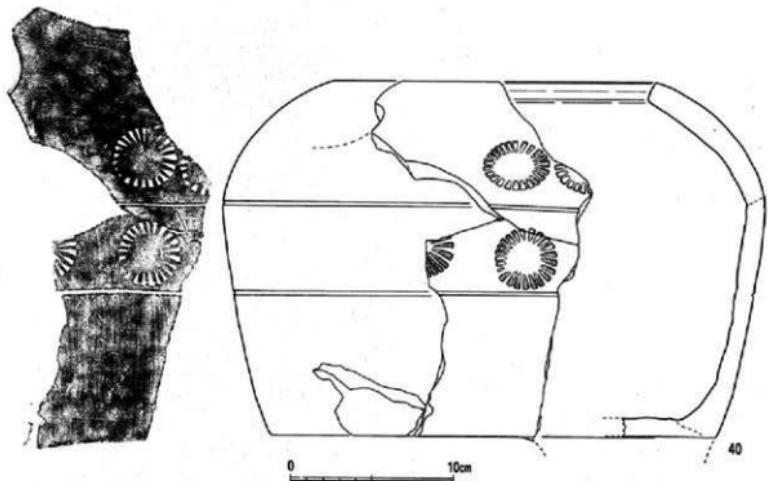


Fig.67 015号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

と推測される。B群から出土した。

この他、青磁・白磁・陶器などの小片・鉄釘が出土している。

14世紀前半頃の遺構であろう。

26号遺構

第2面の中程で検出した土坑である。第1面05号遺構の真下に当たる。長径170センチ、短径115センチほどの楕円形を呈し、検出面からの深さは14センチ前後を測る。埋土上面から、完形の土師器皿2枚が出土している。

出土遺物を、Fig.69に示す。1~3は、土師器の小皿である。底部は回転糸切りであるが、内底の撫で調整や、外底の板目

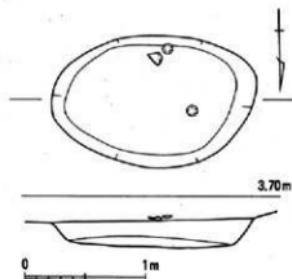


Fig.68 026号遺構実測図 (1/40)

圧痕は見られない。口径は、それぞれ7.8・8.0・8.2センチ、器高は1.1~1.3・1.2~1.5・1.25~1.55センチを測る。4は瓦器である。いわゆる底部押し出しの碗で、筑前型に属する。外面は、箝磨きする。暗灰色を呈する。5は、瓦質土器のこね鉢である。外面は指押さえの上から縦に刷毛目調整を加える。外底には、板目圧痕がみられる。内面は横方向の刷毛目調整、内底は撫で調整である。内面の下部は、使用のために擦れている。

この他、白磁破片・鉄釘などが出土している。

13世紀頃の土坑であろう。



Ph.87 第8区026号遺構（南より）

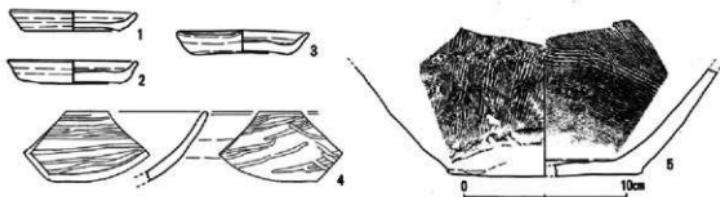


Fig.89 026号遺構出土遺物実測図 (1/3)

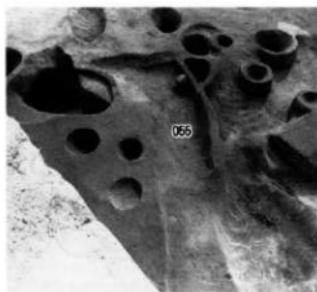
55号遺構

第3面の北東辺付近から検出した溝状遺構である。埋土は黒色土で、ほぼ直角に折れ曲がる。折れ曲がった内側は、全体的に褐色砂となるが、遺構埋土と見ることはできなかった。土層実測図によると落ち状を呈しているが、55号遺構はこれを切り込んでいることがわかる。

幅90~120センチ、検出面からの深さは5~12センチを測る。

出土遺物をFig.70に示す。1~6は、土師器である。1~3は小皿で、底部は回転糸切りする。内底部には撫で調整を加え、外底部には板目圧痕がみられる。法量は、それぞれ口径7.3・8.6・8.7センチ、器高1.1・0.8~1.2・1.4~1.7センチを測る。4~6は壺である。底部は回転糸切りで、内底部には撫で調整を加え、外底部には板目圧痕がみられる。法量は、それぞれ口径12.9~13.4・13.4・13.5センチ、器高3.1・2.6~2.8・2.4~3.0センチを測る。この他、砥石が出土している。

13世紀頃の遺構であろう。



Ph.88 第8区055号遺構（北より）

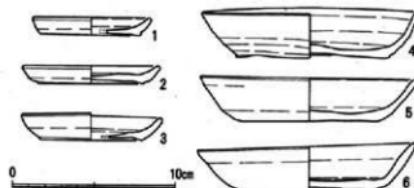


Fig.70 055号遺構出土遺物実測図 (1/3)

065号遺構

第3面撓乱坑南側の中程で検出した土坑である。試掘トレンチによって、半分ほどが失われている。遺存部分からみて、直径100強の円形を呈するものと思われる。遺構検出面からの深さは、53センチほどである。

埋土上面から、土師器・鉄小刀などが出土した。

出土遺物を、Fig.72に示す。1~14は、土師器である。1~10は、小皿である。器高が高い1~3と、偏平な4~10とがある。前者は口径6.2~7.5、器高1.9~2.1センチ、後者は口径7.8~8.3、器高1.2~1.7センチを測る。11~14は、壺である。口径12.0~13.0、器高2.5~3.2センチを測る。1~4・7・9・10・11・14には、内底部の撻で調整、外底部の板目压痕がみられる。15は、土師質土器のこね鉢である。16は、龍泉窯系青磁の箇蓮弁文碗である。17は、鉄製小刀である。

14世紀前半頃の土坑であろう。

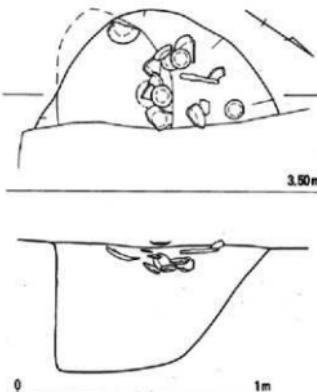
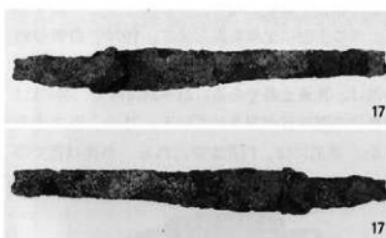


Fig.71 065号遺構実測図 (1/20)



Ph.89 第8区065号遺構 (北東より)



Ph.90 065号遺構出土遺物

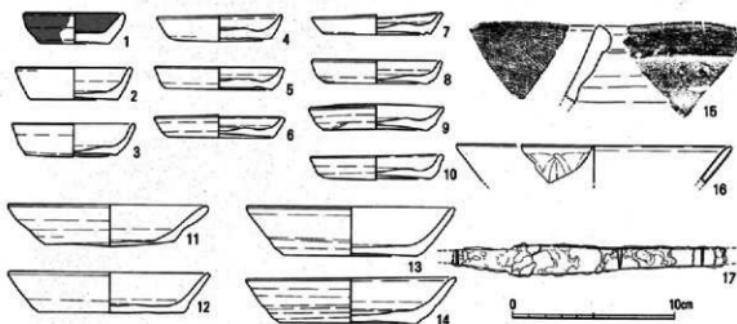


Fig.72 065号遺構出土遺物実測図 (1/3)

66号遺構

第3面推乱坑南側の中程で検出した土坑である。試掘トレンチによって、半分ほどが失われている。

調査が進む過程で、土坑床面が二段掘り状になることが判明、検討の結果、遺構の重複で、上半部が下半部を切るものと考えられた。よって、上半部を66A号、下半部を66B号遺構とする。

出土遺物をFig.74に図示する。66B号遺構の出土遺物は少なく、1・2・6・7・12・24が図化できたのみで、他は66A号遺構の遺物である。

1~18は、土器である。1~5は小皿で、口径7.8~8.4、器高1.0~1.35センチを測る。6~16は、壺である。6は、丸みが強く深いもので、口径12.4、器高3.2センチである。7~16は、口径12.4~13.4、器高2.6~3.05センチを測る。これら的小皿・壺は、底部は回転糸切りで、内底部には撫で調整を加える。17・18は碗の口縁部であろう。胎土は、きめ細かく緻密である。18は、口縁部を外方に捻り出し、その上面に沈線を巡らせる。19は、白磁の碗である。20は陶器の鉢で、茶褐色の釉を施す。21~25は、瓦質土器である。21~24は鉢で、24には4本単位の摺り目が刻まれている。25は、壺であろうか。底部には、円孔が穿たれる。外面は笠で面

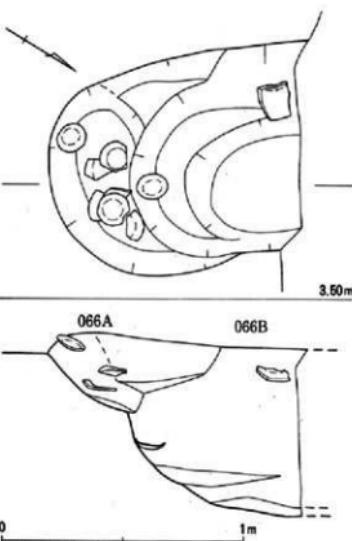
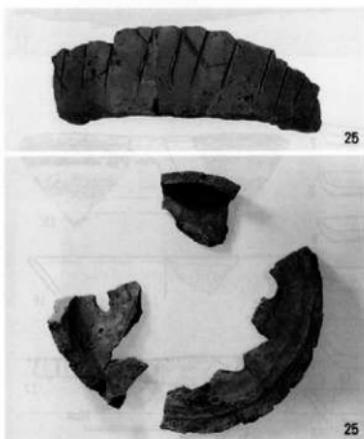
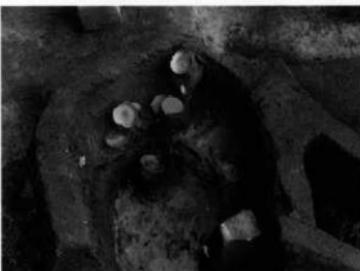


Fig.73 66号遺構実測図 (1/20)



Ph.91 066号・068号遺構出土遺物



Ph.92 第8区066号遺構 (北西より)



Ph.93 066号遺構瓦質鉢出土状況

取りし、鋭いT工具で斜め格子を刻む。黄褐色に焼成される。2面11号遺構・3面68号遺構・第7区4面76号遺構出土土破片と接合関係にある。この他、常滑焼き6a期の壺口縁が出土した。

出土遺物からは、66A号と66B号遺構に時期差は感じられず、13世紀後半頃の土坑と考えられる。

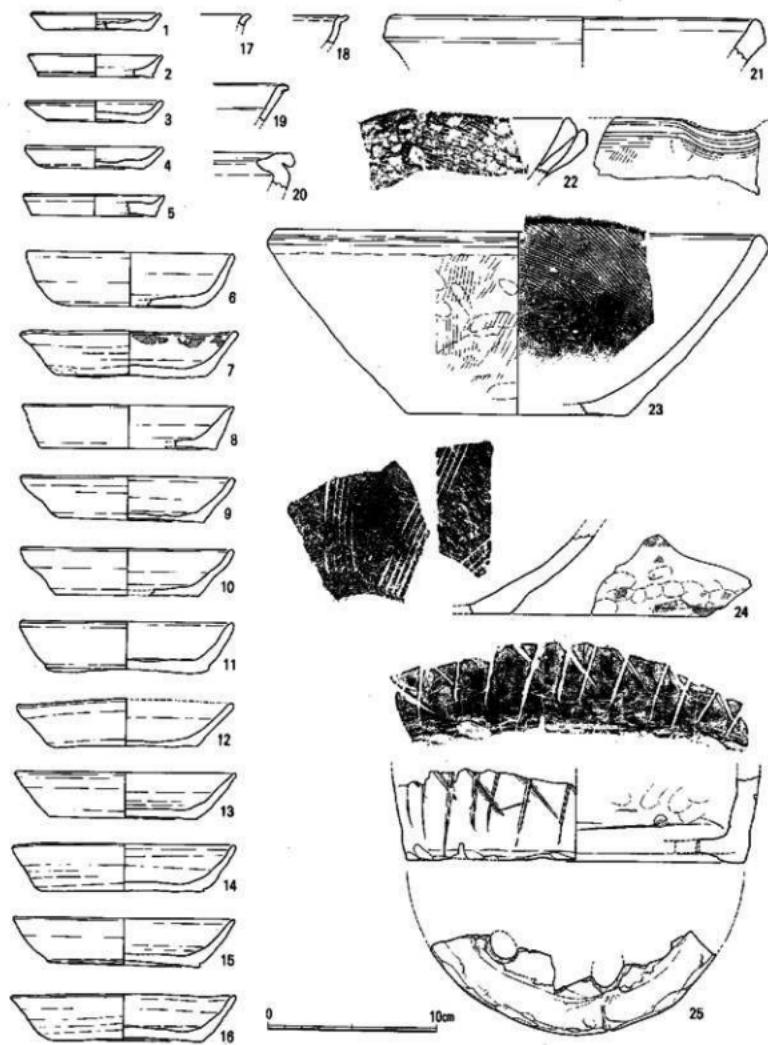


Fig.74 086号遺構出土遺物実測図 (1/3)

67号遺構

第3面の搅乱孔南側で検出した大型土坑である。搅乱と試掘トレーニングのため、全体の二分の一強を失っている。遺構検出時には北側に長く延びるプランを想定したが、調査の結果、遺物の出土状況、土坑底面の形状などから、北側は南側に切られた別の土坑（67B号遺構）と考えるにいたった。67B号遺構からは、出土遺物がなく、今回の報告からは除外する。

67号遺構は、長径230センチ以上、短径180センチ（推定）の梢円形を呈するものと推測される。土坑底部は船底形で、最も深い部分で、遺構検出面から、48センチを測る。

土坑床面から若干浮いた状態で、大量の遺物が出土した。遺物の中心は土師器の皿・壺で、完形品も多く含んでいた。いわゆるかわらけ廃棄土坑であり、饗宴などに際して使い捨てにされた土師器皿・壺を、一括廃棄した土坑と考えられる。ちなみに、小破片を除いた、法量の計測が可能なもので、土師器皿22点・壺70点を数える。これは、接合・同一個体の同定を経た後の数値であり、個体数と読み替えてても大過ない数値である。したがって、おおむね皿1対壺3の割合で、用いられたものと見ることが可能であろう。

出土遺物の一部をFig.76に示す。1~47は、土師器である。1~12は皿で、浅く偏平な1~10・やや小さ目だが深い11・器高が高く壺をそのまま小型にしたような12の3タイプがある。1~12は、口径

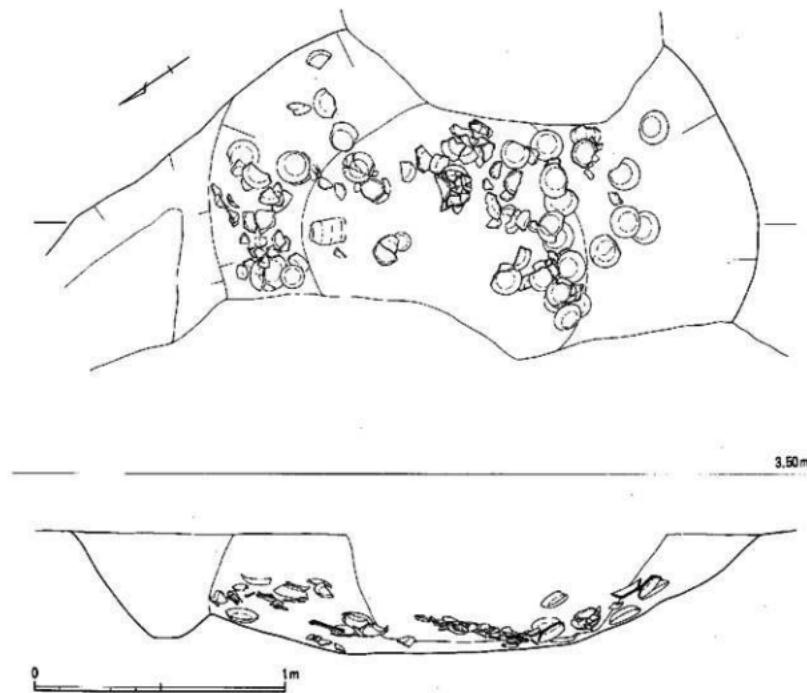
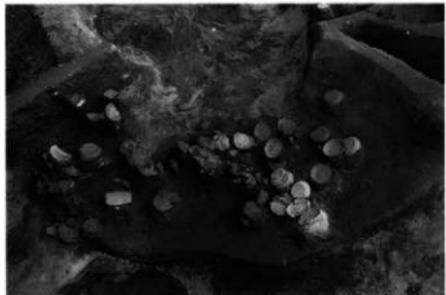
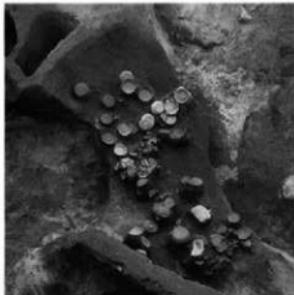


Fig.76 67号遺構実測図 (1/20)



Ph.94 第8区067号遺構（西より）



Ph.95 第8区067号遺構（北京より）



Ph.96 第8区067号遺構（北西より）



Ph.97 067号遺構遺物出土状況（北西より）

7.9~9.0センチ、器高0.8~1.7センチを測る。11は口径7.0センチ、器高1.5~1.6センチ、12は同じく8.0センチ、2.0センチを測る。13~47は壊である。標準的なプロボーションの13~43・45に対し、浅目の44、明らかに大振りな46・47に分かれる。標準的なものでは、口径12.3~13.9センチ、器高2.3~3.2センチ、44は口径12.8~13.4センチ、器高1.9~2.1センチ、大型の46・47ではそれぞれ口径16.4~17.8、器高4.1~3.3センチを測る。なお、土師器皿・壊の底部はすべて回転糸切りであり、1・3・11・13・14・17~25・27・29・30・32・34・35・37・38・43・44の内底部には静止糸で調整、外底には板目圧痕がみられる。

48は、瓦器碗である。内外面の範磨きは、幅広で単位がつかみにくい。体部下半には、指頭圧痕が並ぶ。回転台成形であり、在地産であろう。

49~54は、輸入陶磁器である。49は、越州窯系青磁の小片である。胎土は肌理細かく良質で、精製品である。50~54は、白磁である。50は、口縁部の釉を掻き取る、いわゆる口禿の皿である。51~53は、玉縁状口縁の碗である。54も碗の底部で、体部下位から高台部分は露胎となる。

この他、第2面14号遺構出土遺物と同一個体の瓦質土器鉢 (Fig.65-23)・青白磁小片・青磁小片・瓦片 (コピキ)・須恵器片・鉄釘などが出土している。前述したように、出土遺物の77パーセント前後を土師器皿・壊が占める。

13世紀後半から14世紀前半ころの土坑であろう。

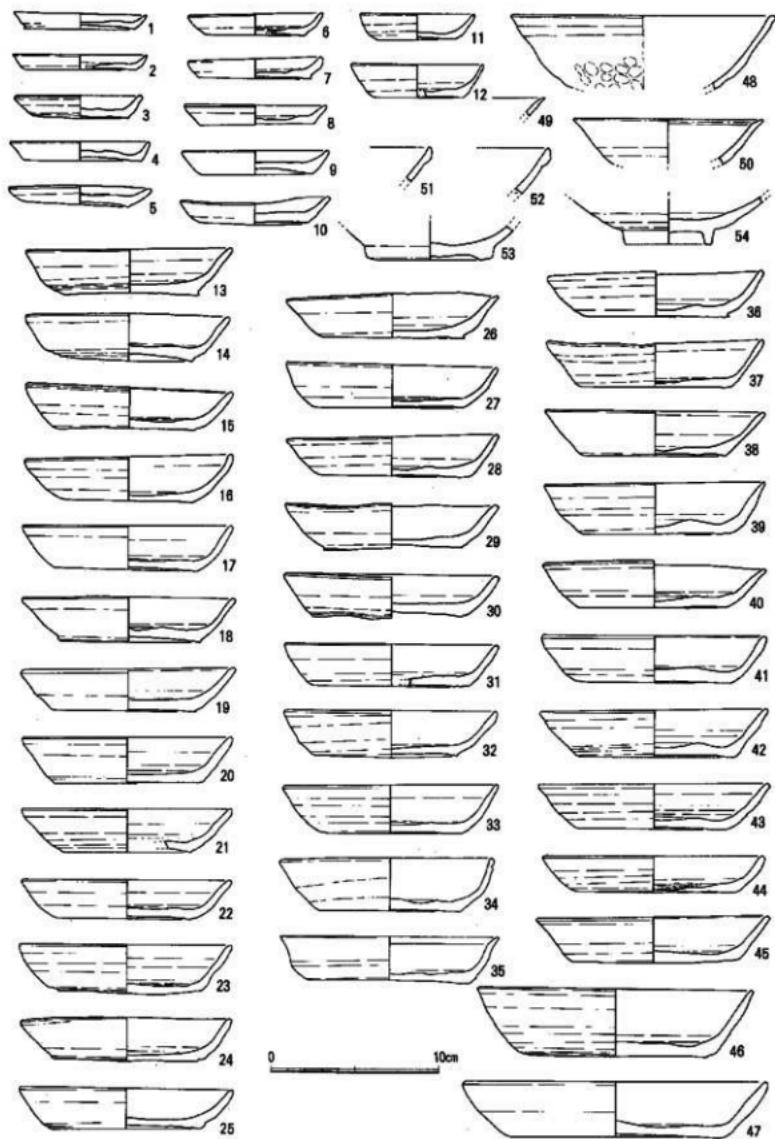


Fig. 76 067号遺構出土遺物実測図 (1/3)

68号遺構

第3面の北東壁際から検出した大型の土坑である。土坑のほぼ中央部分を試掘トレーナーに、南辺付近を66号遺構に、西角付近を65号遺構に切られ、全形をとどめていない。おそらく、一辺200センチ程度の隅丸方形、もしくは直径270センチ程度の略円形を呈するものと思われる。壁面は二・三度傾斜を変えつつ斜めに立ち上がり、底面は平坦で、全体として逆台形の断面を呈する。遺構検出面から底面までの深さは、95センチ前後である。

壁面の二ヶ所から柱穴が検出された。埋土上面から掘り込んだものではなく、本土坑に伴ったものであろう。試掘トレーナーや66号遺構に切られた部分に、これと対応する柱穴があって、四本柱が配されていたものと考えられる。検出し得た二本の柱穴の間隔は、心々で135センチを測る。

以上の点からみて、四本の柱で上部構造（小屋組み）を支える、半地下式の建物遺構と思われ、いわゆる方形竪穴遺構に該当するものであろう。遺構の機能としては、地下貯蔵庫を考えたい。

出土遺物をFig.78に示す。1~5は、土師器である。底部は回転糸切りする。1~3は皿であるが、坏を小型にしたような深い体部を持つ1・2と、浅く偏平な3がある。前者は、それぞれ口径7.4・8.6センチ、器高1.7・1.9センチ、後者は口径8.4、器高1.2センチである。2の底部は、穿孔されている。4・5は坏である。内底部には、静止撫でが見られる。口径12.1・13.7、器高2.6・2.7センチである。6は、白磁の碗である。7は、瓦質土器である。内面は横方向に範磨き、外面は研磨の上から斜め格子の沈線文を刻む。器面は、燃べられて灰色を呈する。火舎であろうが、Fig.74-25に示した瓶片も出土しており、同一個体の可能性もある。8は、方柱状の石製品である。完形品である。一方の端近くには、細沈線が数条刻まれている。小豆色の凝灰岩を用いる。9は、古墳時代の耳環である。銅地に鍍金する。

13世紀後半頃の土坑であろう。

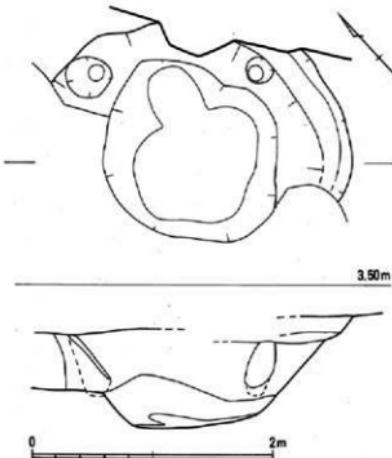
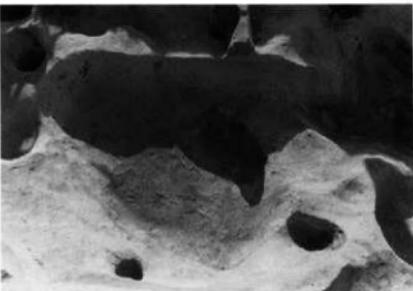
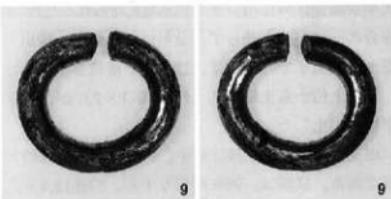


Fig.77 068号遺構実測図 (1/40)



Ph.98 第8区068号遺構 (北東より)



Ph.99 068号遺構出土耳環

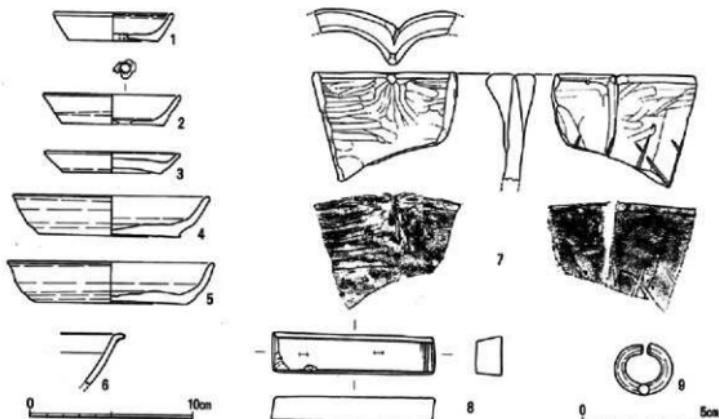
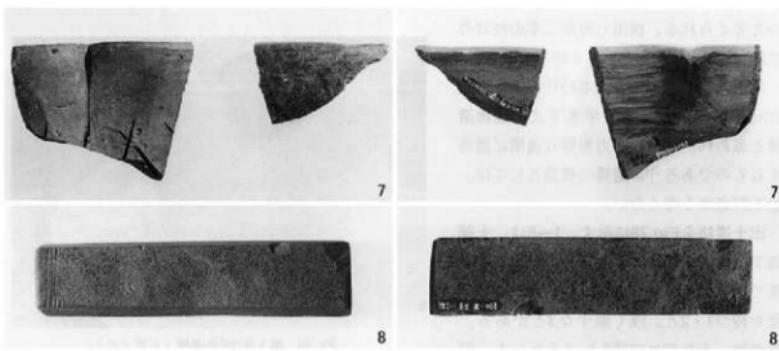


Fig. 78 068号遺構出土遺物実測図 (1~8…1/3, 9…1/2)



Ph.100 068号遺構出土遺物

72号遺構

第3面南角付近から検出した大型土坑である。大半が調査区外に出、また攪乱坑に切られるため、四分の一ほどしか残らず、全形は知り難い。検出面から底面までの深さは、12センチ前後を測る。

埋土上位から土師器壊 (Fig.79-1・2) が、水平面で出土した。

出土遺物を、Fig.79に示す。1・2は、土師器の壊である。底部は、回転糸切りする。口径12.4・12.8、器高2.8・2.6センチを測る。3は、瓦器碗で



Ph.101 第8区072号遺構 (南東より)

ある。内外面ともに、幅広で粗い分割磨きが加えられている。筑前型瓦器に属する。4は、灰釉陶器の碗である。横拂で調整で、釉は薄く刷毛塗りされている。3・4は、時期的に遡る混入遺物である。

13世紀代の土坑であろう。

74号遺構

第3面南側から検出した土坑である。65号遺構・66号遺構・72号遺構に切られ、全形は知り得ない。遺構検出面から底面までの深さは、40～50センチを測る。

出土遺物の一部をFig.80に図示する。1・2は、土器類の小皿である。底部は、回転糸切りする。1は口径6.9～7.3、器高1.5～1.9センチと、小さい割に深い。2は浅い皿で、口径8.6、器高1.3センチを測る。3は、土器の土鍋である。目の粗い刷毛目の上に、不定方向の拂で調整を粗く加える。外面には、煤が付着している。

この他、瓦質土器片・青磁鑄蓮弁文碗片などが出土している。

13世紀代の土坑であろう。

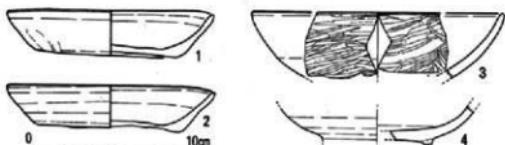
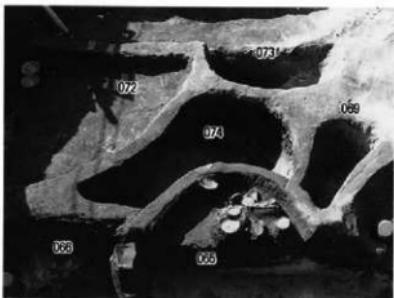


Fig.79 072号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.102 第8区074号遺構 (北東より)



Fig.80 074号遺構出土遺物実測図 (1/3)

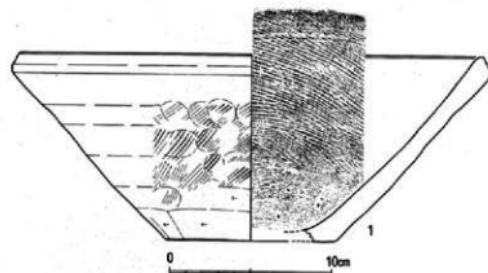
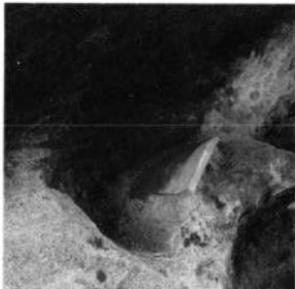


Fig.81 095号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.103 第8区095号遺構 (北より)

95号遺構

第4面南東辺から検出した、柱穴状の小ピットである。半分ほどが、調査区外に出る。直径32センチ前後の円形を呈するものと思われ、遺構検出面からの深さは、10センチ程度を測る。

埋土上面から、瓦質土器鉢片が出土した。

出土遺物をFig.81に示す。1は、瓦質土器のこね鉢である。内面は右下がりの刷毛目調整、外面は指押さえの上から右上がりの刷毛目を加える。外面の下位は、手持ち範削りを横方向に行う。第3面66号遺構出土の瓦質土器こね鉢と類似するが、細部が若干異なっており、この相違を遺存部位の違いによる微差と見れば、同一個体の可能性がある。

13世紀の遺構であろう。

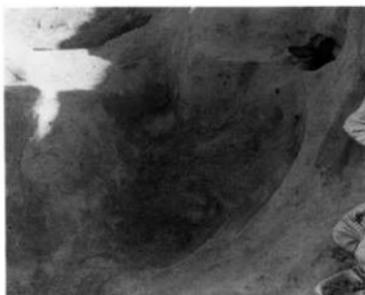
104号遺構

第4面の南半から検出した土坑である。位置的には、第3面67号遺構の直下に当たり、これに先行するものと知れる。

差し渡し130~150センチほどの不整形を呈し、実測図にすると数基の遺構の切り合いのように見えるが、実際には単一の土坑と考える。遺構検出面から細下部までの深さは、65センチ程度を測る。

出土遺物の一部を、Fig.82に示す。1は、土器の小皿である。底部は、回転糸切りする。口径8.1、器高2.0センチを測る。2は、白磁の碗である。口縁を玉縁に作る。3は、須恵器の壺身である。体部下半は回転範削りで、底部に範記号がみられる。この他、白磁片・鉄釘などが出土した。

12世紀後半の土坑と考えられる。



Ph.104 第8区104号遺構（南西より）

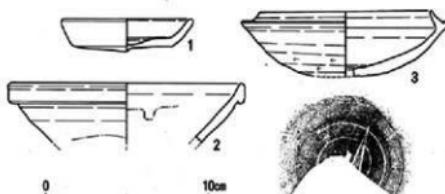


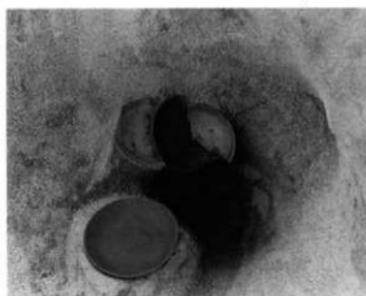
Fig.82 104号遺構出土遺物実測図（1/3）

107号遺構

第4面の南半から検出した土坑である。位置的には、第3面67号遺構の南肩付近に重なり、これに先行するものである。

長軸53センチ、短軸38センチほどの小判型を呈し、深さは33センチを測る。

埋土の中程から、土器の壺が出土した。土器壺は全部で3点あり、2点が完形、1点がちょうど中程で割れていた。割っていた壺は、後述するが在地土器の系統に載らないもので、二折した破片が、在地土器の1点を挟むように重ねられ



Ph.105 第8区107号遺構（北より）

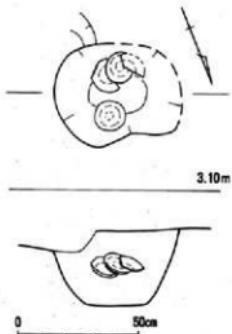


Fig. 83 107号遺構実測図 (1/20)

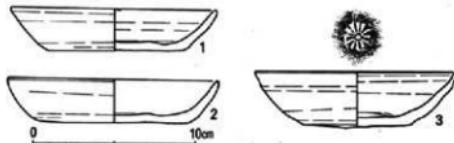
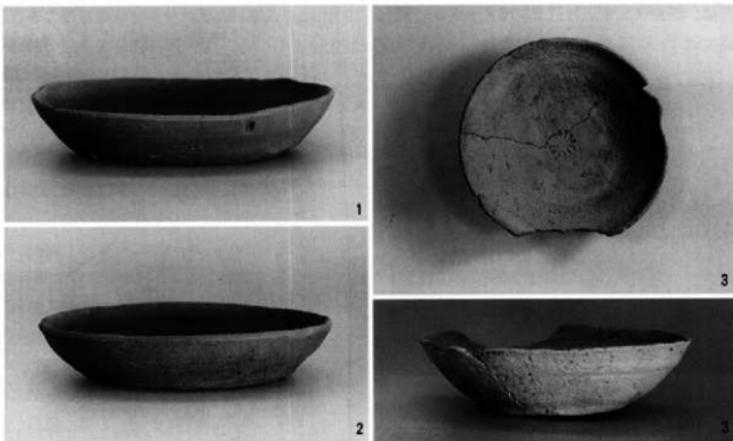


Fig. 84 107号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 106 107号遺構出土遺物

ていた。極めて意図的な出土状況であり、祭祀的な要素を感じられる。

出土遺物をFig.84に示す。埋置されていた土師器の壺である。すべて底部は回転糸切りする。1・2は、在地産である。それぞれ口径12.7・13.2～13.6、器高2.6・2.7センチを測る。胎土は、若干の砂粒を含むものの粉質で、赤茶色を呈する。3は、在地の系統には属さない壺である。口径12.6、器高3.5センチであるが、底径が小さく、体部は大きく開いている。胎土は、全体に肌理が粗い砂質で、焼成は良く、黄褐色を呈する。また、見込み中央には、菊花文のスタンプが押される。形態的には、豊前の土師器壺に類似するが、胎土の上からはやや異なるように思う。現時点では、非在地とするにとどめ、系譜的には今後の課題としたい。

12世紀後半頃の祭祀遺構であろう。

(9) 第9区(N区)

民家の門の直前に設定した調査区で、面積も狭かったため、重機が入れられず、人力で表土を掘削した。旧耕作土まで除去した後、4面の遺構検出面を設定している。

調査面積は、21.2平方メートルである。

なお、次で述べるが、第1面から第3面まで、堆積土に北東から南西への傾斜が認められた。そのため、第9区に関しては、調査区の南東壁において土層実測図(Fig.89)を作成している。

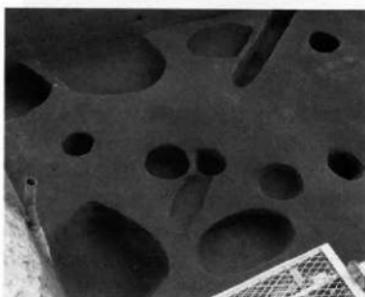
第1面

旧耕作土とその直下の暗灰色砂質土を除去して設定した遺構検出面である。暗褐色砂質土を基盤とする。

全体に土層の堆積は、北東から南西にわずかに傾斜しており、それが第1面においては、調査区中程から南西方向への下降となって表れた。標高は、調査区北東辺付近で3.76メートル、南西辺付近で、3.57メートルを測る。



Ph.107 第9区1面(南西より)



Ph.108 第9区1面北東部(北より)

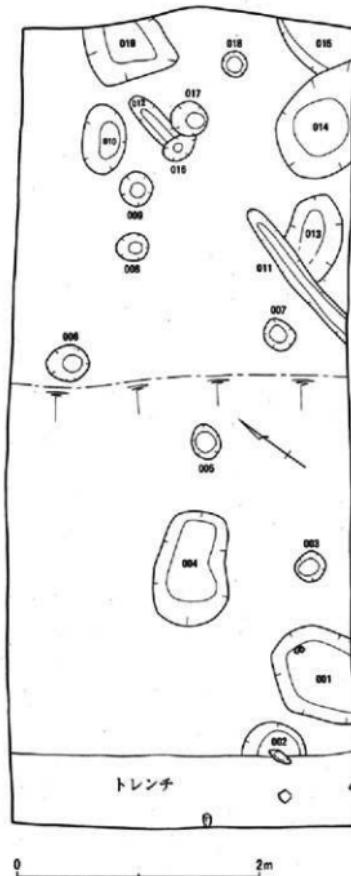


Fig.85 第9区1面遺構全体図(1/40)

柱穴・土坑・溝を検出した。全体に遺構密度・遺物とも少なく、特に傾斜面上では疎らになっている。01号遺構は13世紀後半に下ると思われる土坑である（後述）。14号遺構からも青磁の鎮蓮弁文碗などが出土しており、13世紀頃に属する。11号遺構と12号遺構は、一連の溝であろう。その他の柱穴や土坑では、底部を鋤切りする土師器や黒色土器・瓦器が出土しており、11世紀代まで遡る遺構も多い。なお、表土掘削地に京都系の「て」字状口縁土師器皿（Fig.184-11）、高麗青磁碗・皿、傾斜面に堆積した黒色土から和泉型瓦器碗（同-20）、調査区南西辺に設定したトレンチからは楠葉型瓦器碗（同-19）が出土している。

第2面

第1面から20センチほど掘り下げた茶褐色砂質土上で設定した構造検出面である。標高は3.55メートル前後だが、若干南西方向に傾斜している。

柱穴・土坑などを検出した。26号遺構は、11世紀後半の土坑である（後述）。この他、23・24・27・38号遺構などから底部を鋸切りする土



Ph.109 第9区2面(南西より)



Ph.110 第9区2面（北東より）

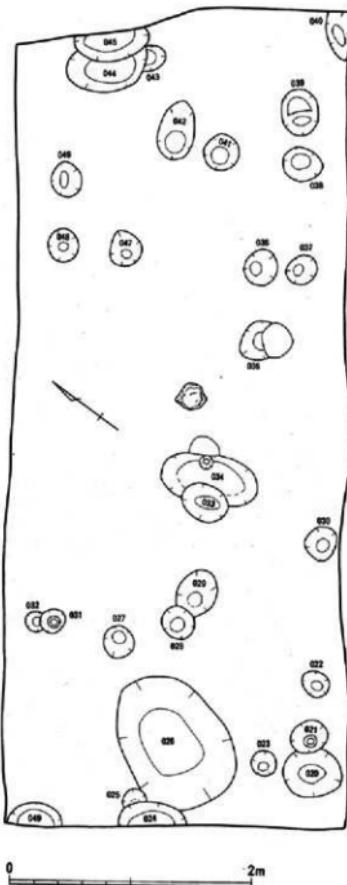


Fig.86 第9区2面遺構全体図(1/40)

厨器片が出土しているが、それ以外の遺構では遺物の出土はなかった。

11世紀頃の遺構検出面であろう。

なお、第1面からの掘り下げ時に、越州窯系青磁碗（Fig.185-43）が出土している。

第3面

褐色砂混じりの淡黄色砂（地山）上面を第3面とした。標高は、北東辺付近で3.5メートル、南西辺付近で3.4メートルを測り、やはりわずかに傾斜している。

柱穴・土坑・溝を検出した。これらの遺構は、暗褐色砂を埋土としている。59号遺構は、北東から南西方向に走る溝である。63号遺構は、さらに東に振れるが、やはり北東から南西方向を指す。第1面での溝が、ほぼ南北方向を示していたのとは全く異なる方向性である。第2面では溝状遺構はみられなかったが、柱穴の配列を見ると、第3面の方向性に類似しているようで、11世紀から12世紀にかかる頃に、転換期がある



Ph.111 第9区3面（南西より）



Ph.112 第9区3面（北東より）

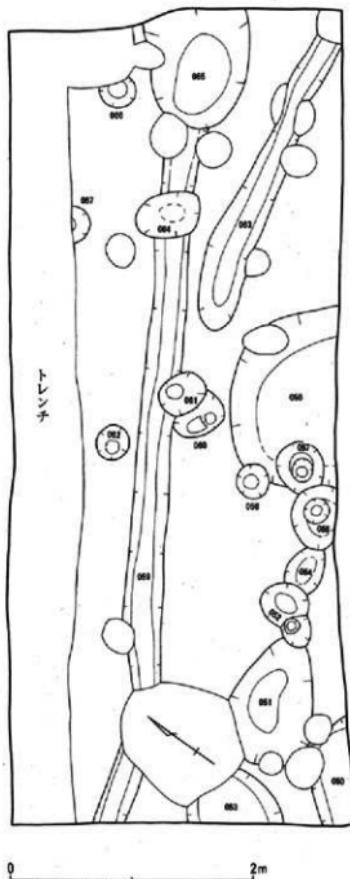


Fig.87 第9区3面遺構全体図 (1/40)

ように思われる。

遺物はほとんど出土しておらず、59号遺構から土師器の壺片、61号遺構から底部鋸切りの土師器片、64号遺構から土師器小片、65号遺構から須恵器小片が出土したのみである。

なお、第2面からの掘り下げ時に越州窑系青磁碗（Fig.185-4）が出土している。

第4面

地山砂層（淡黄色砂）を若干削り込んで設定した遺構検出面である。第3面調査時に淡灰色砂を埋土とした遺構を確認していたが、地山砂層との識別が困難であった。そのため、あえて地山砂層を削り込んで、汚れた砂の入り込みがなくなったところで検出を試みた次第である。標高は、3.15メートル前後を測る。

土坑・柱穴を検出したが、遺構密度は極めて薄い。

出土遺物は、全く見られなかった。



Ph.113 第9区4面（南西より）



Ph.114 第9区4面（北東より）

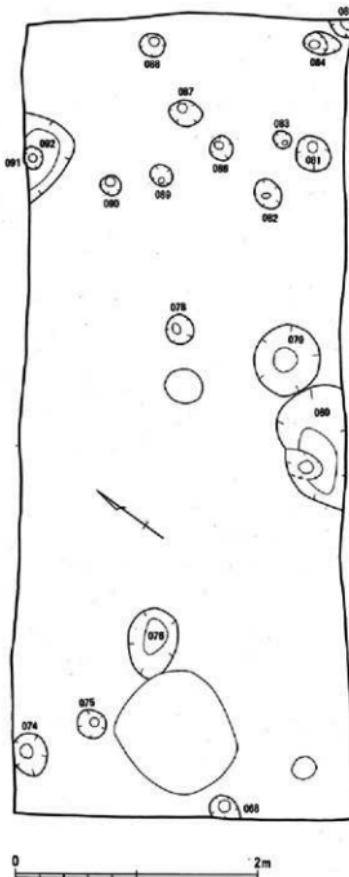
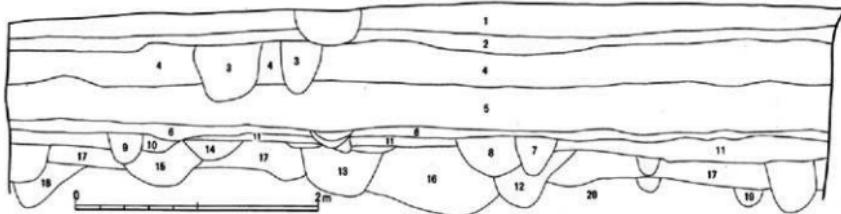


Fig.88 第9区4面遺構全体図 (1/40)



- | | | |
|-------------------------|----------------------|-------------------|
| 1. 泥土、レンガ・コンクリートまじり | 8. 黒褐色土 | 15. 棕色砂、炭化物まじり |
| 2. 泥土、レンガ・コンクリートまじり | 9. 噴褐色砂質土 | 16. 棕色砂 |
| 3. カクラン | 10. 灰褐色砂質土 | 17. 棕色砂、第2面 |
| 4. 暗褐色土、炭化物・小石まじり | 11. 黑褐色土、灰色砂が網目状に入る。 | 18. 棕色砂、しまりない |
| 5. 灰褐色土、炭化物・小石まじり、旧耕作土 | 12. 棕色砂、ゆるい | 19. 棕色砂、黄褐色砂がまじる。 |
| 6. 暗灰褐色砂質土、灰色砂が網目状にまじる。 | 13. 暗褐色土、黄色砂まじり | 20. 浅黄色砂、上面が第3面、 |
| 7. 暗褐色土 | 14. 暗褐色砂質土 | やや削り込んで第4面 |

Fig.89 第9区南東壁土層実測図(1/40)

01号遺構

第1面南東辺から検出した土坑である。一部が調査区外に出るため、全形は明かではない。推定で長軸100センチ、短軸75センチの小判型で、深さは20センチ前後を測る。

出土遺物をFig.91に示す。1~4は、白磁である。1は高台付き皿の口縁部で、2は平底皿の底部である。2の見込みには、片切り彫りの花文の一部がみられる。3は、碗の底部である。見込みには、輪状に釉を搔き取っている。外底部は露胎である。4は、玉縁状口縁の碗である。5・6は、青磁碗である。

5は口縁部の破片で、外面には錦運弁文が認められ



Ph.115 第9区南東壁土層

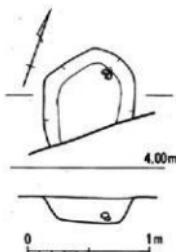


Fig.90 001号遺構実測図(1/40)

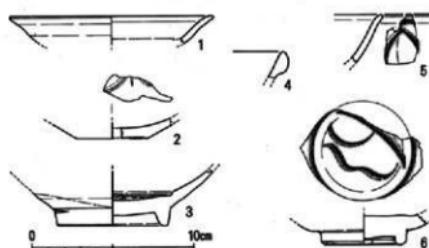


Fig.91 001号遺構出土遺物実測図(1/3)

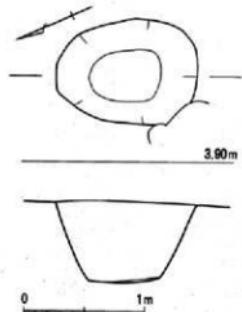


Fig. 92 026号遺構実測図 (1/40)

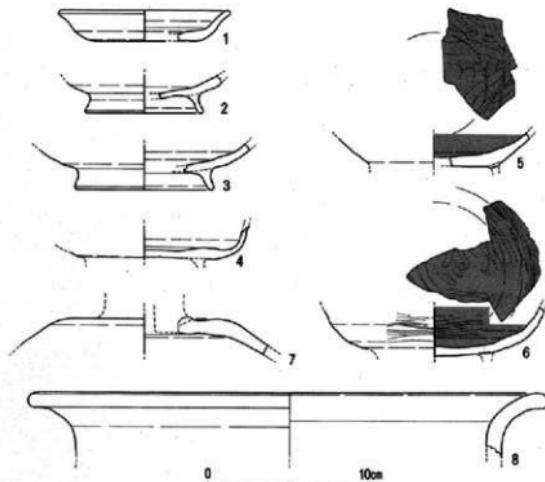


Fig. 93 026号遺構出土遺物実測図 (1/3)

る。6は内面に割花文をあしらう碗の底部である。高台疊付きまで施釉されている。この他、土師器片（底部糸切り）・石鍋片などが出土している。

13世紀前半の土坑である。

26号遺構

第2面の南西辺近くで検出した土坑である。長軸118センチ、短軸88センチの小判型を呈し、遺構検出面からの深さは、68センチを測る。

出土遺物をFig.93に示す。1~4・7・8は、土師器である。1は皿で、底部は回転範切りする。口径は10.6、器高1.9センチを測る。2~4は、碗である。細くて高い高台が、「ハ」字形に付く。7は、灯火器の脚部であろう。横拂で調整する。8は、壺の口縁である。内外面とも、横拂で調整する。5・6は、内黒土器（黒色土器A類）の碗である。5の外面は横拂で、内面は幅広の範磨きを大ざっぱに施す。高台は、底部と体部の境界のすぐ外側に付く。6は、内外面共に範磨きする。高台は底部の中程に付く。この他、瓦器片・黒色土器B類片・白磁片・鐵滓などが出土している。

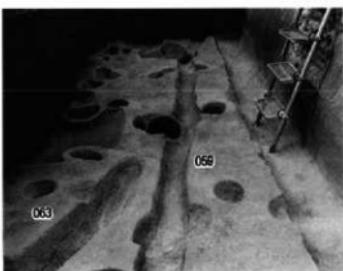
11世紀後半の土坑であろう。

59号・63号遺構

第3面より検出した溝状遺構である。59号遺構は、調査区を縱断するように延びている。幅25~30センチ、深さ6~19センチ、底面の標高は3.28~3.33メートルで、北東から南西に向かってわずかに傾斜する。

63号遺構は、調査区中程から北東に向かって延びる溝状遺構である。幅23~36センチ、深さ15~19センチを測る。

出土遺物が乏しいが、古代の遺構である。



Ph.116 第9区059号・063号遺構（北東より）

(10) 第10区 (J区)

今回の発掘調査では最も狭い調査区である。調査面積は、8.0平方メートルに過ぎない。表土は重機で掘削したが、試験的に表層の直下で止め、旧耕作土を含めて調査を試みた。遺構検出面は、5面を数える。

第1面

旧耕作土上面で設定した遺構検出面である。標高は、4.3メートルを測る。

バックホーのバケットによる搅乱坑や柱穴状・土坑状の浅い落ちがみられた。これらの落ちは、耕作土上にたまつた汚染土壤であり、遺構埋土とは考えられない。

第1面については、Ph.117に全景写真を示すにとどめる。

第2面

第1面の旧耕作土壤を除去した下の、砂質土で設定した遺構検出面である。標高は、4.0メートル前後を測る。

畝の畝状の溝を検出したにとどまった。この面も旧耕作土と考えられる。

第2面もPh.118に全景写真を示すにとどめる。

なお、第1面からの掘り下げ時に、越州窯系青磁碗 (Fig.185-40) が出土している。

第3面

第2面の耕作土を除去した下の、黒褐色土（遺物包含層）で設定した遺構検出面である。標高は、3.8メートル前後である。

柱穴・土坑を検出した。その中で比較的時期が判明するものを上げると、12号遺構は、底部糸切りの土師器と白磁・青磁片が出土しており、12世紀後半におくことができる。14号・16号遺構は、12世紀前半頃であろう（後述）。15号遺構は、底部を範切りして丸く押し出す土師器壊が出土しており、11世紀と思われる。25号遺構からは、土師器（底部範切り）・瓦器・白磁が出土しており、11世紀後半である。なお、越州窯系青磁皿・手捏ね土師器壊 (Fig.184-18) なども出土した。手捏ね土師器壊は、白茶色を呈する薄手の搬入土師器である。26号遺構からは、土師器（底部範切り）・白磁が出土し、11世紀と見られる。この他の遺構のほとんどは、底部範切りの土師器を出土するものである。

おおむね、11～12世紀の遺構検出面と言えよう。

第4面

褐色砂層で設定した遺構検出面である。標高3.6メートル前後を測る。



Ph.117 第10区 1面 (北東より)



Ph.118 第10区 2面 (北東より)

柱穴・土坑を検出した。出土遺物のほとんどは土師器の小片で、底部が残るものではすべて回転範切り痕をとどめている。39号遺構では、これに加え瓦器碗も出土しており、11世紀後半に属することが推測できる。また、40号遺構からは、越州窯系青磁の輪花碗(Fig.185-38)が出土している。

さて、これらの遺構から出土した底部斂切りの土師器坏は、大体底部を丸く押し出した類のもので、平坦な底部を持ち、器肉が薄く均一な10世紀以前の土師器坏は、含まれていない。また、輸入陶磁器がほとんど出土していないことは、白磁碗や陶器の出土が一般化する11世紀後半以降の状況とは合致しない。

したがって、第4面は、11世紀前半に主体をおく遺構検出面と考えられる。

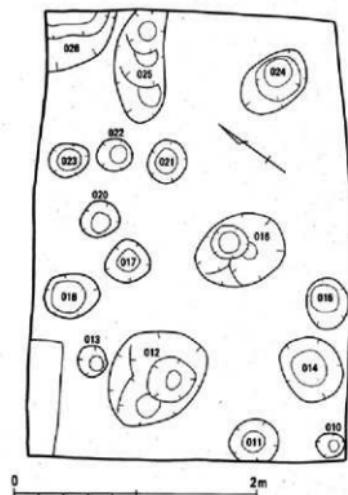


Fig.94 第10区 3面造構全体図 (1/40)

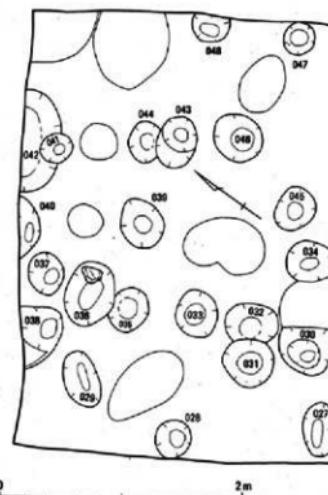


Fig.95 第10区 4面造構全体図 (1/40)



Ph.119 第10区3面(南西より)



Ph.120 第10区4面(南西より)

第5面

淡黄色砂層（地山砂層）で設定した遺構検出面である。標高3.35メートル前後を測る。

柱穴・土坑を検出した。底部鉗切りの土器器や黒色土器A類・B類が出土しており、10・11世紀を主体とした遺構検出面である。ただし、54号遺構は、須恵器長頸壺を伴った長方形の土坑で、古墳時代の土壤墓である（後述）。



Ph.121 第10区5面（南西より）

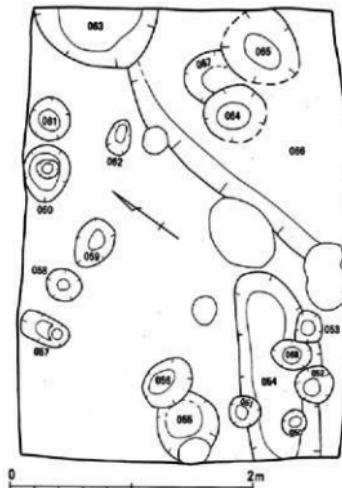
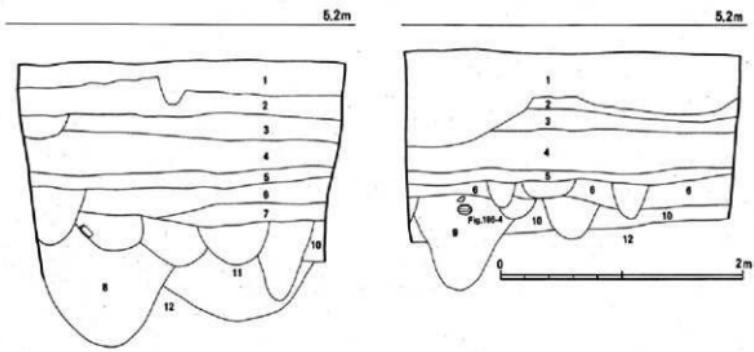


Fig.96 第10区5面遺構全体図 (1/40)



- | | | |
|--------------------|---------------------------|-------------------|
| 1. 表土 | 5. 淡褐色砂質土、しまりゆるい、旧耕作土、第2面 | 9. 淡褐色砂、054号遺構埋土 |
| 2. 黒灰色土 | 6. 黑褐色砂質土、ゆるい、第3面 | 10. 暗褐色砂、ゆるい、第4面 |
| 3. 明茶色土、かたくしまる | 7. 淡褐色砂質土、ゆるい | 11. 淡褐色砂、066号遺構埋土 |
| 4. 淡褐色砂質土、旧耕作土、第1面 | 8. 黄褐色砂、063号遺構埋土 | 12. 淡黄色砂、地山、第5面 |

Fig.97 第10区北東壁土層実測図 (1/40)

14号遺構

第3面の南角近くで検出した柱穴である。長径56センチ、短径48センチの梢円形を呈し、遺構外側からの深さは16センチを測る。

出土遺物を、Fig.98に示す。すべて土師器である。1は、底部を回転窓切りする。体部は、横撫で調整である。口径9.0センチ、器高1.35センチを測る。2の底部は、回転糸切りである。

横撫で調整で、内底には静止撫で調整、外底には板目圧痕がみられる。口径8.8センチ、器高1.0センチである。3は、坏である。体部は薄手で、横撫で調整される。色調は、淡灰褐色を呈する。底部は残っていないが、回転窓切りであろう。10世紀頃の坏で、混入遺物である。

12世紀前半頃の遺構と思われる。



Fig.98 014号遺構出土遺物実測図 (1/3)

16号遺構

第3面の中程で検出した柱穴である。掘り込みが二段になっており、図化すると一見切り合ひ状に見えるが、単一の遺構と見て良かろう。長径77センチ、短径58センチの梢円形を呈し、一段目までの深さは約40センチ、最下部までは約67センチを測る。

出土遺物の一部を、Fig.99に示す。1は、瓦器の碗である。内外面ともに、幅広で単位の不明瞭な範磨きが、密に施されている。筑前型瓦器である。2は、白磁の碗である。口縁部は折り返し、半縁状に作る。外面の下部は施釉されず、露胎となる。

この他、土師器の坏・皿片が出土しているが、底部回転窓切りのものと、糸切りのものとが共に見られる。

12世紀前半の遺構であろう。

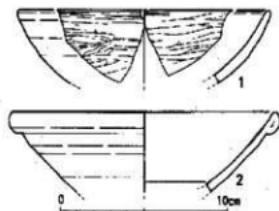


Fig.99 016号遺構出土遺物実測図 (1/3)

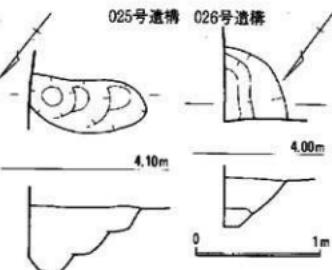


Fig.100 025号・026号遺構実測図 (1/40)

25号遺構

第3面の北東辺から検出した柱穴である。3基が重複しているが、埋土には差が認められず、掘り分けることはできなかった。

底部を回転窓切りする土師器・瓦器・白磁等が出土している。144頁Fig.184-16に示したのは、鐵入土師器と思われる破片である。手捏ねで成形され、器面調整は手持ちの撫で調整である。焼成は良好で、白茶色を呈する。底部を欠くが、おそらく坏であろう。京都系土師器と考えたい。

26号遺構

第3面の北角で検出した土坑である。大半が調査区外に出ており、全形はわからない。

底部窓切りの土師器・白磁片が出土しており、11世紀後半の遺構と考えられる。

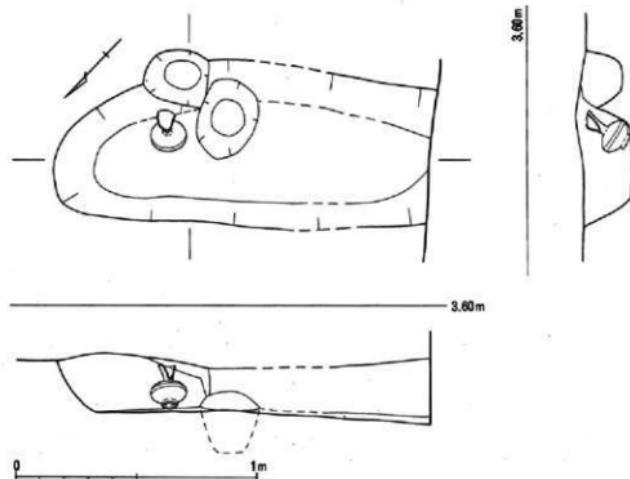


Fig. 101 054号遺構実測図 (1/20)

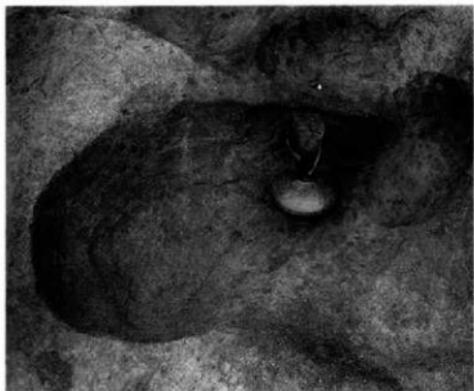
54号遺構

第5面の南側で検出した大型の土坑である。一端が調査区南西壁にかかるが、土坑下端は調査区内ではほぼ巡るようで、そのことから見れば、程なく立ち上がるものと予想できる。推定長軸185センチ、短軸70センチの長楕円形もしくは隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さは27センチを測る。南西壁の土層観察によれば、土坑の深さは80センチにも達している。

土坑の長軸は、磁北から42度ほど東に振れる。その南東壁の北よりから須恵器の長頸壺が出土した。土坑床面から、壁面の立ち上がりの傾斜に沿って傾いて出土しており、壁際に置かれたものと推定できる。出土状況からみて、副葬品と考えられ、調査時の所見では棺材の痕跡は認められなかったことから、土壤墓と思われる。

出土遺物をFig.102に示す。1は、副葬されていた須恵器の長頸壺である。口縁部から頸部の一部を欠くが、これは第4面の31号遺構が上から掘り込まれているためである。

大きくラッパ状に開いた頸部から口縁部は横撫で調整で、薄く絞り痕跡がうかがわれる。横に張った体部



Ph. 122 054号遺構須恵器出土状況（北西より）

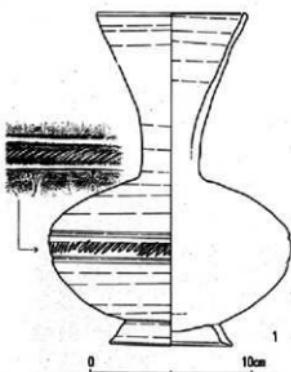


Fig.102 054号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.123 054号遺構出土遺物

は、回転範削りされ、肩部は横撫で調整を重ねている。胴部中央には、上下を沈線で区画した文様帯を巡らせ、その内側を斜めの荆突文で埋める。高台は細く、「ハ」字形に立ち上がる。高台端部は、内傾して面取りされる。焼成は堅緻で、照りを持ち、黒灰色を呈する。

このほか、調査区南西壁の土層断面にかかるて、144頁、Fig.184-4に図示する須恵器壺胴部が出土した。埋土上位からの出土である。頸部以上を欠くが、胴部は完存する。胴部上半は横撫で調整、下半は回転範削りである。肩部に2条の沈線が横走する。外底部には、範記号がみられる。

これらの出土遺物から、7世紀前半頃の土塙墓と考えられる。

63号遺構

第5西北角付近で検出した土坑である。半分ほどが調査区外に出るものと思われる。推定で直径105センチほど



Fig.103 063号遺構出土遺物実測図 (1/3)

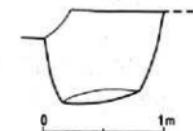


Fig.104 063号遺構実測図 (1/40)

の円形を呈し、遺構検出面からの深さは80センチ、調査区北東壁の土層断面では100センチ以上を測る。

Fig.103に示したのは、第10区で最もさか上るものと思われる遺物である。須恵器の壺身で、蓋受けの返りは細く、高く立ち上がる。遺存部位については、横撫で調整される。6世紀後半の遺物である。

63号遺構からは、この他に底部を回転範切りする土師器・黒色土器A類碗・同B類碗などが出土しており、10世紀後半から11世紀前半頃の土坑と考えられる。

(11) 第11区（E区）

バックホーで耕作土まで除去し、以下人力で掘削して3面の遺構検出面を設定した。調査面積は、28.4平方メートルである。

第1面

褐色砂質土の上面で設定した遺構検出面である。包含層の第2層目に当たる。標高は、3.72メートル前後である。

柱穴・土坑を検出した。底部を回転糸切りする土師器皿・坏が出土する遺構が多くみられるが、範切りのみの遺構も散見される。貿易陶磁器では、鏡裏弁文の青磁や口禿の白磁の頬は全く出土せず、この遺構検出面の時期の下限が、13世紀までは降らないことを示している。おそらく、11世紀後半代から12世紀後半代にかけての遺構を検出したものと考えられる。

なお、18号遺構（柱穴）から白磁小壺（Fig.188-53）が、29号遺構（後述）からは青白磁合子蓋（Fig.188-56）・火打ち錠、30号遺構からは灰釉陶器皿が出土している。

第2面

淡黄色砂層（地山）上面で設定した遺構検出面である。ただし、全体的に薄く暗褐色砂をかぶった風で、完全には地山砂層にいたっていない。標高は、3.4メートルを測る。

柱穴・土坑・石棺墓を検出した。柱穴出土土師器には、底部を糸切りするものと範切りのものがあり、第1面同様11世紀から12世紀にかかる時期の遺構が多いことを示している。一方、42号遺構・45号遺構・90号遺構・51号遺構など土師器・須恵器が出土し、古墳時代に遡ることが確実な遺構も見られ、第2面が本来古墳時代の生活面に近いことがうかがわれる。なお、第2面を覆う暗褐色砂層には、古墳時代の土師器が多く包含されている。その一部をFig.188-2・3に示す。また、第1面からの掘り下げに際しては、Fig.186-14に図示したような古代の遺物も出土しており、平安期の遺構が営まれていた可能性も考えられる。



Ph.124 第11区1面（北西より）



Ph.125 第11区2面（北西より）



Ph.126 第11区3面（北西より）

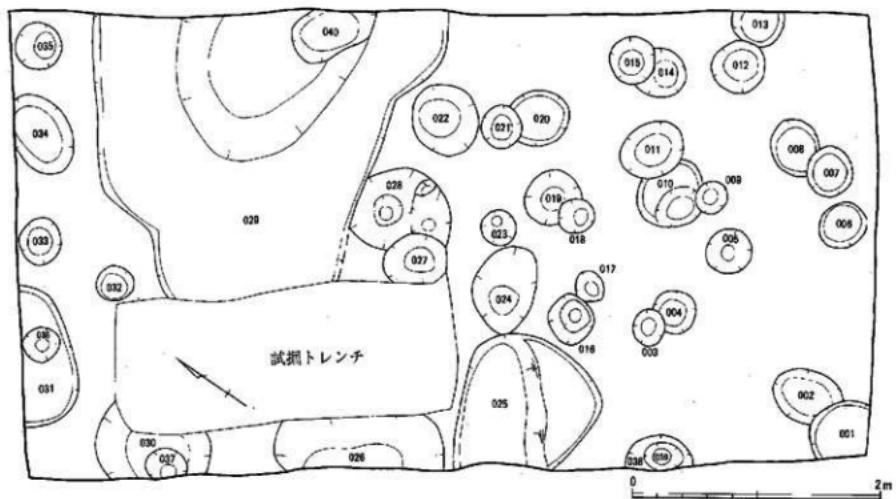


Fig.105 第11区 1面構造全体図 (1/10)

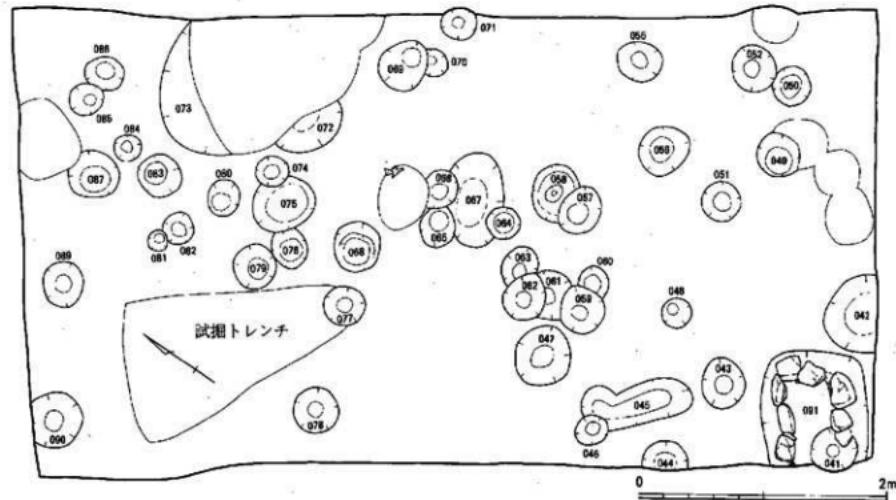
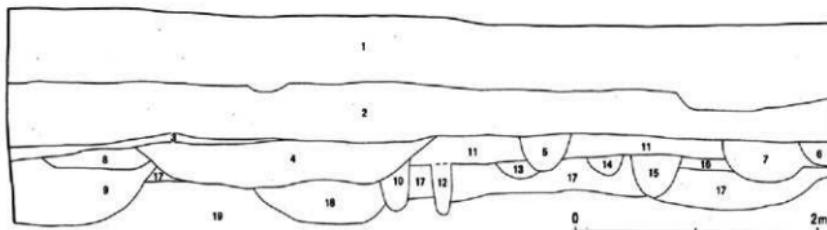


Fig.106 第11区 2面温構全体図 (1/40)



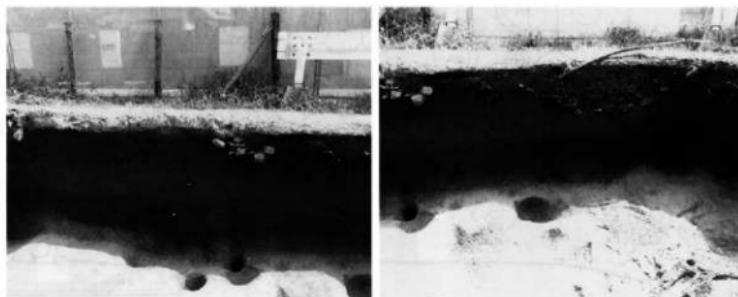
- | | | |
|---------------|------------------|----------------------|
| 1. 灰土、カクランを含む | 8. 暗褐色砂質土 | 15. 暗褐色砂質土 |
| 2. 明褐色土 | 9. 暗褐色砂 | 16. 暗褐色砂、第1面 |
| 3. 黑褐色砂質土 | 10. 黑褐色土、やや粘性をもつ | 17. 暗褐色砂あるいは、第1面 |
| 4. 黑褐色砂質土、ゆるい | 11. 喀褐色土、ややしまる | 18. 黄褐色砂あるいは |
| 5. 暗褐色土 | 12. 喀褐色砂質土 | 19. 淡黄色砂層、地山、第2面、第3面 |
| 6. 暗褐色砂質土 | 13. 暗褐色砂質土 | |
| 7. 黑褐色砂質土 | 14. 喀褐色砂質土 | |

Fig.107 第11区北東壁土層実測図 (1/40)

第3面

前述した第2面を覆う薄い暗褐色砂を除去して設定した遺構検出面である。したがって、地山である淡黄色砂層を若干削り込んだレベルで遺構検出している。標高は、3.3メートルである。

柱穴・土坑・溝を検出した。遺物が全く出土していないか、出土しても小片であることが多く、時期を明らかにできる遺構は少ない。93号遺構が6世紀後半に比定できるほか、108号遺構が9世紀頃、109号遺構が8世紀後半であることが知られる程度である。これらの遺構は、第2面で検出し落としたものと思われ、本来第3面のレベルに営まれた遺構は、皆無と考えられる。



Ph.127 第11区北東壁土層

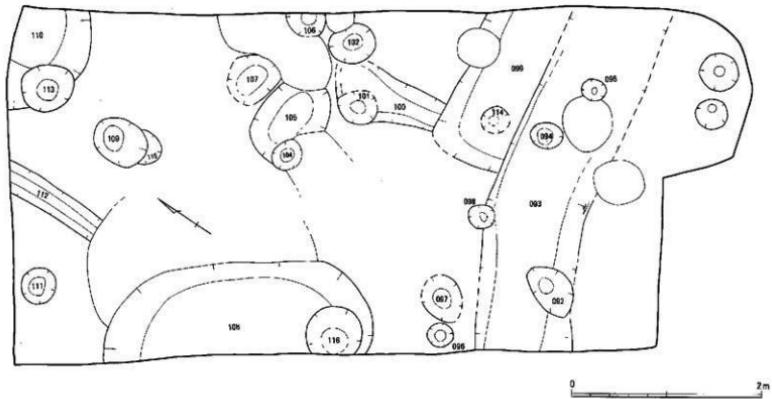


Fig.108 第11区3面連構全体図 (1/10)

25号遺構

第1面の南北壁際中程から検出した、大型の土坑である。一部が調査区外に出るが、推定長軸150センチ、短軸110センチほどの不整形を呈するものと思われる。底面は二段掘り状となり、浅い部分で18.6センチ、深いところで24.1センチを測る。

出土遺物をFig.109に示す。1・2は、土師器の壊である。1は口縁部の破片で、体部は緩く外反しながら、高く立ち上がる。内外面ともに、横撫で調整ある。2は、底部破片である。範切りで、体部は横撫で、内底部は静止撫で調整する。3は、白磁碗である。体部は内弯し、口縁部は小さな玉縁状につくる。いわゆるⅡ類の、広東系白磁である。

11世紀後半の土坑である。

29号遺構

第1面北東壁にかかって検出された、大型土坑である。半ば程度を検出したにとどまるようで、全体の形状は知り得ない。底面は二段掘り状に調査したが、土層断面図(Fig.107)4層に見るように、本来は皿状の断面を持つ。

出土遺物は多岐にわたるが、小片が多く、実測に耐えなかった。青白磁合子蓋のみFig.188-56に図示する。上面に印花文を持ち、外面と天井部内側に施釉する。合わせ口外面の釉は、削り取っている。そのほか、土師器皿・壊(底部回転糸切り)、瓦器、青磁(龍泉窯系刻花文・同安窯系)、白磁、陶器、石鍋片、鉄製火打様などが出土している。

12世紀後半~13世紀初め頃に位置づけられる土坑である。

41号遺構

第2面の南角付近で検出した柱穴である。次に述べる91号遺構を切り込んでいる。直径37センチの円形を呈し、検出面からの深さは46センチを測る。

出土遺物の一部を、Fig.111に示す。1は、土師器皿の底部で

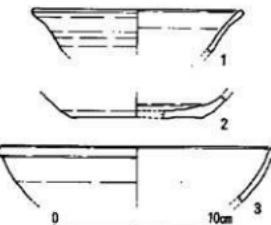


Fig.109 025号遺構出土遺物実測図 (1/3)

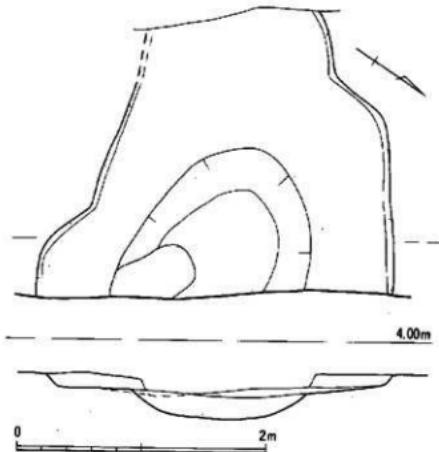


Fig.110 029号遺構実測図 (1/40)

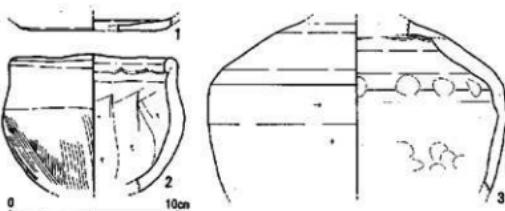


Fig.111 041号遺構出土遺物実測図 (1/3)

ある。外底部は回転範切りし、内底は静止塗で調整する。2は、土師器の蓋である。口縁は、内側に丸く折り返す。球形を呈する体部の外面は継の刷毛目調整、内面は粗く削り上げる。3は、須恵器の蓋である。内外面ともに、横撫である。

このほか、底部糸切りの土師器皿片が出土しており、41号遺構の時期は、中世に降るものと考えられる。2・3などは、91号遺構の遺物が持ち上がったものであろう。

91号遺構

第2面南角付近から検出した石棺墓である。半ばほどが調査区外に出ており、全体を知り得ない。小口の内法は40センチ前後、長側辺は70センチ以上、深さは50センチ弱を測る。

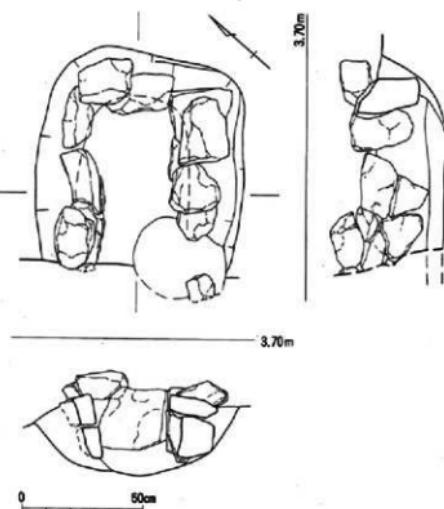


Fig.112 091号遺構実測図 (1/20)



Ph.128 第11区091号遺構（南西より）



Ph.129 第11区091号遺構側壁（北東より）

小口は大きめの石を一枚立て、さらにやや小振りな石をその上に積み上げる。側辺は、2~3段石を積んでいる。床面には石は全く見られず、掘りかたの側面内側に石を貼り付けた程度の構造である。

出土遺物はなく、時期を判断する資料に欠けるが、先行して営まれた93号遺構が6世紀末頃と思われる点と41号遺構に混入したと思われる遺物から、7世紀初めを前後する時期に営まれた石棺墓と推定できる。

93号遺構

第3面の南東辺に沿って検出した、溝状遺構である。上端の幅は110センチ前後、遺構検出面からの深さは5~18センチを測る。わずかに弧を描くが、おおむね直線的に延びていると言えよう。

出土遺物は極めて少なく、Fig.113に図示した須恵器と、土師器の小片が出土したにとどまる。須恵器は、壺蓋の破片である。内外面ともに横撫で調整する。6世紀末頃と思われる。

93号遺構の時期も、おおむねその時期と考えて大過なかろう。

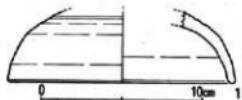
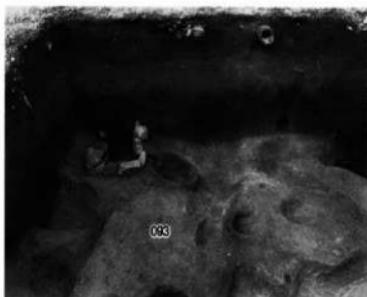


Fig.113 093号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.130 第11区093号遺構 (北東より)

108号遺構

第3面南西壁の中程から検出した、大型土坑である。半分弱ほどが調査区外に出るが、長軸290センチ前後、短軸170センチ（推定）ほどの小判型を呈するものと思われる。遺構検出面から底面までの深さは、56センチ程度を測る。

出土遺物の内、実測可能であったものを、Fig.115に示す。遺物の出土量は少なく、小片のみであった。1・2は、須恵器である。1は、壺蓋である。端部はわずかに屈折して、身受け部を作り出す。横撫で調整である。2は、皿である。あるいは端部が極端に退化して、身受けが消滅した壺蓋の可能性も多い。内外面ともに、横撫で調整する。3は、土師器の碗である。大きな丸みを持って内弯する体部から、鋭く外反して口縁部をおさめる。口縁部から体部外面は横撫で、体部内面は横方向に範磨きを加える。

出土遺物の年代観から、おおむね9世紀頃の土坑と考えられよう。



Ph.131 第11区108号遺構 (北東より)

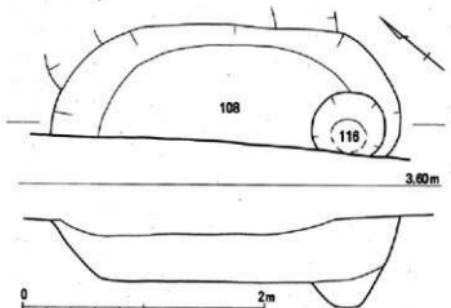


Fig.114 108号遺構実測図 (1/40)

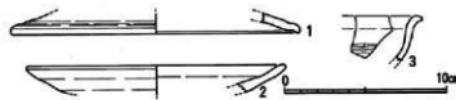


Fig.115 108号遺構出土遺物実測図 (1/3)

(12) 第12区 (K区)

バックホーで表土を除去した後、人力で掘り下げ、3面の遺構検出面を設定した。調査面積は、11.7平方メートルである。

第1面

旧耕作土を除去し、灰褐色の砂質土中で設定した遺構検出面である。標高は、3.67メートルを測る。

柱穴・土坑・溝状遺構を検出した。底部が箇切りの土師器を出す遺構が多く、瓦器碗も見られる点から、おおむね11世紀後半頃の遺構検出面と思われる。02号遺構からは、鎧蓮弁文の青磁碗片が出土しているが、混入遺物と考えるのが妥当であろう（後述）。一方、01号遺構は10世紀頃の溝状遺構であり、部分的には古い遺構も検出されている。なお、Fig.116では、01号遺構が02号遺構を切るように書かれているが、溝の高低差によるもので、切り合い関係を示したものではない。

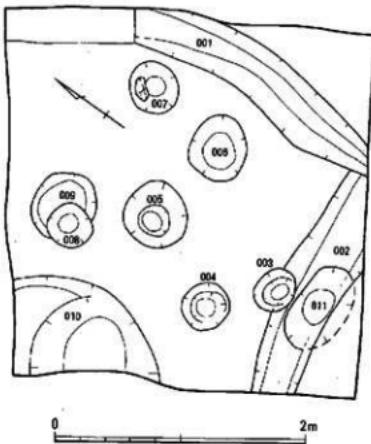


Fig.116 第12区 1面遺構全体図 (1/40)

第2面

褐色砂で設定した遺構検出面である。一部に

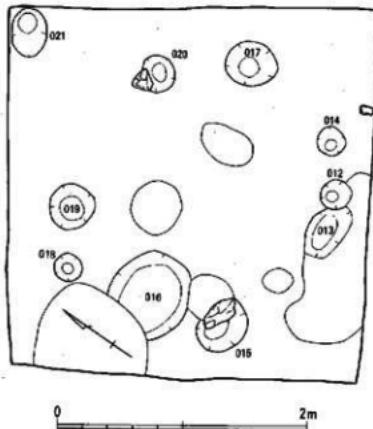


Fig.117 第12区 2面遺構全体図 (1/40)

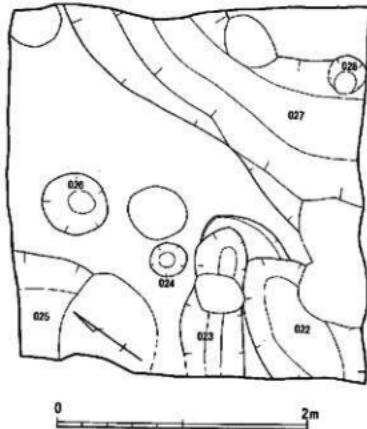


Fig.118 第12区 3面遺構全体図 (1/40)

は地山である淡黄色砂が顔を覗かせている。標高は、3.48メートル前後である。

柱穴・土坑を検出した。遺構密度は低い。21号遺構からは、底部砲切りの土師器や黒色土器B類碗が出土しており、10世紀後半前後の柱穴である。16号遺構や17号遺構から出土した須恵器は、6世紀末頃に編年されるもので、古墳時代から古代の遺構検出面であると言えよう。



(1)



(2)

Ph.132 第12区 1面 (1) 北東より (2) 南西より



(1)



(2)

Ph.133 第12区 2面 (1) 北東より (2) 南西より



(1)



(2)

Ph.134 第12区 3面 (1) 北東より (2) 南西より

第3面

淡黄色砂層（地山砂層）で設定した遺構検出面で、その上面をやや削り込んだレベルで、遺構を調査している。標高は、3.35メートル前後に当たる。

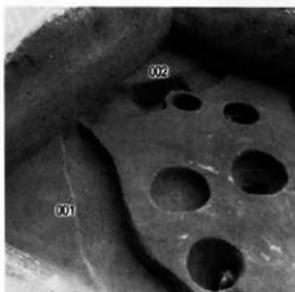
柱穴・土坑・溝状遺構を検出した。遺物の出土は少ない。25号遺構からは、土師器の小型壺が出土しており、5世紀前半に当たられる（後述）。また、27号遺構は、6世紀末頃の溝状遺構である。古墳時代の遺構を中心に調査したものと言えよう。

01号遺構

第1面の東寄りから検出した溝状遺構である。やや蛇行気味に見えるが、おおむね直線的で、ほぼ南北方向を指している。溝幅は、最も狭い南東壁付近で20センチ、最も広い部分で43センチ、遺構検出面からの深さは14~15センチを測る。底面の標高は3.54メートル前後で、ほとんど傾斜していない。

出土遺物をFig.121に示す。1は、内黒土器（黑色土器A類）の碗である。口縁部の小片で、内面は横方向の範磨き、外面は横撫で調整している。内面のみ炭素を吸着させ、黒色処理する。2は、土師器の碗である。高台部分の破片で、高台径は比較的広い。3~4は、須恵器の壺身である。口縁部の内側には、蓋受けが高く立ち上がっており、内外面とも横撫で調整する。5は、丸瓦の破片である。外面は横方向の撫で、内面には布目がみられる。須恵質に焼成される。

3~4は、下層の27号遺構から持ち上がった遺物と思われ、他の遺物の年代観から、10世紀頃の溝状遺構とするのが妥当であろう。



Ph.135 第12区001号・002号遺構（北より）



Fig.120 002号遺構
実測図（1/40）

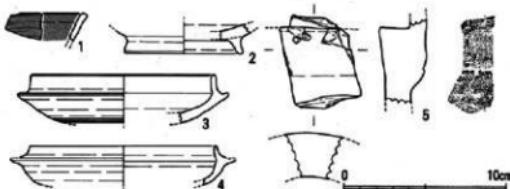


Fig.121 001号遺構出土遺物実測図（1/3）



Fig.122 002号遺構出土遺物
実測図（1/3）



Ph.136 002号遺構出土遺物

02号遺構

第1面の南角付近を、ほぼ東西に通って検出された溝状遺構である。前項の01号遺構を切って営まれている。溝幅は、35~50センチ、底面の深さは19~23センチを測る。

出土遺物の一部をFig.122に示した。1は、土師器の皿である。口縁端部を外側の引き出して、斜め上向きに尖らせておさめる。回転台を使用して成形されており、全体を横振で調整する。形態的な特徴から、京都系の「て」の字状口縁皿を模したものと考えられる。2は、鉄製の刀子である。完形品であるが、かなり使い込んでおり、刃部の研ぎ減りが著しい。この他、土師器皿・壺、高麗青磁片、龍泉窯系青磁鏡蓮弁文碗が出土している。青磁鏡片は一点のみの出土で、他の遺物との年代観とのずれが大きく、混入遺物と見るのが適当だろう。したがって、11世紀後半頃の溝と見られる。

10号遺構

第1面西角で検出した土坑である。大半が調査区外に出るため、全体の形状は明らかではない。遺

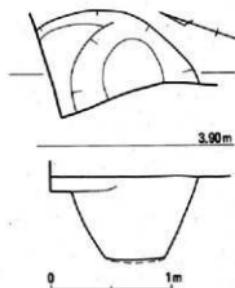


Fig.123 010号遺構実測図 (1/40)



Ph.137 第12区010号遺構 (北東より)

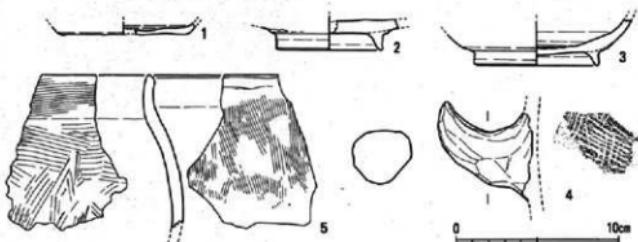


Fig.124 010号遺構出土遺物実測図 (1/3)

構検出面から底面までの深さは、71.4センチを測る。

出土遺物をFig.124に示す。すべて土師器である。1は、壺の底部である。回転範切りで、板状圧痕がみられる。体部は横撫で、内底部は静止撫で調整されている。2・3は、碗である。ともに断面三角形の高台が、高く立ち上がっている。内外面ともに、横撫である。4は、瓶の取っ手である。全体的に指撫でで成形するが、窓削りしている部分も見られる。胴部側の破面には、接合のための格子状の刻みが入れられている。5は、壺である。外面は縱方向の刷毛目調整、肩部から口縁部内面は横位の刷毛目調整で、胴部内面は板状工具で不規則に撫で上げている。

10～11世紀頃の土坑と考えられる。

25号遺構

第3面の西角より検出した土坑である。第1面の10号遺構に切られるため、一部分しか依存せず、全体の形状は知り得ない。わずかに検出できた壁は比較的急に立ち上がり、底面は平坦となる。遺構検出面から底面までの深さは、96センチ前後を測る。

土坑床面から若干浮いた位置で、土師器の丸底壺が出土した。完形品であり、口縁部を下にして、伏せて置いた様な状況を示している。

Fig.126に図示したのは、土坑床面付近から出土した土師器の丸底壺である。胴部はほぼ球形で、口縁部径は広く、ほぼ真上に直立する。内外面とも、密に範磨きされる。胎土はきめ細かく精良で、赤茶色に焼成される。胴部中程に黒斑が認められる。

土師器丸底壺から、5世紀前半頃の土坑と考えられる。

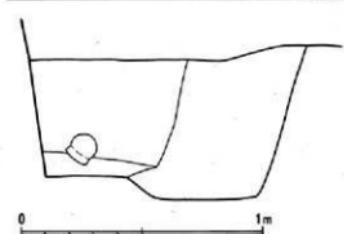
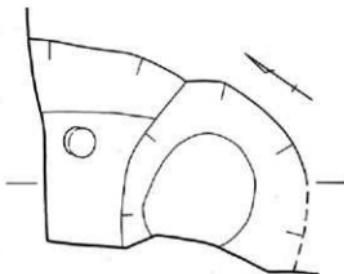


Fig.125 025号遺構案測図 (1/20)



Ph.138 第12区025号遺構（北西より）



Ph.139 第12区025号遺構（南東より）

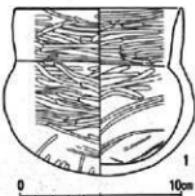


Fig. 126 025号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 140 025号遺構出土遺物

27号遺構

第3面の東半分から検出した溝状遺構である。調査区東側に中心を持つ円弧を描くように、大きく屈曲している。調査区内で溝の幅を求めれば、おおむね100~110センチとなるが、断面図にみると弧の内側の上端は、標高的には外側の上端に対応しておらず、さらに内側の調査区外に立ち上がりが入り込む可能性が高い。その場合の溝幅は、200センチを越えることとなる。なお、溝の上端は歪んでおり、あえて円弧の半径を求めていない。遺構検出面から溝の底までの深さは、45センチ内外を測る。

出土遺物は少なく、図化できたものをFig.128に示す。ともに須恵器の坏身である。外面とともに横拂で調整する。6世紀末頃に編年される遺物である。前述した01号遺構（第1面、27号遺構の埋土上に掘り込まれている）出土の須恵器も同時期の特徴を示しており、本遺構の遺物が01号遺構の掘削にともなって持ち上がったものと推測できる。

したがって、27号遺構は、6世紀末頃の溝状遺構と考えられる。なお、27号遺構の性格としては古墳の周溝の可能性も考えられるが、本調査区の所見だけでは判断できないので、結論は保留したい。



Ph. 141 第12区027号遺構 (南西より)

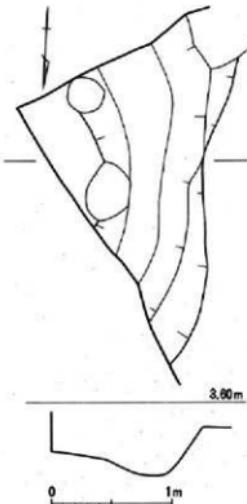


Fig. 127 027号遺構実測図 (1/40)

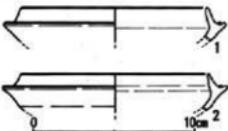


Fig. 128 027号遺構出土遺物実測図 (1/3)

(13) 第13区

バックホーで旧耕作土まで除去し、以下人力で掘削して、3面の遺構調査を行った。調査面積は、34.8平方メートルである。

第1面

旧耕作土下の暗褐色土層中位に設定した、遺構検出面である。標高は、34.8メートル前後を測る。

柱穴・土坑を検出した。遺構密度は薄いが、これは後述する横穴式石室の封土が残っていたためであろう。

01号遺構からは近世陶磁器が出土しており、近世に降るものと思われる。15号遺構でも唐津焼きがみられ、17世紀頃に属する。その他の遺構は古代末から中世前半のものである。個別にみると、02号—12世紀後半、03号・04号遺構—11世紀、08号・09号・13号遺構—12世紀前半などで、他の遺構も範切りの土師器を出すものが多く、11世紀代の遺構が主体となるようである。

なお、04号遺構から高麗青磁瓶 (Fig.187-33)、09号遺構から周防産緑釉陶器 (Fig.186-7)、11号遺構から玉壁高台の越州窯系青磁碗 (Fig.187-39)などが出土している。

第2面

黄褐色砂質土層の上面で設定した遺構検出面である。標高3.4メートル前後を測る。20号遺構(横穴式石室)の基底面で描えており、墳丘の基底面ともなっている。遺構密度は極めて薄く、またこの面で調査した遺構の大部分は、削平を受けた封土の上から掘り込まれたものである。

第3面

淡黄色砂層(地山)上面で設定した遺構検出面である。標高は、3.0メートル前後を測る。

柱穴・溝などを検出した。遺構密度は薄い。出土遺物も極めて少なく、時期を明らかにできる遺構はない。少なくとも、20号遺構の封土が残っていた調査区南東半分においては、墳丘が築かれた7世紀前半以前の遺構が検出されたものと考えることはできよう。



Ph.142 第13区1面(南東より)



Ph.143 第13区2面(南東より)



Ph.144 第13区3面(南東より)

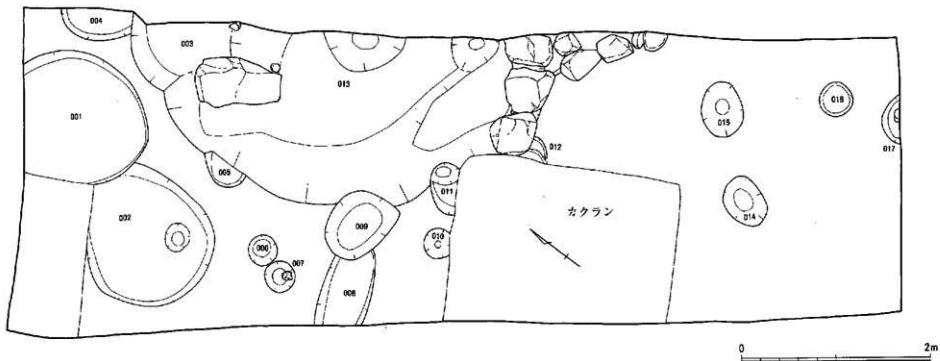


Fig.129 第13区 1面透構全体図 (1/40)

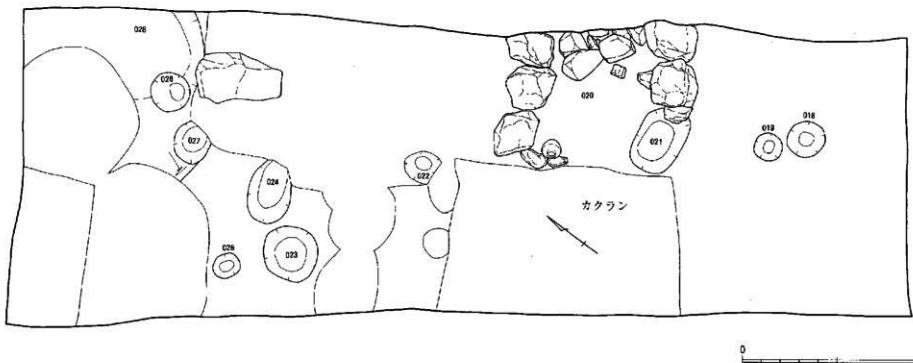


Fig.130 第13区 2面透構全体図 (1/40)

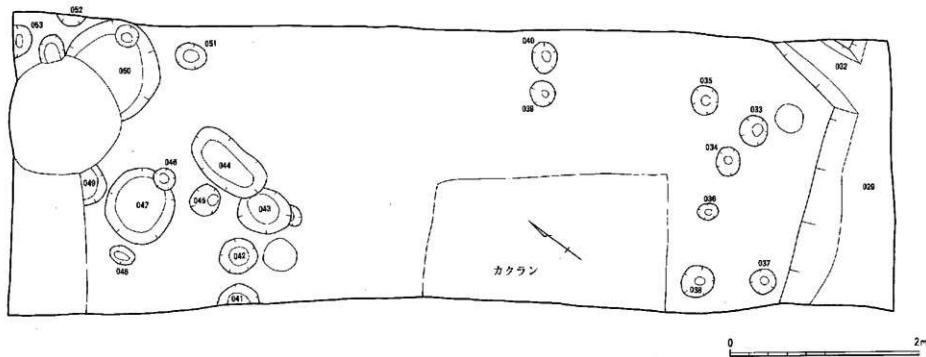


Fig.131 第13区 3面連構全体図 (1/40)

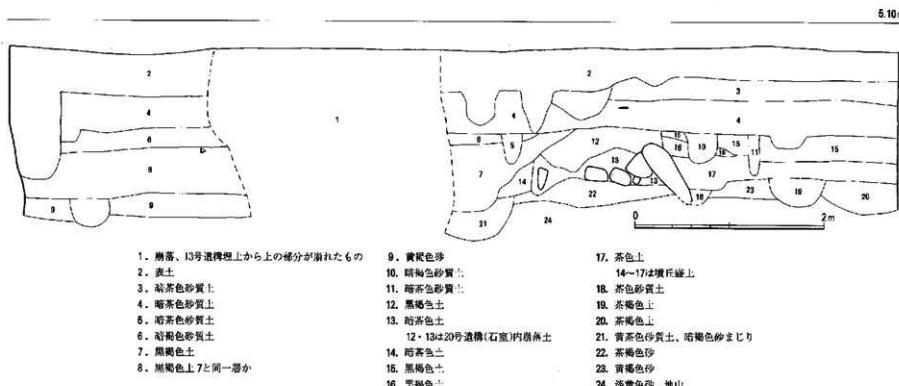


Fig.132 第13区北東壁土層素描図 (1/40)

13号遺構

第1面の北東片中程から検出した、大型土坑である。半ば以上が調査区外に出るが、直径4メートル程度の円形を呈するものと思われる。中央部は二段掘り状にくぼんでおり、検出面からの深さは、一段目で70センチ程度、最も深い部分で95センチを測る。20号遺構の側壁の外側をかすめるように掘られており、おそらく13号遺構の壁面には石室の石が露出していたであろう。13号遺構西壁面に倒れ込んでいた石は、石室の石を引き倒したものとも思われる。

出土遺物は多岐にわたるが、その一部をFig.133に図示する。1は、土師器の皿である。口縁部は



Ph.145 第13区013号遺構（南西より）

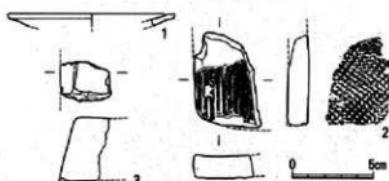
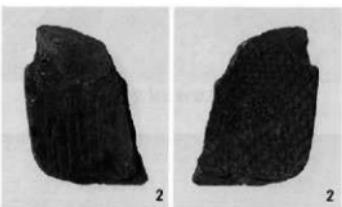


Fig.133 013号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.146 013号遺構出土遺物

受け口状に屈折しており、京都系の「て」の字状口縁皿を模したものと言える。回転台成形で、横撫で調整する。2は、須恵器の転用視である。壺の破片を削って、猿面観状に成形したものであろう。観面の平行叩き痕は、摩耗して消えかかっている。3は、砂岩製の磁石である。上下面と側面が残るが、すべて磁石として使用されている。そのほか、土師器皿・壺（底部窓切り）、黒色土器A類碗、瓦器、越州窑系青磁、高麗青磁、白磁、初期龍泉窑系青磁、土錐、瓦片などが出土した。

12世紀前半頃の土坑である。

20号遺構

第2面の中程から検出した、古墳の横穴式石室である。第1面調査時から石室北側壁の頭はのぞいていたが、石室との認識はなかった。第2面への掘り下げ段階で、南側壁の石を確認し石室の存在を認識するにいたった。なお、石室の西側は、コンクリート基礎のため破壊されている。

北側壁は、3石の並びを検出した。厚みのある板状の石を、内傾して立て並べたものであるが、石自体は切り石状に面取りされたものではない。南側壁も同様であるが、2石が残り、1石は抜き取り痕が確認できた。側壁の石は、地面を掘りくぼめて据えたものである。

床面は、茶色砂質土のままで、敷石などはみられなかった。床面の西側、コンクリート基礎による搅乱のすぐ隣では、偏平な板石を側壁に直交して並べた様子が看取できる。基礎搅乱に切られて2石しか追えないが、本来南側壁まで延びていたものと見て、樋石と考えたい。なお、この樋石に立てかけたように、須恵器台付き壺が出土している（Ph.153）。また、第1面調査段階で基礎搅乱の側面を

掘削した際、須恵器壺が縦に半割された状態で出土した。出土位置から、樋石西側に接しておかれていた壺が、基礎埋設工事で破壊されたものと考えられる。

調査区北東壁付近では、人頭大の石が、積み重なって出土した。Fig.134の見通し図では一段分ほどしか描かれていないが、第1面からの掘削に着手した当初気付かず取り除いた石があり、もう一段、ちょうど隔壁の頭のレベルあたりまでは積み上げられていた。積み重なり方に規則性が全く認



Ph.147 石室検出状況①（北東より）



Ph.150 石室検出状況②（北東より）



Ph.148 石室検出状況①（南西より）



Ph.151 石室検出状況②（南西より）



Ph.149 石室検出状況①（南東より）



Ph.152 石室検出状況②（南東より）

められないことから、閉塞石と思われる。この閉塞石を取り除いたところ、床面上から土師器壺と鉄製刀子が出土した（Ph.154・155）。

この石室に関しては、調査区の創約とコンクリート基礎による搅乱のため、全体の形状が復元し難い。あえて、推測するならば、両側壁はその石材の薄さと内傾の度合いからみて、この上さらに数段



Ph.153 020号遺構遺物出土状況（東より）



Ph.156 第13区北東壁土層（南西より）



Ph.154 020号遺構遺物出土状況（南より）



Ph.157 第13区北東壁土層（南西より）



Ph.155 020号遺構遺物出土状況（北東より）



Ph.158 第13区北東壁土層（南西より）

もの積み上げが為されていたものとは考え難い。せいぜいもう一段積んだ程度であろう。したがって、この部分の天井は、1メートルにも満たない程度にとどまるものと思われる。さらに、床面には、全く敷石など見られなかった。これらの点からみれば、本石室は玄室ではなく、羨道部分に当たるものと判断される。その場合、土師器壺の出土位置から、閉塞石の西側が石室内側に当たり、框石西側のちょうどコンクリート基礎の下付近が玄室であろう。羨道の幅は、床面で125センチを測る。

墳丘の封土は、土層図 (Fig. 132) の15~17層が該当すると

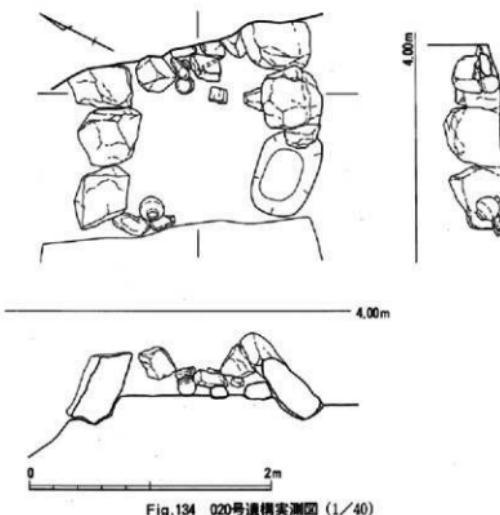
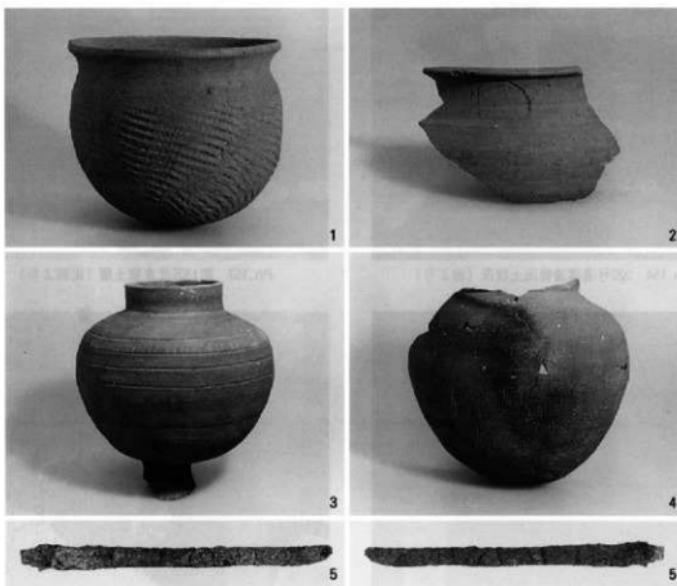


Fig.134 020号遺構実測図 (1/40)



Ph.159 020号遺構出土遺物

思われる。15層を覆う4層は旧耕作土であり、この部分に関しては、中世段階までは墳丘が残っており、一帯が畑地化した近世遺構に15層上面の高さまで削平されたものと考えられる。

出土遺物をFig.135に示す。1は、土師器の壺である。閉塞石下の床面に据えられていた。口縁部内外面は横撫で調整、肩部は搔き目で、体部は格子目の叩きである。内面は、当て具痕跡を撫で消している。焼成は良好である。

2~4は、須恵器である。2は、石室内の埋土中から出土した壺である。内外面とも横撫で調整で、肩部には搔き目が巡る。頸部には、範記号も見られる。3は、椎石際から出土した台付き壺で、正置してあったが、検出当初から脚部を欠いていた。内面から肩部と脚部は、横撫で調整する。体部の外面は搔き目で、肩部には二条の平行沈線を横走させ、その間を板状工具の小口で刺突して埋めている。4は、コンクリート基礎に半割されて出土した壺である。頸部は横撫で調整、外面は格子目叩きで肩部から体部上半にかけては搔き目を重ねる。内面には、同心円の当て具痕が残る。

5は、鉄製刀子である。閉塞石の下から出土した。基部の大半を欠失するが、刃は残っていた。身長長さ14.4センチ、刃部での幅1.2センチを測る。

これらの出土遺物からみて、6世紀末から7世紀初めにかかる時期の横穴式石室を考えることができよう。

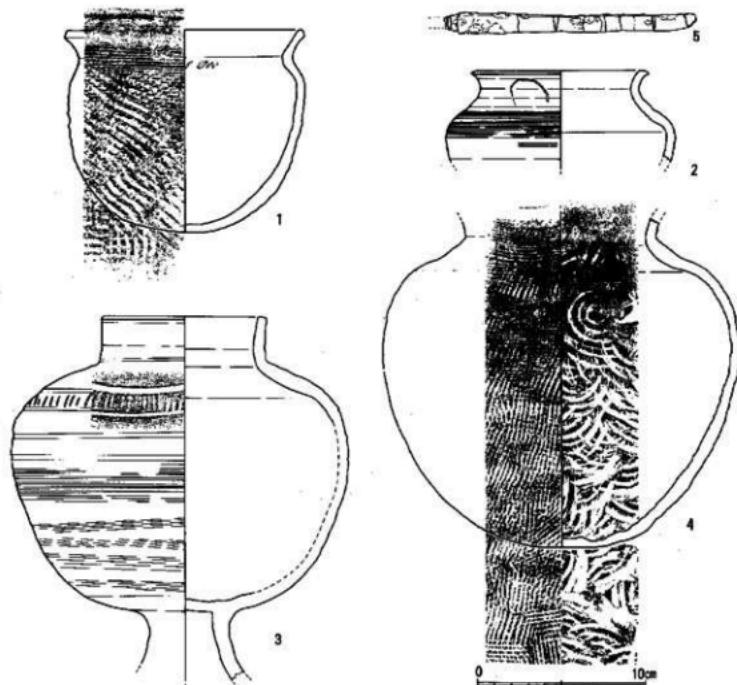


Fig.135 020号遺構出土遺物実測図 (1/3)

29号遺構

第3面の南東壁に沿って検出した、溝状遺構である。側壁・延長方向ともに調査区外にでるため、全体は知り得ない。

土師器・須恵器の小片が出土しているが、時期を判断する決め手にはならなかった。ただし、層位的に21号遺構の封土下に埋没していた遺構であることは明らかで、古墳築造以前の遺構の例としてあえて取り上げたものである。

(14) 第14区（B区）

バックホーで旧耕作土を除去した後、3面の遺構検出面を設定した。第15区と並んで、今回の発掘調査で最初に手を付けた調査区である。調査面積は、41.8平方メートルを測る。

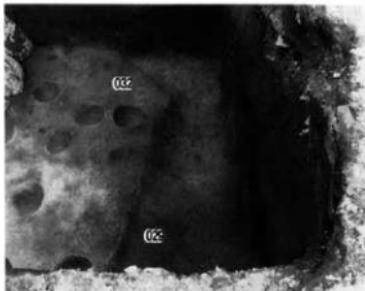
第1面

旧耕作土下の遺物包含層の中程で設定した遺構検出面である。標高は、3.75メートル前後を測る。

柱穴・土坑・集石遺構・道路状遺構などを検出した。遺構密度は低い。底部糸切りの土師器と、鍋運弁文の青磁・口禿の白磁などが主体で、13世～14世紀前半の遺構検出面と言えよう。07号遺構から青白磁盤口壺の口縁部や褐釉陶器合子蓋などが出土している（Fig.188-54・59）。

第2面

淡黄色砂層上面で設定した遺構検出面である。標高は、3.5メートル前後を測る。



Ph.160 第13区029号遺構 (南西より)



Ph.161 第14区1面 (北より)



Ph.162 第14区2面 (北より)



Ph.163 第14区3面 (北より)

柱穴・土坑・溝状遺構・道路状遺構などを検出した。土坑は、長方形を呈するものが多く、調査区中央付近に固まっている。ただし、時期差はあるようで、切り合いが激しい。27号遺構と28号遺構は、平行した溝状遺構である。27号遺構が10~11世紀、28号遺構が11世紀と若干の時期のずれがあるようで、掘りなおしに当たる可能性もある。

11・12世紀を主体とした遺構検出面である。

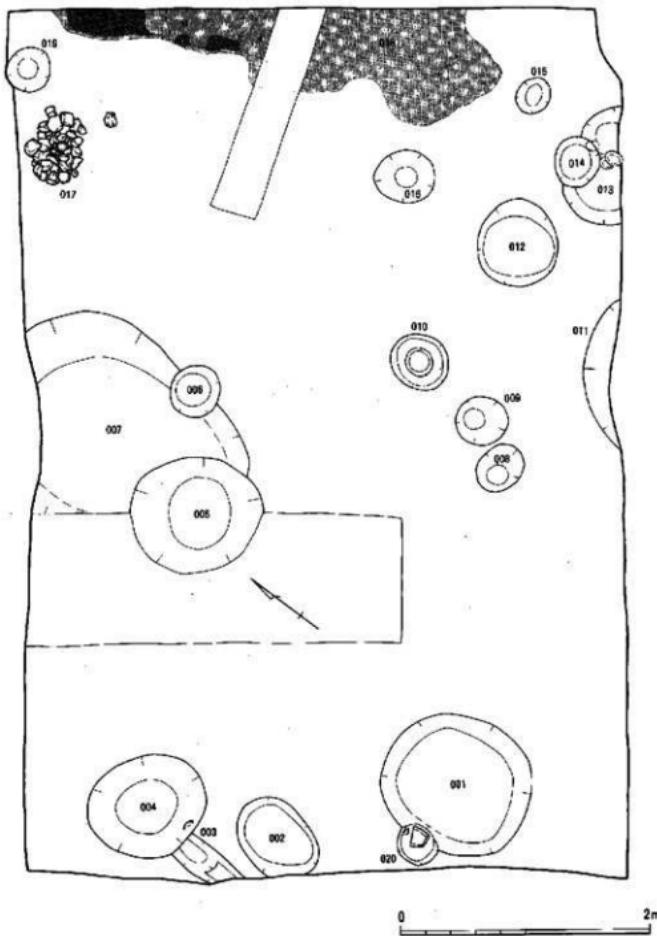


Fig.136 第14区 1面遺構全体図 (1/40)

第3面

淡黄色の地山砂層を若干掘り込んで設定した遺構検出面である。標高は、3.3メートルである。

柱穴・土坑・竪穴住居跡？・堀留基などを検出した。土師器・須恵器が出土する遺構が多く、古代を主体とした遺構検出面と言える。41号遺構・53号遺構・60号遺構などは、壁がほぼ直立し、底面は平坦では水平となり、竪穴住居跡の可能性が考えられる。ただし、いずれの遺構でも壁溝・窓・炉

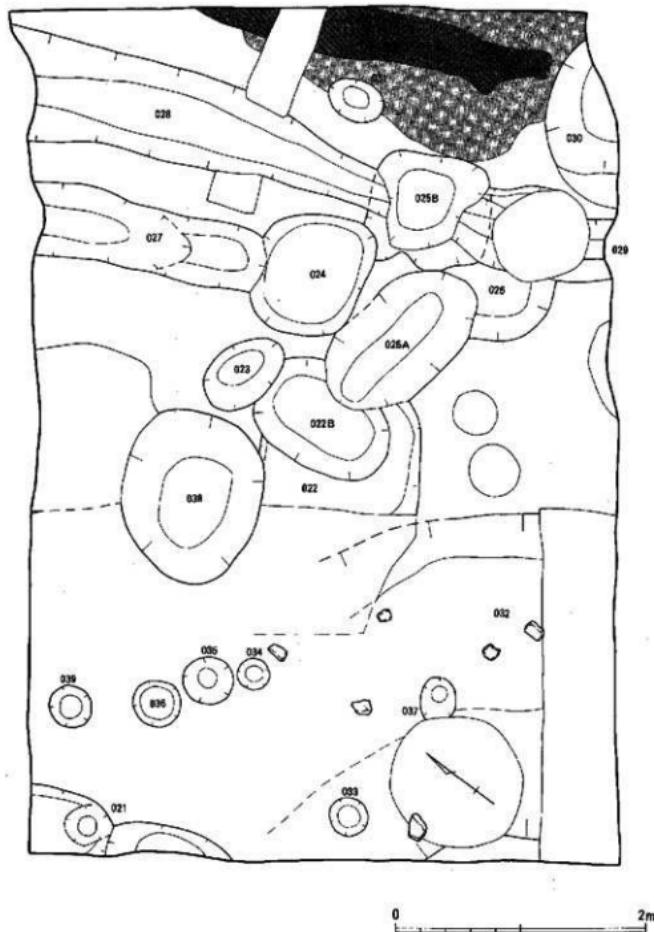


Fig.137 第14区2面遺構全体図 (1/40)

跡などは見つかっておらず、竪穴住居跡とする積極的な証左に欠ける。時期的には、8~9世紀に属するものであろう。40号遺構の底面からは、弥生時代中期の甕棺墓が出土した。同様にして、弥生時代中期の大型壺が出土した68号遺構も見つかっており、弥生時代中期の墓域の一端をかすめたことがうかがわれる。なお、弥生時代の甕棺墓は、後述する第16区からも見つかっているが、分布の密度は極めて低い。

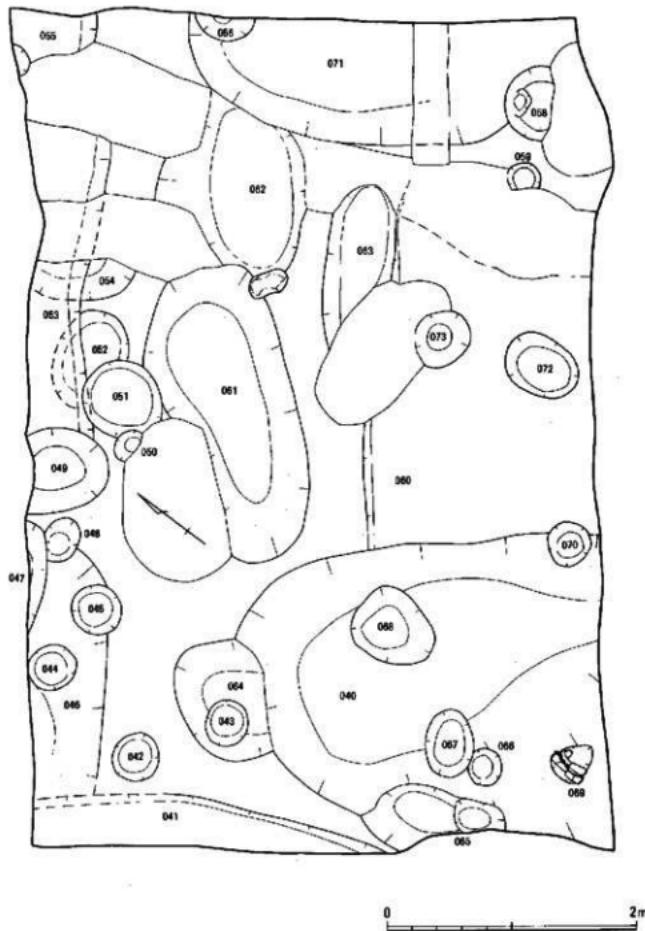
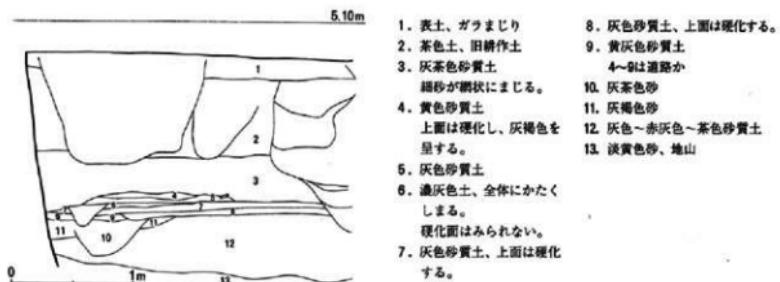


Fig.138 第14区3面遺構全体図 (1/40)



道路状構

第1面と第2面において、調査区北東壁に沿って検出したものである。砂質土による路面整地と、暗灰色土のかさ上げ（若干の盛り土）の互層として検出された。砂質土の上面が硬化した状況が、累重的にしばしば見られ、数回にわたって作りなおし、維持していたことがわかる。

硬化面の広がりは、調査区北東壁に入り込んでおり、道路幅などは確認できなかった。また、調査区側の路肩は直線的には表れず、側溝も伴わないで、散密な方向はつかめない。おおむね真北から20度ほど西偏したものと言える。

出土遺物が細片のみで時期を押さえ難いが、13世紀代の30号遺構に切られている点から、13世紀に下限があるとして大過なかろう。

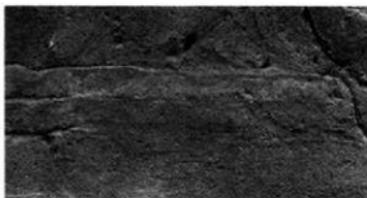
13号遺構

第1面の東角から検出した土坑である。半分程度が調査区外に出る。おそらく、直径100センチ前後の円形を呈するものと思われる。遺構検出面からの深さは、60センチ程度を測る。

出土遺物の一部を、Fig.140に図示する。すべて土器であり、1・2は皿、3~7は壺である。底部は回転糸切りで、3・4・6・7の内底には、静止拂で調整が加えられている。皿の口径は、7.4・8.2センチ、器高1.1センチ、壺は口径12.5~13.0センチ、器高2.4~2.8センチを測る。この他、瓦器碗の



Ph.164 第14区北東壁土層 (南西より)



Ph.165 道路状構整地断面

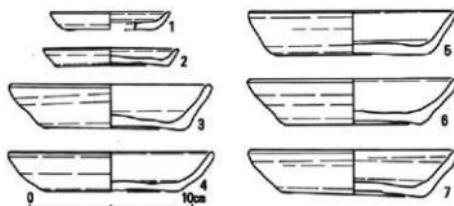


Fig.140 013号遺構出土遺物実測図 (1/3)

小片が出土している。

おおむね、14世紀前半頃の土坑であろう。

17号遺構

第1面北角付近で検出した集石遺構である。長径60センチ、短径50センチほどの範囲に礫を集めたもので断ち割りしたところ、浅い皿状の土坑を掘って、礫で充填したものと確認できた。集石上に礫石が据えられていた形跡はないが、本来は礫石を伴ったものと思われる。他の柱穴とは、構造的に明らかに異なっており、瓦葺きの建物などを想定することができよう。

出土遺物をFig.141に図示する。1は、越州窯系青磁の碗である。胎土はきめ細かく均質で、精品である。2は、内黒土器（黒色土器A類）の碗である。内面には、密に篦磨きを施す。3は、平瓦である。上面は布目、下面は縦目の上に丁寧な削りを加える。

11世紀頃の遺構と考えられる。

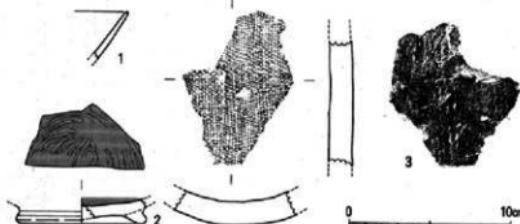


Fig.141 017号遺構出土遺物実測図 (1/3)

22号遺構

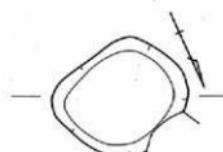
第2面のほぼ中央で検出した土坑である。後述する25号遺構に切られている (Fig.143)。長軸116センチ（推定）、短軸80センチの小判型を呈し、遺構検出面からの深さは23センチ前後を測る。

底部鋸切りの土師器・瓦器碗の破片が出土しており、12世紀後半の土坑である。

24号遺構

第2面の中程において検出した土坑である。後述する27号遺構を切る。長軸114センチ、短軸102センチの不整長方形を呈し、遺構検出面から底面までの深さは13センチを測る。

出土遺物をFig.142に示す。ともに須恵器である。このほか、底部鋸切りの土師器・陶器などが出土しており、11世紀後半頃の土坑と思われる。



25号遺構

第2面の中程から検出した土坑である。当初、大型の土坑を想定していたが、掘り上



Fig.142 024号遺構出土遺物実測図 (1/3)・遺構実測図 (1/40)

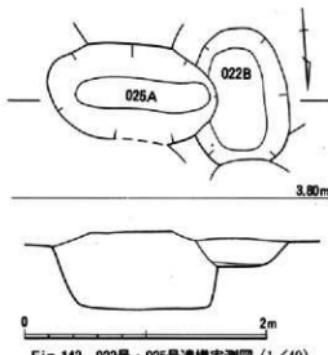


Fig. 143 022号・025号遺構実測図 (1/40)

瓦質土器こね鉢などが出土しており、13世紀代の土坑と考えられる。

27号遺構

第2面において検出した溝状遺構である。調査区中程で、24号・25号遺構などに切られるが、その延長部は確認できないので、この切り合ひ付近で止まるものと推測できる。

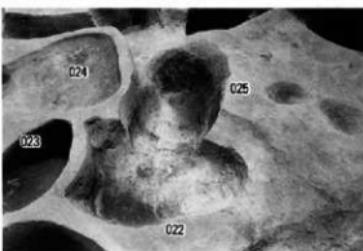
幅は50~60センチ、遺構検出面からの深さは30~50センチで、途中で段を為して深くなる。

出土遺物をFig.144に示す。1・3・4は、土師器の碗である。1は、口縁部の小片で、内面を鏡磨きする。外面は、横拂で調整する。3・4は底部片で、横拂で調整、内底部を拂で調整する。高台径は広く、高く立ち上がる。2は、黒色土器B類の碗である。内外面ともに、密に鏡磨きを施す。5は、越州窯系青磁碗である。胎土はきめ細かく、精品である。

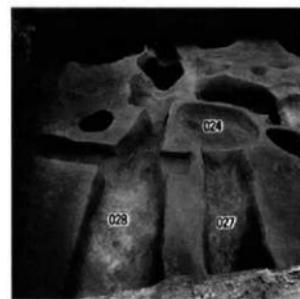
10世紀後半頃の溝であろう。

げた結果、二遺構に分かれた。ここでは、出土遺物から時期が明らかな25A号遺構について図示する。

底部糸切りの土師器皿・坏、龍泉窯系青磁、白磁、



Ph.167 第14区022号・025号遺構(西より)



Ph.168 第14区027号・028号遺構(北西より)

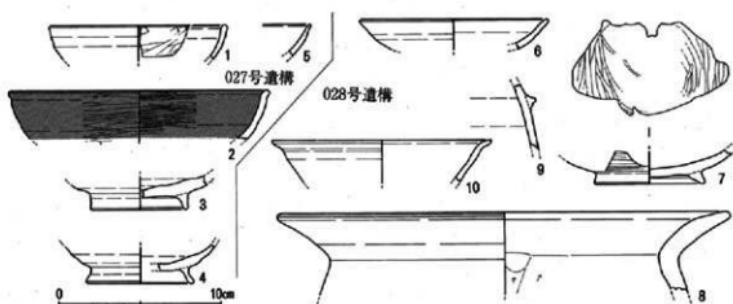


Fig. 144 027号・028号遺構出土遺物実測図 (1/3)

28号遺構

第2面の北東辺近くから検出された、溝状遺構である。幅は33~90センチ、遺構検出面からの深さは22~40センチで、底面は南東から北西に傾斜している。磁北から26度ほど西偏する。

出土遺物をFig.144に示す。6~8は、土師器である。6は、壺である。横撫で調整する。7は、碗である。内外面とも、密に蒐磨きする。高台は幅広で、低い。8は、甕である。口縁部は横撫で、体部内面は蒐削りする。9は須恵器である。大型の容器であるが器肉は薄く、器形は不明である。10は、越州窯系青磁の碗である。器肉は薄く、器形は整うが、胎土の肌理は粗く、粗製の感がある。

11世紀前半の溝と思われる。



Ph.169 第14区030号遺構（北西より）

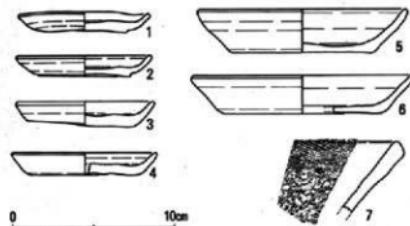


Fig.145 030号遺構出土遺物実測図 (1/3)

30号遺構

第2面東角近くで検出した土坑である。

大部分が調査区外に出ており、全形は知り得ない。

遺構検出面からの深さは、56センチ程度である。出土遺物を、Fig.145に示す。1~6は、土師器である。底部は回転糸切りで、体部は横撫で、内底部には静止撫で調整を加える。1~4は、皿である。口径7.8~9.0センチ、器高1.15~1.5センチを測る。5・6は壺である。5は、口径13.0センチ、器高2.65センチである。6は、器高がやや低めなのに対し、口径は広い。口径13.8センチ、器高2.35センチを測る。7は、土師質土器のこね鉢である。内面は刷毛目調整、外面は指押さえする。内面の表面は、使用のため剥離気味である。

13世紀前半の土坑である。



Ph.170 第14区040号遺構（南より）

32号・40号遺構

32号遺構は第2面、40号遺構は第3面の、南角近くで検出した大型土坑である。同一遺構の可能性が高いが、判断の根拠を欠くため、別の遺構と

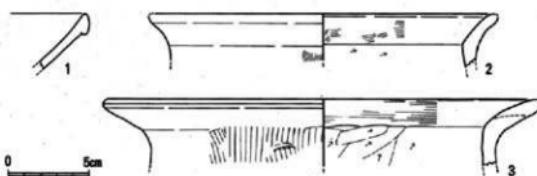


Fig.146 040号遺構出土遺物実測図 (1/3)

して遺構番号を付けている。32号遺構としては、幅265センチで緩く弧を描く溝状に見えたが、西半で検出が困難になった。40号遺構としては、西側が丸くおさまる大型土坑状を呈する。第3面を見ると、40号遺構の西側には、古代の41号遺構が営まれており、ここまで延びることはありえず、大型土坑と見るべきだろう。

40号遺構からの出土遺物を、Fig.146に図示する。1は、白磁碗である。口縁を玉縁につくる。2・3は、土器器の壺である。口縁部内面は横刷毛の後横撫で、外面は横撫で、体部内面は施前り、外面は継の刷毛目調整を施す。40号遺構からは、この他、土器器（底部糸切り）、瓦器碗、龍泉窯系青磁、弥生土器片が出土している。弥生土器は、40号遺構が後述する68号遺構・69号遺構などの弥生時代の遺構を破壊しているためである。

12世紀後半の大型土坑と考えられる。

41号遺構

第3面の南西辺に沿って検出した遺構である。

Ph.171 第14区041号遺構（南東より）

かなり大型の掘り込みであるが、その大部分が調査区外となるため、全形は知り得ない。掘り込みの上端は、若干弧を描くものの、ほぼ直線的に延び、壁はほぼ直立する。底面は、平坦である。このような特徴からみて、竪穴住居跡の可能性が高いものと思われる。遺構検出面から床面までの深さは、22センチ前後を測る。

出土遺物をFig.147に示す。ともに須恵器の壺である。1は、体部から口縁部にかけての破片である。内外面ともに、横撫で調整する。2は、高台壺の底部である。断面が逆台形を呈する低平な高台を貼り付ける。内外面ともに横撫で調整で、内底には静止撫でを加えている。

これらの出土遺物から、8世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。

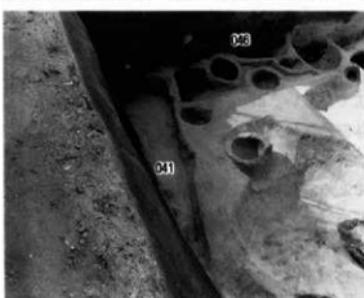
46号遺構

第3面西角付近において

検出した大型土坑である。大部分が調査区外に出るために、全体の形状はうかがえない。最初は、竪穴住居跡の可能性を考えたが、壁の立ち上がりが緩く、竪穴住居跡の壁とは考えにくい。よって、大型土坑とするにとどめたい。遺構検出面から底面までの深さは、38.3センチを測る。



Ph.172 第14区046号遺構（東より）



Ph.171 第14区041号遺構（南東より）

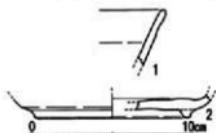


Fig.147 041号遺構出土物
実測図 (1/3)

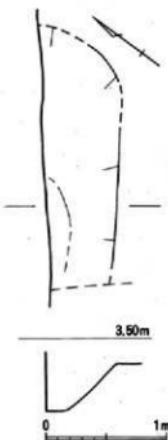


Fig.148 046号遺構
実測図 (1/40)

埋土の上面から、石椎が出土した（Ph.112）。Fig.149とPh.173に図示する。滑石の塊から削りだしたもので、摘みを欠いた分銅型を呈する。丁寧な削りで、滑らかな曲面を作っている。上面と下面は、やや凸レンズ状をなす。側面はおむね直線的に開くが、一側面のみ、屈折して広がる。全体の丁寧な成形からみると、違和感がある。あるいは、この部分の削り残しで、椎の重量を加減したのかも知れない。ちなみに、974グラムを測る。

さて、摘みは削り出さないが、上面から側面に、紐掛けの穴が通っている。上面から穿孔したようで、実測図の左の孔ではすぐ右に接して、錐を当ててすぐに取りやめた小さいくぼみが残

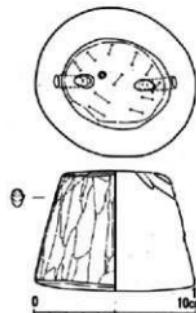
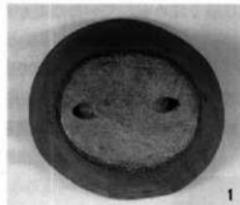


Fig.149 046号遺構出土遺物
実測図 (1/3)



Ph.173 046号遺構出土石椎

る。また、右の孔でも、上面から穿孔したものの、角度が深すぎて中止し、穿孔をやり直している様子がみて取れる。さらに仔細にみると、左の孔では、孔径が上面側で広く、側面側で若干狭いのに対し、右の開けなおした孔では逆になる。したがって、右側の穿孔のやり直しは、側面から上面に向けて行われたことが推測できる。

この他、土師器・須恵器の小片が出土しているが、時期を判断する決め手にはならない。前述した41号遺構に切られていることから、8世紀後半以前の堅穴住居跡であろう。

60号遺構

第3面の中程東側から検出した堅穴住居跡である。南側は、40号遺構に切られ、失われる。北側は71号遺構の手前で直角に折れ曲がる。遺存した部分から測って、北西辺は320センチ以上、北東辺は170センチ以上となり、遺構検出面からの深さは25センチ前後を測る。

土師器・須恵器が出土しているが、図示に耐えなかった。須恵器の高台壺・平底壺からみて、おおむね8世紀代の堅穴住居跡と考えて大過ないものと思われる。



Ph.174 第14区060号遺構 (南より)

68号遺構

第3面の南角近く、40号遺構の底面から検出された土坑である。掘り込み面は地山砂層上面より上にあったはずだから、本来大きな土坑であったのかもしれないが、現況では長軸58センチ、短軸52センチの卵型を示すに過ぎない。

弥生土器片が出土している。胴部破片が、底部破片の下に入り込んで出土しており、当初から破損した状態で埋められていたことがわかる。

出土した弥生土器をFig.151に示す。大型壺で、直接接合はできないが、胴部片と底部片は同一個体と考えられる。らっきょう形の胴部に、平底の底部を持つ。胴部の最も膨らんだ部分には、帯状に剥離痕

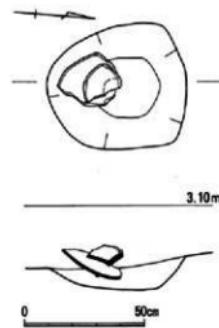
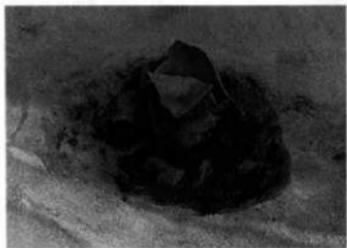


Fig. 150 068号遺構実測図 (1/20)



Ph. 175 第14区068号遺構 (北より)



Ph. 176 068号遺構出土遺物

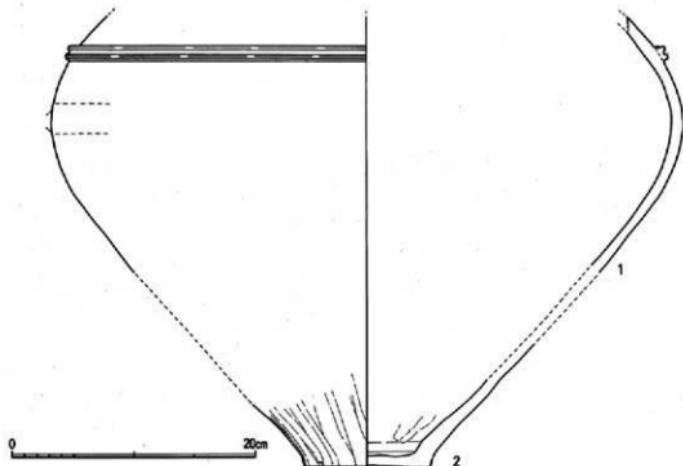


Fig. 151 068号遺構出土遺物実測図 (1/4)

跡が残り、突帯が巡っていたことがわかる。肩部にも断面M字形の突帯が巡るが、同様の突帯が胴部中央にも巡っていたものと推測できる。全体に器面が荒れており、調整痕跡はほとんど残っていない。底部破片でみると、内面には指で撫で上げた痕跡が、外面には幅広の工具による撫で上げ痕（磨き痕？）がうかがわれる。

弥生時代中期中頃の土坑である。

069号遺構

第3面の南角近く、40号遺構の底面から検出された壺棺墓である。掘り込み面は地山砂層上面より上にあつたはずだから、本来かなり深い墓壙を持っていたはずだが、現況ではほとんど確認できない。壺棺の合わせ口付近が原位置を保っていたので、それと確認できた。遺存状態は極めて悪い。主軸方位は、磁北から96度東偏する。なお、壺棺は、日常土器の壺を転用したものである。

壺棺に使用された壺片は、第1面01号遺構・第3面40号遺構などからも出土しており、接合できた。なお、上壺の底部は直接接合できなかつたが、器肉の厚さ、色調から判定した。

壺形土器の実測図を、Fig.153に示す。口縁部は逆L字形、底部は平底に作る。外面は縱方向の刷毛目調整、内面は撫で調整で平滑に整える。

弥生時代中期中頃の壺棺墓である。

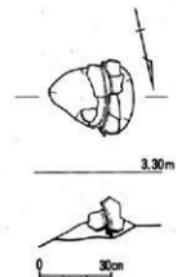
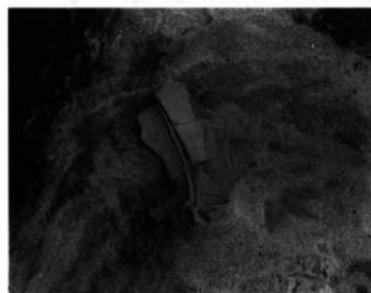


Fig.152 069号遺構
実測図 (1/20)



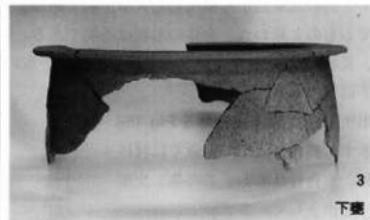
Ph.177 第14区069号遺構（北より）



Ph.178 第14区069号遺構（東より）



2
上壺



3
下壺

Ph.179 069号遺構出土遺物

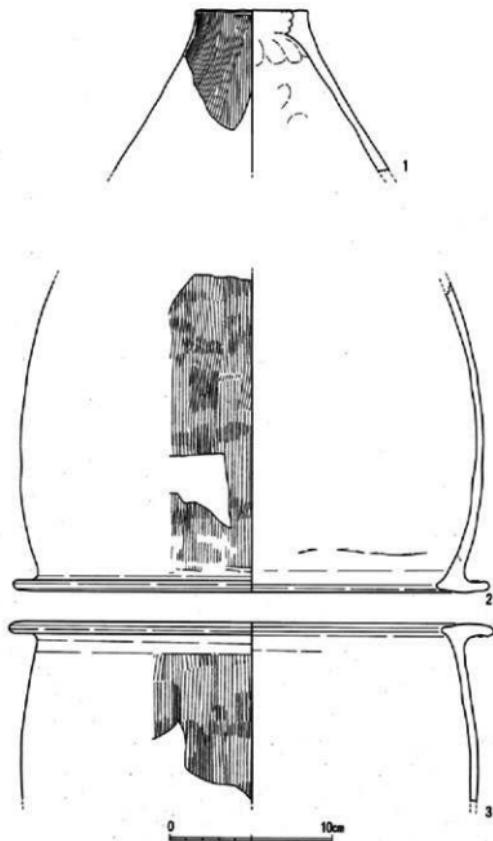


Fig.153 069号遺構出土遺物実測図 (1/3)

71号遺構

第3面の北東辺から検出した大型土坑である。大半が調査区外にでるものと思われ、全体の形状は不明である。遺存部分によれば、長軸は290センチを越える。遺構検出面からの深さは、30センチ前後である。

出土した須恵器高台壺をFig.154に示す。高台は底部の端近くに付けられ、高台径は広い。この他、土師器片も出土している。

8世紀前半の土坑であろう。

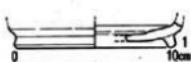


Fig.154 071号遺構出土遺物
実測図 (1/3)

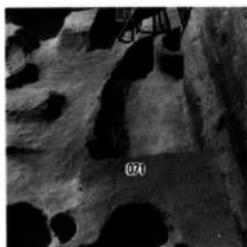


Fig.180 第14区071号遺構 (南東より)

(15) 第15区（A区）

今回の発掘調査で、最初に着手した調査区である。北側二分の一弱が深く搅乱されているが、地元住民の話によれば、太平洋戦争下で防空壕が掘られていたとのことであった。調査面積は、27.1平方メートルである。

第15区では、遺構は検出できなかったが、弥生時代の土器片が散見された。前項で述べた第14区、次に述べる第16区においては、弥生時代中期の甕棺墓が調査されており、その間に挟まれた本調査区付近でも、甕棺墓などの弥生時代の遺構が分布している可能性は少なくないことを示す遺物と言えよう。

第1面

バックホーで表土と旧耕作土を除去した後、引き続いて少しづつ包含層を下げていて土器窪（07号遺構）にあたり、掘り下げを中断して設定した遺構検出面である。標高は、3.76メートルを測る。

柱穴・土坑・溝状遺構などを検出した。07号遺構は、溝状遺構であるが、びっしりと土師器小皿・环がつまっていた。いわゆる「かわらけ溜まり」の溝である。遺構密度は、全体に薄い。遺構から出土した遺物を概観すると、すべての遺構で底部を糸切りする土器が見られた。14世紀後半以降に降る貿易陶磁器や国産陶器・土師器なども見られず、14世紀前半頃の遺構検出面と推定される。

なお、第1面遺構検出時に越州窯系青磁が出土した。Fig.187-42に図示する。



Ph.181 第15区1面（北東より）

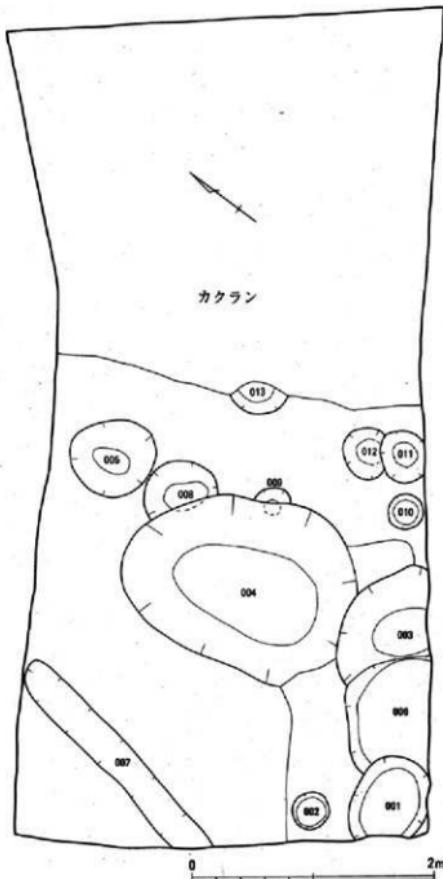


Fig.155 第15区1面遺構全体図 (1/40)

第2面

包含層の下部、暗褐色土層で設定した遺構検出面である。標高は、3.5メートル前後を測る。第1面からは25センチ程度しか掘り下げていないので、第1面の遺構による掘り込みが、随所に残っている。

柱穴・土坑・溝状遺構などを検出した。遺構密度は、非常に薄い。14号遺構からは、底部糸切りの土師器、鎧蓮弁文の青磁碗などが出土しており、13世紀代に比定できる。また、越州窯系青磁も混入していた。17号遺構は、土師器（底部糸切り）、雲文の青磁碗、石鍋などを出しておらず、12世紀後半に位置づけられる。20号遺構は、土師器（底部糸切り）、瓦器碗、白磁、陶器、石鍋などを出し、12世紀代におかれ。

これらの遺構の年代観からみて、第2面は、12~13世紀頃の遺構検出面であると言えよう。



Ph.182 第15区2面(北東より)

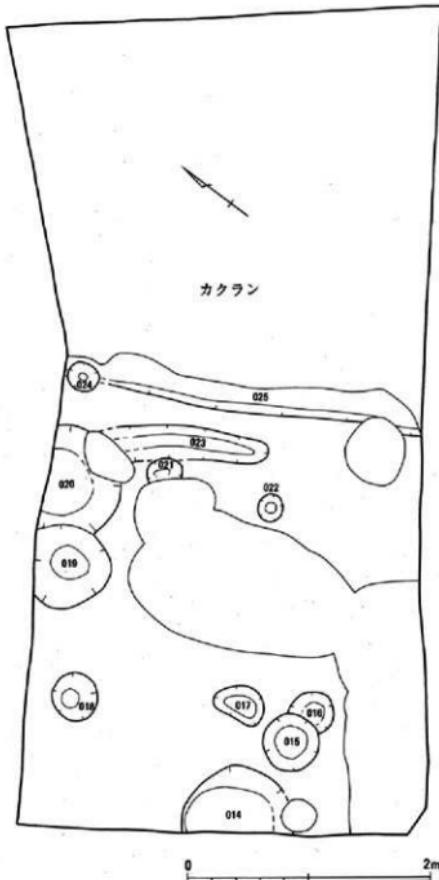


Fig.156 第15区2面遺構全体図(1/40)

第3面

淡黄色砂層（地山）上面で設定した、遺構検出面である。まず、地山砂が見えた標高3.4メートル前後で遺構検出を試みた。しかし、包含層からの汚染等で、砂の色調がはっきりせず遺構検出が困難な部分があった。そこで、若干の掘り下げを追加して行い、標高3.3メートル前後で再度遺構検出を行った。前者を第3 A面、後者を第3 B面とするが、本来は单一の遺構検出面である。

柱穴・土坑を検出した。第3 A面で検出した遺構には、26号遺構や28号遺構のように13世紀代の遺構も含まれている。これらは、第2面まで検出し落としていた遺構であろう。32号遺構は、土師器（底部糸切り）、青磁碗（割文）、白磁などを出した土坑で、12世紀後半に位置づけられる。33号遺構は、方形竪穴状土坑である。土師器（底部糸切り）、瓦器、青磁などを出しており、これも12世紀後半に属する。このほか、特に第3 B面の遺構からは、遺物の出土が極端に少なく、所属時期が判断できない遺構が多い。



Ph.183 第15区3B面（北東より）

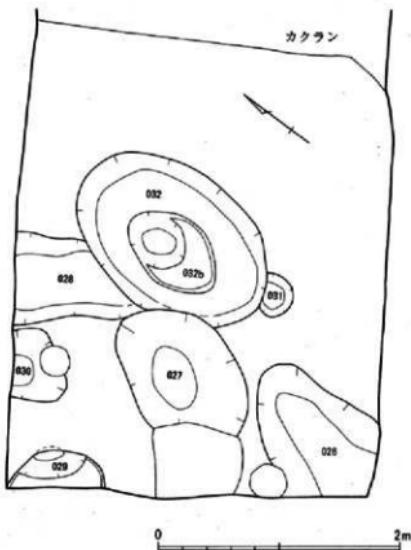


Fig.157 第15区3A面遺構全体図 (1/40)

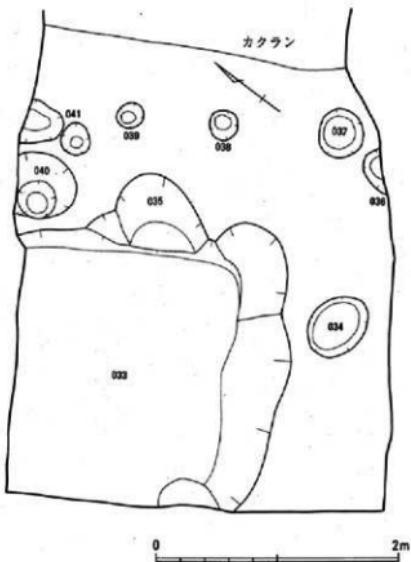


Fig.158 第15区3B面遺構全体図 (1/40)

04号遺構

第1面の中央部で検出した土坑である。長軸205センチ（推定）、短軸148センチの卵形を呈し、遺構検出面からの深さは52センチを測る。

出土遺物をFig.160に示す。1は、土師器の壺である。底部は回転糸切りで、横撫で調整、内底部には静止撫でを加える。口径13.0センチ、器高2.65センチを測る。2~5は、白磁である。2・3は、口禿の皿である。4の碗は、見込みの釉を輪状に掻き取る。またこの部分に、窯道具の痕跡が付着している。5は、壺の肩部である。6・7は青磁である。6は小鉢で、内面には菊弁状の丸彫りがうかがえる。7の碗は、内面に片切り彫りと櫛描き文で花文を、外面に片切り彫りで蓮弁を描き櫛描き文を重ねる。外面の下部は露胎となる。8・9は、陶器である。8は、褐釉の小口瓶である。9は鉢であろう。

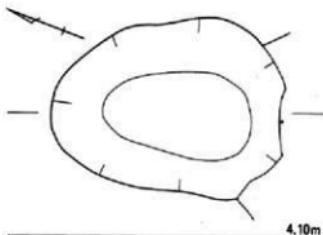


Fig.159 004号遺構実測図 (1/40)

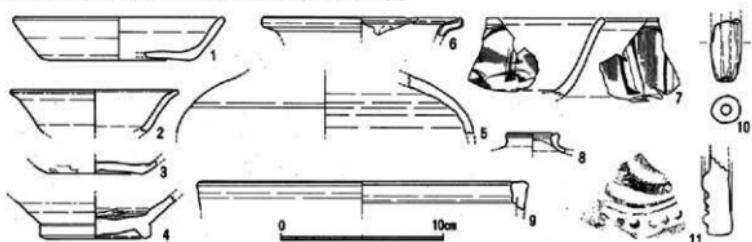


Fig.160 004号遺構出土遺物実測図 (1/3)

無釉だが、釉が剥げたように見える。10は、管状土錘である。土師質に焼成される。11は、軒丸瓦の一部である。外区には珠文が並び、圓線を隔てて巴文の尻尾が残っている。

13世紀後半~14世紀前半の土坑である。

07号遺構

第1面の西角付近で検出した、溝状遺構である。幅30センチ前後、深さ25センチほどの溝の埋土上半に土師器皿・壺がびっしりと詰まって出土した。溝は南から延びてきて、調査区の北西壁ぎりぎりで、立ち上がり収束する。真北から10度東偏した方位を取る。

土師器は、溝の断面形に沿うように傾いて詰まっている。溝が埋まりきらず、まだ機能している段階で捨てられたことが推測される。土師器には、原型をとどめたまま割っていたものと、細片化し



Ph.184 第15区007号遺構 (北より)

た後捨てられたものとがあり、後者が大多数で、ほとんど接合できなかった。個体認識ができた限りで、土師器皿9点、壺38点を数える。

Fig.162-1~18は、土師器である。底部は回転糸切りで、内底部に静止拂で、外底部に板目圧痕を持つ。1~4は皿で、固化していない分も含めた法量は、口径7.9~8.2センチ、器高1.15~1.3センチを測る。5~18は壺である。法量は、口径12.0~13.6センチ、器高2.6~2.9センチであるが、17は

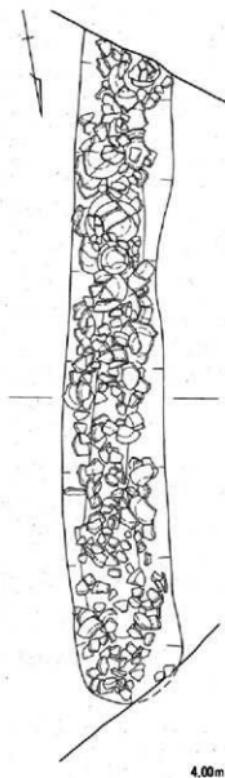


Fig.161 007号遺構実測図 (1/15)



Ph.185 007号遺構遺物出土状況（北より）



Ph.186 007号遺構遺物出土状況（東より）



Ph.187 007号遺構断面（北より）

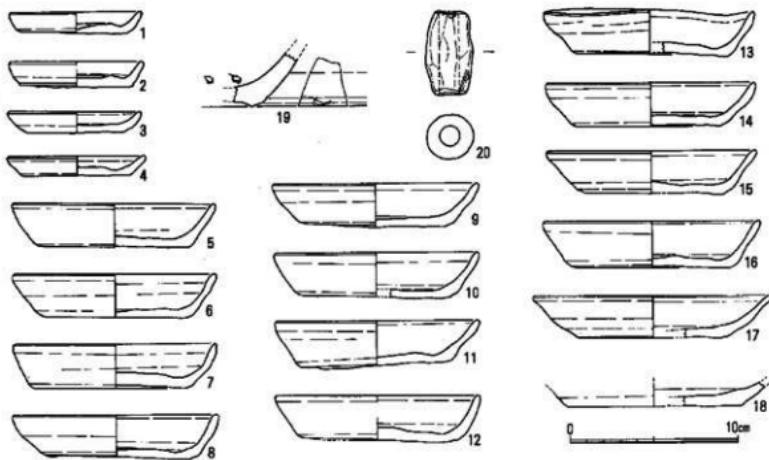


Fig. 162 007号遺構出土遺物実測図 (1/3)

大きく、口径14.4センチを測る。19は、越州窯系青磁碗である。外底部は露胎になるが、胎土の肌理は細かく均質で、精品の部類にはいる。見込みには、目痕が並ぶ。20は、管状土錐である。土師質に焼成される。このほか、青磁・白磁・陶器などが出土している。

14世紀前半頃の土師器一括廃棄遺構である。

13号遺構

第1面中程の、防空壕擾乱の縁で検出した、柱穴である。擾乱に切られ全形は明かではないが、直徑60センチ程度、深さ22センチの円形を呈するものと推測できる。

出土遺物の一部をFig.163に図示する。ともに土師器である。底部は、回転式切りする。1は皿で、口径7.8~8.2センチ、器高1.3センチ、2は壺で、口径12.6センチ、器高3.7センチを測る。このほか、白磁・土鍋・石鍋などが出土した。

14世紀前後の柱穴であろう。

28号遺構

第3A面から検出した土坑である。調査区北西壁から32号遺構にかけて延びるが、全形は知り得ない。

出土遺物をFig.164に示す。1・3は白磁、2は青白磁、4は青磁（同安窯系）である。3は、口禿皿の底部であり、これによって時期を考えるとすれば、13世紀代の土坑とするのが妥当であろう。

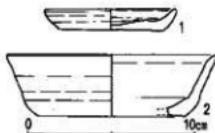


Fig. 163 013号遺構出土遺物
実測図 (1/3)

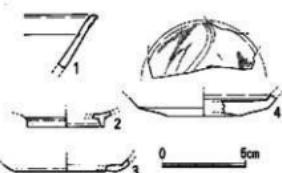


Fig. 164 028号遺構出土遺物実測図 (1/3)

(16) 第16区・第17区 (C区・C'区)

今回の発掘調査では、最も南端に位置する調査区である。道路用地としては、さらに南に延びるが、試掘調査の結果、第17区の30メートルほど南では、地形は下降し遺構・遺物は検出できなかった。本来的には、調査地点を繋いで、地形・遺構の変換点を探る必要があるが、第17区の南隣接地は路地、その南は建物基礎による搅乱と、調査を行う条件に恵まれなかった。したがって、今回の発掘調査は、第17区を南限とせざるを得なかったのである。

第16区には、第15区の調査に引き続いて着手した。第16区終了後その南に隣接する狭小な敷地の調査にはいった。これが第17区である。調査面積は、第16区、第17区併せて、32.9平方メートルである。

第1面

旧耕作土を除去して、包含層の上部である褐色土層中に設定した、遺構検出面である。標高は、第16区で3.95メートル、第17区で3.85メートルを測る。第17区の方が10センチほど低いわけであるが、その結果、第17区において第16区ではまだ検出できない遺構が掘られてしまうという食い違いが発生した。たとえば、第17区1面の01号遺構の北端は、第16区2面の40号遺構につながる。発掘調査時の誤りとして、今後の反省材料としたい。



Ph.188 第16区1面(東より)



Ph.189 第17区1面(北西より)



Ph.190 第16区2面(東より)



Ph.191 第17区2面(北西より)

柱穴・土坑・溝状遺構・集石遺構を検出した。第16区01号遺構は、現代の擾乱である。第16区17号遺構は柱穴であるが、京都系土師器の「て」の字状口縁皿を模した在地産土師器皿が出土した（Fig. 186-12）。また、24号遺構からは京都系土師器皿の搬入品が出土している（Fig. 186-15）。第17区06号遺構では、土師器のミニチュア柄付き鍋が出土した（同-23）。そのほか、表土掘削時に、高麗青磁碗（Fig. 187-31）、越州窯系青磁碗（同-45）が出土している。

第1面は、おおむね13世紀を主体とした遺構検出面である。

第2面

褐色砂層の上面で設定した遺構検出面である。標高は、第16区で3.75メートル、第17区で3.65メートルを測る。

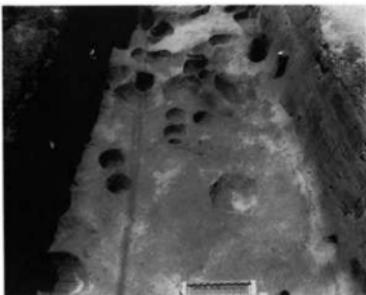
柱穴・土坑を検出した。第16区33号遺構は、大半が調査区外となる大型の土坑で、底部窓切りの土師器、内黒土器などが出土している。11世紀代の遺構であろう。第16区50号遺構では、底部を窓切りする土師器皿と糸切りする皿とが、共存している。12世紀前半と思われる（後述）。一方で、第16区34号遺構、同37号遺構など底部糸切りの土師器のみの遺構も見られる。この様に第2面では、底部を窓切りする土師器や黒色土器を主体とする遺構が見られる反面、依然糸切りのみの遺構もあり、11～12世紀の遺構検出面と考えられる。

なお、第16区では、第1面からの掘り下げ時に、灰釉陶器碗の小片が出土した（Fig. 186-16）。

第3面

淡黄色砂層（地山砂層）上面で設定した遺構検出面である。標高は、3.3～3.4メートルを測る。

柱穴・土坑・竪穴住居跡・甕棺墓を検出した。遺構密度は薄く、柱穴なども散漫に分布している。柱穴の配置からは、東西方向に柱筋を持った掘立柱建物が復元できそうである。ただし、建物として把握できるにはいたっていない。第16区58号遺構からは、完形の須恵器壺蓋が出土しており、7世紀後半の大型土坑である（後述）。竪穴住居跡は第17区において検出した。方形住居であるが、柱穴・壁溝・火處などは未確認である。土師器の小片が出土しているのみで、時期は決め難い。弥生時代の甕棺墓は、ほとんどが削平され、わずかに胴部片のみが残っていた。原位置は保っているものと思われる。なお、甕棺墓の下からは、64号遺構が検出された。当然甕棺墓よりも先行するが、遺物が出土しておらず、時期は限定できない。



Ph.192 第16区 3面（北東より）



Ph.193 第17区 3面（北西より）

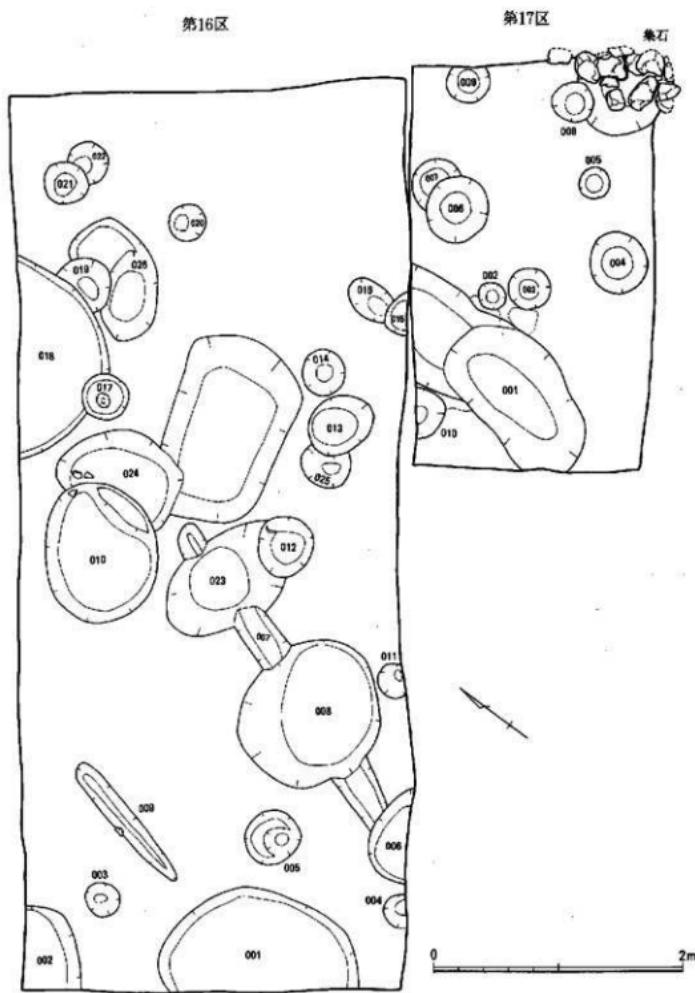


Fig.165 第16区・17区1面連構全体図 (1/40)

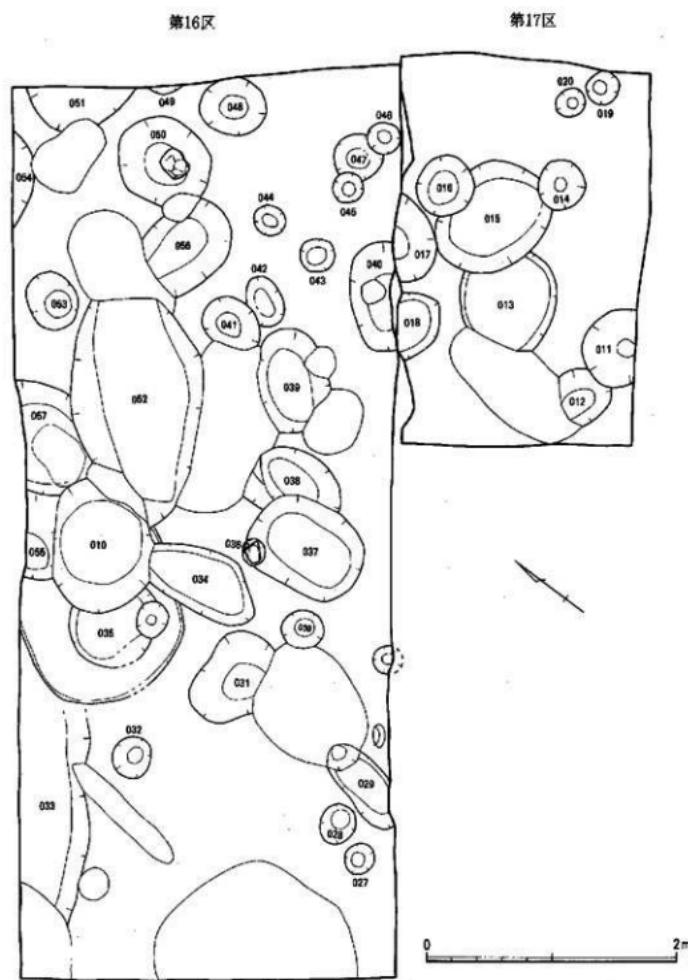


Fig.166 第16区・17区 2面造構全体図 (1/40)

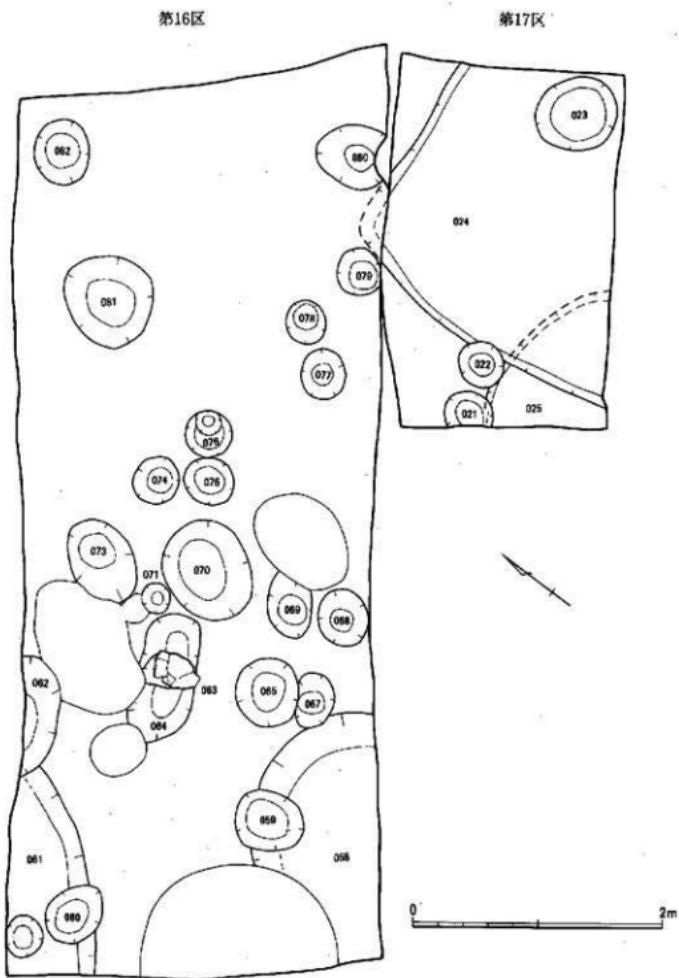


Fig.167 第16区・17区3面遺構全体図 (1/40)

第16区08号遺構

第1面の中程南寄りから検出した土坑である。07号遺構（溝）に切られる。長径120センチ、短径110センチの楕円形を呈し、遺構検出面からの深さは、40センチ前後を測る。

出土遺物をFig.168に示す。すべて土師器である。1・2は、皿である。底部は回転糸切りする。1は口径が小さいに対し、器高は高い。口径7.2センチ、器高1.85センチを測る。2は、口径8.3センチ、器高1.1センチである。3・4は、高台付きの壺である。高台は厚く、高い。5～7は、壺である。底部は、回転糸切りする。口径12.2～13.6センチ、器高2.7～2.9センチを測る。

このほか、白磁片が出土した。

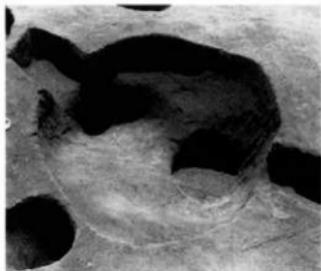
13世紀代の土坑であろう。

第16区23号遺構

第1面の中央付近から検出した土坑である。07号遺構・12号遺構に切られる。長軸105センチ（推定）、短軸75センチの楕円形を呈し、遺構検出面からの深さは23センチである。

出土遺物をFig.169に示す。すべて土師器の壺である。底部は回転糸切りする。内外面とも横撫で調整で、内底部には静止撫で調整、外底部には板目圧痕がみられる。1～4に比べ、5は口径が広く、器高は低い。1～4は、口径1.2.0～12.6センチ、器高2.4～3.1センチ、5は、口径13.5センチ、器高2.55センチを測る。

23号遺構から出土したのは、土師器のみで、Fig.169



Ph.194 第16区008号遺構（北東より）

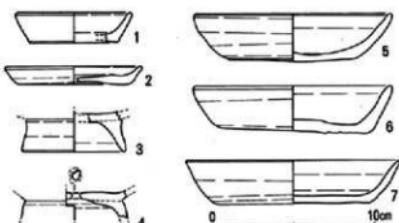
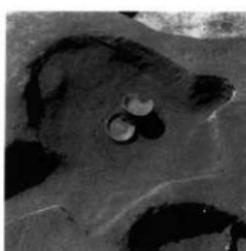


Fig.168 008号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.195 第16区023号遺構（東より）

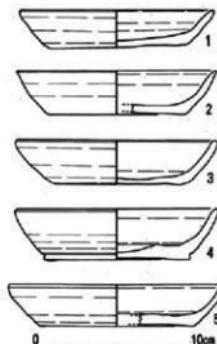
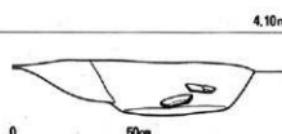
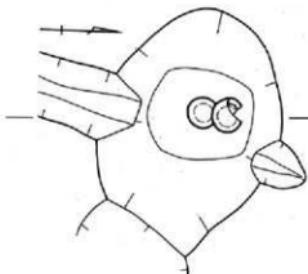


Fig.169 023号遺構実測図 (1/20)・出土遺物実測図 (1/3)

に見るように、埋土中位から、完形もしくはそれに近い形で出土した。

13世紀頃の土坑である。

第16区026号遺構

第1面の南角近くから検出した土坑である。19号遺構に切られ、西側辺の一部を失う。長軸100センチ、短軸55センチの長梢円形を呈する。底面は二段掘り状で、浅い部分で26センチ、深い部分で34センチの深さを測る。

出土遺物をFig.170に示す。1~4は、土器である。底部は回転糸切りする。内外面とも横撫で調整、内底部には静止撫で調整、外底部には板目圧痕がみられる。1・2は皿で、口径7.6・8.8センチ、器高1.25・1.5センチを測る。3・4は、壺である。口径12.2~12.4・12.2~12.6センチ、器高2.7、2.6センチである。この他、瓦質土器のすり鉢が出土した。

14世紀前半の土坑と考えられる。

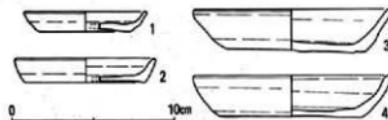


Fig.170 026号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.196 第16区026号遺構 (北より)

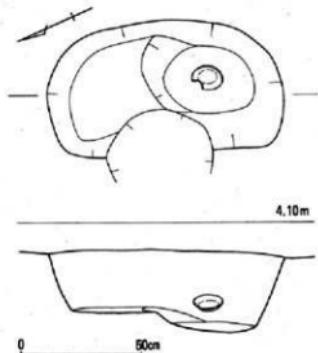


Fig.171 026号遺構実測図 (1/20)

第16区34号遺構

第2面の中程から検出した土坑である。第1面の10号遺構に切られ、南端を失う。長軸112センチ、短軸52センチの不整三角形を呈する。遺構検出面からの深さは、25センチを測る。

出土した土器壺をFig.172に示す。底部は回転糸切りである。1・3には内底部に静止糸切り調整、外底部に板目圧痕がみられる。法量は、口径12.6~13.4センチ。



Ph.197 034号遺構 (北西より)

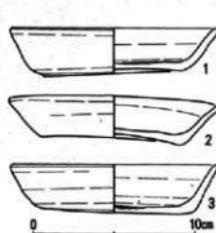
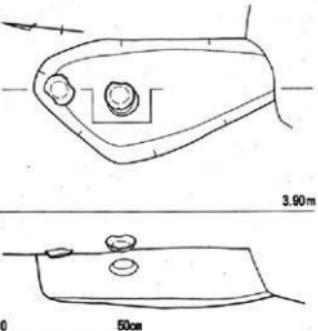


Fig.172 034号遺構出土遺物実測図 (1/3)・遺構実測図 (1/20)



ンチ、器高2.6~3.1センチを測る。

13世紀後半の土坑であろう。

第16区35号遺構

第2面中程西寄りから検出した性格不明の遺構である。35号遺構の中心部は、円形の土坑状を呈する。35号遺構の北半分は、第1面の10号遺構に切られるのであるが、35号遺構土坑部分の側壁・底面から10号遺構に切られた底部にかけては、火熱を受けて、赤~赤褐色を呈している。さらに土坑部分の周囲には、同心円状に灰黄色砂が見られるが、その範囲内に二条、同心円状の弧を描いて、薄い帯状に黄砂が入り込んでいる。

検出できた限りでは、その構造や機能な



Ph.198 第16区035号遺構（北より）

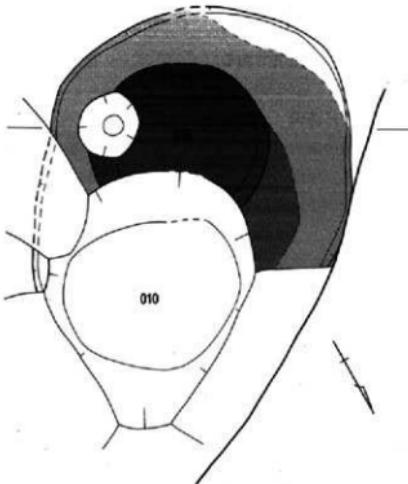


Fig.173 035号遺構実調図（1/20）

どを判断するのは困難と言わざるを得ない。土坑底面から側面が赤変していることは、ここで火を使ったことを示している。周辺にみられた灰黄色砂も、若干の粘性を持つ点から、防湿の為に周囲に貼られたものと見ることが可能なのではなかろうか。発掘調査時点では、灰黄色砂の上に地上構造物を考え、竈の基礎構造ではないかと、漠然と考えていた。しかし、そのように考える積極的な根拠は、結局のところ得られなかった。

いずれにしても、火処に関連した遺構と思われる。

遺物はほとんど出土していないため、時期を明らかにすることは出来なかった。

第16区37号遺構

第2面中程東寄りから検出した土坑である。北西角を36号



Ph.199 第16区037号遺構（南東より）

遺構（柱穴）に切られるが、全体の形状を知る妨げにはならない。長軸98センチ、短軸68センチの小判形もしくは隅丸長方形を呈する。遺構検出面からの深さは、42センチを測る。

埋土中位から上部にかけて、土師器を中心とした遺物が出土した。

出土遺物をFig.175に示す。1～15は、土師器である。1～8は、皿である。1は口径7.2センチ、器高1.9センチと、小振りな割りに深い。2～8は、口径7.6～8.2センチ、器高1.0～1.8センチを測る。9～13は、壺である。口径12.0～13.0センチ、器高2.5～2.8センチである。皿と壺は、いずれも底部を回転糸切りする。14は、碗である。丁寧に撫で調整される。底部は斂切りで、高台径は広く、高く立ち上がる。15は、高台付き皿の破片である。16は、黒褐釉陶器の蓋である。

14世紀頃の土坑であろう。

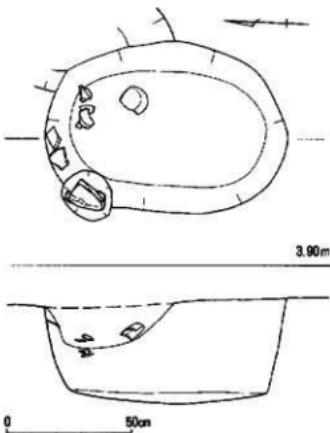


Fig.174 037号遺構実測図 (1/20)

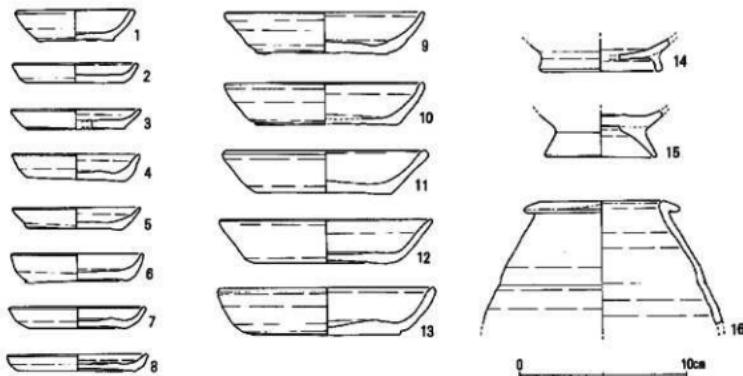


Fig.175 037号遺構出土遺物実測図 (1/3)

第16区52号遺構

第2面の中央部やや北寄りから検出した土坑である。第1面の26号遺構に切られ、北東端を失っている。長軸220センチ（推定）、短軸112センチの長楕円形を呈し、遺構検出面からの深さは、36センチを測る。

埋土上位より土師器皿、下位からは礎が出土している。埋土下位から出土した礎は、土坑床面から10センチ前後浮いており、またその配列に規則性は認められない。上位から出土した土師器皿は、Fig.177-1・3・4が重なって出土している。この場合、在地皿二枚が伏せて、京都模倣の皿がその間で上向きに置かれており、極めて作為性が高い。

出土した土師器皿を Fig. 177 に示す。1~5 は、底部を鋸切りし、内底部に静止拂でを加える。1・2 は、口縁端部が小さく屈曲している。京都系「て」の字状口縁皿を模したものであるが、回転台成形である。3~5 は、口径 10.3~10.6 センチ、器高 1.4~1.5 センチを測る。6・7 は底部を回転糸切りする。7 の内底部には、静止拂で調整が加えられている。口径 8.4~8.6 センチ、器高 1.3~1.2~1.8 センチを測る。

底部鋸切りの土師器と糸切りのものとが共伴している点から見て、12世紀前半の土坑と考えられる。

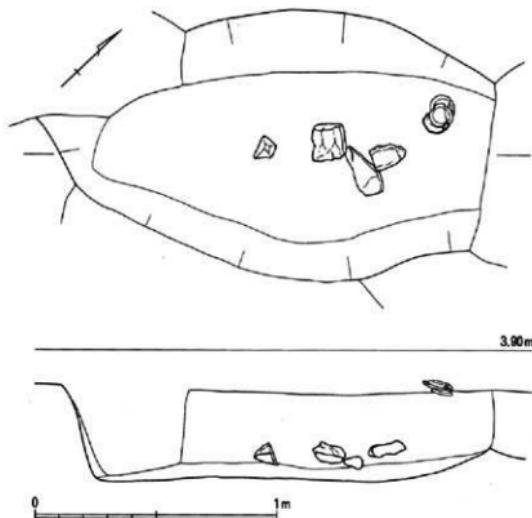


Fig. 176 052号遺構実測図 (1/20)



Ph.200 第16区052号遺構 (北西より)

第16区58号遺構

第3面の南角付近から検出した大型土坑である。半分以上が調査区外に出ると思われ、全体の形状は推測できない。調査区内の部分から予想して、少なくとも径は 200 センチ以上であり、遺構検出面から底面までの深さは 45 センチを越えると思われる。

埋土中から、須恵器・土師器が出土した。Fig. 178-1 は、須恵器の壊蓋である。完形品で出土した。口縁端部からやや内側に入って、小さな身受け部を巡らす。体部は横拂で調整で、天井部は未調整、天井

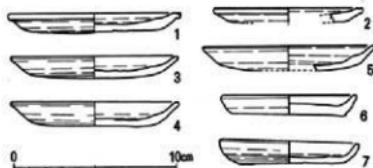


Fig. 177 052号遺構出土遺物実測図 (1/3)

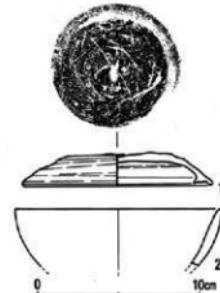
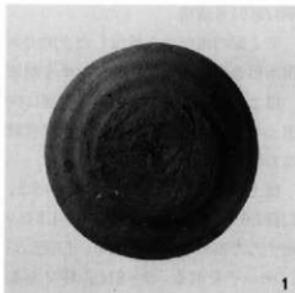
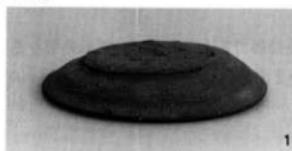


Fig. 178 058号遺構出土遺物
実測図 (1/3)

部内面は撫で調整する。また、天井部外面には、範記号が刻まれている。焼成は堅緻である。2は、土師器の鉢である。内面は右上がりの刷毛目、外面は横位の刷毛目調整する。出土遺物は以上で、遺構が大きい割には、非常に少ない。

7世紀後半の土坑であろう。



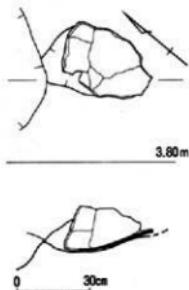
Ph.201 058号遺構出土遺物

第16区063号遺構

第3面の中程で検出した壺棺墓である。大規模に削られ、最も深い位置にあった胸部の一部分だけが、原位置をとどめたものである。

Fig.180は、弥生土器の壺である。外面は縱方向の刷毛目、内面は撫で調整で平滑に整えている。日常土器の壺を壺棺に転用したものである。

弥生時代中期の壺棺墓であろう。 Fig.179 063号遺構実測図 (1/20)



Ph.202 第16区063号遺構（南西より）

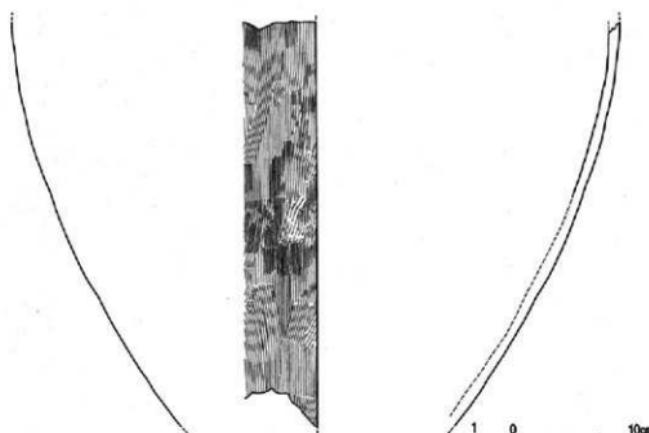


Fig.180 063号遺構出土遺物実測図 (1/4)

第17区01号遺構

第1面の南側から検出した土坑である。長辺130センチ、短辺70センチの隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さは、53センチを測る。

埋土の上位より、土坑の中央部に向かって落ち込むように傾いて、土師器の高台付き皿が完形品で出土した。この皿を副葬品または供獻品と見れば、土壤墓と考えることも可能であるが、今ひとつ判断の根拠に欠けるように思う。

出土遺物をFig.182に示す。1~8は、土師器である。底部は、回転糸切りされる。1~4は皿である。口径7.6~8.6センチ、器高1.3~1.5センチを測る。4の底部には、中央に穿孔がある。5・6は、完形で出土した高台付き皿である。口径8.5~8.6~8.8センチ、高台径6.5~6.8・6.4~6.5センチ、器高2.75~2.6センチを測る。7・8は、壺である。

口径11.8~12.6センチ、器高2.3~2.65センチを測る。9は、白磁の口禿皿である。10・11は、瓦質土器である。10は、すり鉢である。櫛状工具ですり目を入れるが、使い込んだ為にすっかり摩滅している。体部は、内外面ともに刷毛目調整である。11は、こね鉢である。遺存する部分を見



Ph.203 第17区001号遺構（西より）

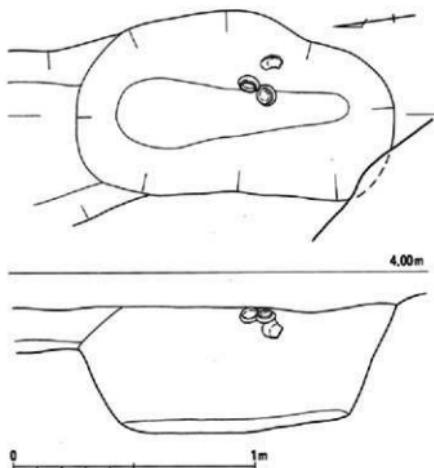


Fig.181 001号遺構実測図 (1/20)

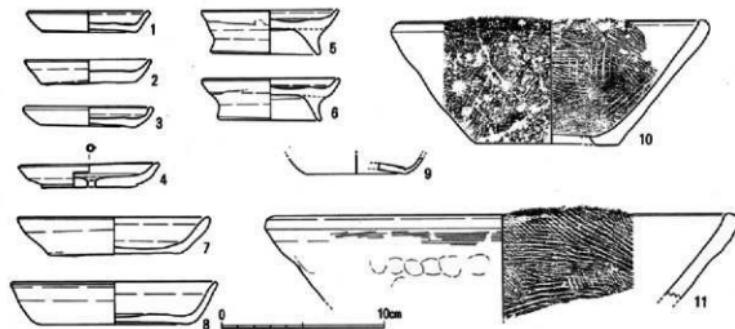


Fig.182 001号遺構出土遺物実測図 (1/3)

る限り、すり目は見当たらず、本来刻まれていなかったものと思われる。体部内面は刷毛目調整、外面は口縁部付近は横刷毛目、下部では指押さえ痕が並んでいる。このほか、瓦質土器火舎、青磁、陶器、銅壺塙、鉄釘などが出土している。

14世紀代の土坑と考えられる。



Ph.204 001号遺構出土遺物

10

第17区集石遺構

第1面の東角から検出した遺構である。調査区の壁面にかかるため、全体を検出できず、規模は明かではない。

浅い皿状の土坑を掘って、その内側に石を詰めるもので、第14区の第1面からも同様の集石遺構が検出されている。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、集石の上に礫石を据えたものとすれば、深く沈んだ遺構ではありえず、第1面の年代観からさほど遡くなき時期を考えて大過ないだろう。一応、14世紀頃を当てたい。



Ph.205 第17区集石遺構（西より）

第17区15号遺構

第2面の中程から検出した土坑である。14号遺構・16号遺構に切られる。長径98センチ、短径79センチの梢円形を呈し、遺構検出面からの深さは15センチ内外を測る。

出土遺物をFig.183に示す。ともに土師器である。1は、高杯である。脚の裾部にあたる。外面は密に範磨き、内面は刷毛目の上から撫で調整を加える。2は、甕である。口縁部の内外面は横撫で調整、体部外面は綱の刷毛目調整、内面は綱方向に粗い範削りをおこなう。

5世紀中頃の土坑であろう。

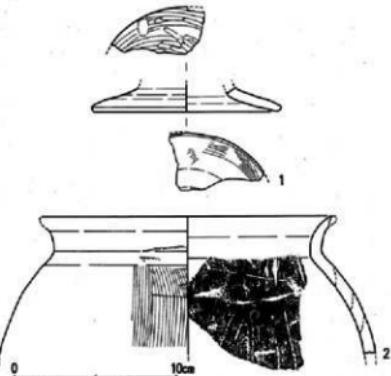


Fig.183 015号遺構出土遺物実測図 (1/3)

第17区24号遺構

第3面の大部分を占める堅穴住居跡である。大半は調査区外に出てしまうので、全体の規模は明かではない。調査区内にかかった限りでは、西辺は250センチ以上、北辺は170センチ以上で、遺構検出面から床面までの深さは15センチ前後を測る。壁面はほぼ直立するが、壁溝などは確認できなかった。また、主柱穴・竈等の火処も検出できていない。

出土遺物としては、土師器片がみられただけで、時期を判断する材料に欠けている。前項で述べた第2面の15号遺構は、本遺構の直上にあり、少なくとも15号遺構が示す5世紀中頃以前の堅穴住居跡であると言うことは言えよう。



Ph.206 第17区024号遺構（南東より）

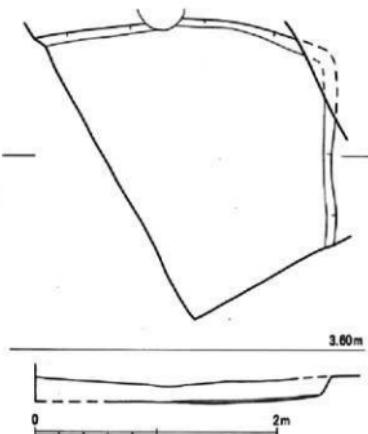


Fig.184 024号遺構実測図 (1/40)

第17区25号遺構

第3面の南角付近で検出した土坑である。大部分が調査区外となるため、詳細はわからない。遺構検出面からの深さは、18~20センチを測る。前項の24号遺構に切られる。

土師器片と木炭片が出土しているだけで、時期は不明である。少なくとも、24号遺構よりは先行する。

(17) その他の出土遺物

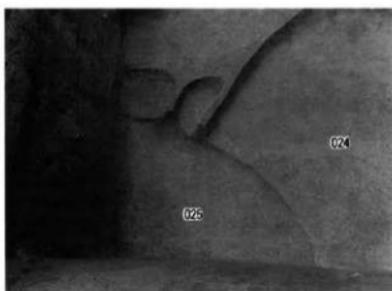
次にこれまでの記述から漏れた出土遺物の中から、看過できないと思われるものを紹介する。

Fig.185に示したのは、第13区の北西壁から重なって一括出土した土師器皿である。底部は斂切りである。口径は、9.6~10.05センチを測る。

Fig.186-1~3は、土師器の高壺である。壺部は内外面ともに密に鏡磨き、脚の箇部は縱方向の削り、据部の外面は、鏡磨きする。

Fig.186-4~6は、須恵器である。4は、壺である。底部には、範記号が刻まれている。5は、鉢である。底部には、麦わら大の細い穿孔がいくつか明けられている。6は、壺の底部近くであろう。

7~9は、縄釉陶器である。7は碗で、周防産であろう。8は、碗または皿の底部である。猪投産と思われる。9は、皿の底部である。器表は内外ともに荒れており、釉はすべて剥落している。胎土は、土師質で柔ら



Ph.207 第17区025号遺構（南東より）

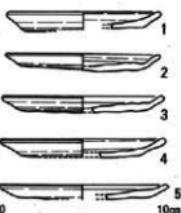


Fig.185 13区北西壁出土一括遺物実測図 (1/3)

かい。10は、灰釉陶器の碗である。尾張の折戸53号窯式に当たるるものと考えられる。

11～17は、土師器である。11は、手捏ねで、京都系の「て」の字状口縁皿である。口縁端部を折り返している。搬入品である。これに対し、12・13は、「て」の字状口縁皿を模した在地産の皿である。口縁の折り返しは、沈線に置き換えられている。13にいたっては、器肉が異様に厚く、模倣とするのに抵抗する感じ。回転台を使用して成形している。14は、高台付きの皿である。完形品で出土している。成形・調整は丁寧である。古代に属する土師器である。15・16は、京都系土師器皿である。回転台を使用せず、手捏ねで成形されている。15は、Ga-2タイプとされるものである。16は、タイプとしては思い当たらないが、手捏ねで作られている白色系の土師器なので、京都系と考えた。17は、肌理の細かい良質の胎土を用いた、白色系の土師器皿である。回転台を使用して成形している。在地にはない器形であり、搬入品であろう。

18は、楠葉型の黒色土器日類碗と思われる。密に蒐磨きを行い、口縁直下に沈線が一条巡る。

19～21は、畿内産瓦器の搬入品である。19は、楠葉型瓦器碗である。内外面ともに密に蒐磨きが加えられている。口縁端部の上面より浅い沈線が巡っている。20は、和泉型瓦器碗である。今回の発掘調査では、和泉型瓦器はこの一点しか出土していない。21は、楠葉型瓦器の外である。見込みには連結輪状文が見える。14世紀前半に降る製品であろう。

22・23は土師器である。22は、灯火器であろう。23は、ミニチュアの柄付き鍋と思われる。

24～27は、古瀬戸の陶器である。24は、入子皿である。25は、鉢皿の口縁部である。26・27は、壺の底部である。古瀬戸は、今回の発掘調査では10点が出土した。器形は、入子皿、鉢皿、折縁深皿、柄付片口、瓶、壺など多岐にわたっている。

28は、棒状の土製品で、「さな」であろう。最近、この手の土製品を瓦質土器の生産用具とする見解が出されている。あえて否定するものではないが、生産の場が想定し難い遺跡での出土例もあり、固定的に考えない方がよいと思う。本調査地点も瓦質土器生産には無縁と思われる所以、「さな」として報告するものである。

29・30は、東播系須恵器である。29は魚住窯の壺である。体部外面には平行叩き、内面には当て具痕が認められる。30は、こね鉢である。横撫で調整する。使用のため、内面はすり減って、平滑になっている。

31～33は、高麗青磁である。31・32は碗である。32は蛇の目高台で、全面施釉する精品である。33は壺である。外底部には、帯状に細かい砂が付着している。

34～48は、越州窯系青磁である。34は、香炉または壺の胴部であろう。花文を陽刻している。37は輪花皿、38は輪花碗である。39は、蛇の目高台（玉壁高台）の碗である。全面に施釉される。40は平高台、41は平底である。体部下位から外底部は露胎となる。42～48は、輪高台に作る。42～45は、全面施釉する。46は、壺付きから内側が露胎となる。47・48は、見込みに花文を刻む。全面施釉で、高台の内側に目寂が付く。今回の発掘調査では、越州窯系青磁は、73点出土している。このうち、全面施釉の精品とされるものが39点を占めており、粗製の越州窯系青磁が大量にもたらされている博多湾沿岸にあっては、比較的高比率と言えよう。

49～51は、青磁である。49は皿である。高台部を欠失している。体部内面は屈折して半坦面を為し、口縁部にいたる。今回の発掘調査では、このタイプの皿は数少なかったので、あえてここに取り上げた。50は、小碗である。全面に施釉し、高台壺付きの釉を削り取っている。51は、皿である。基筒底風の高台の内側は白磁となっている。全面施釉で、壺付きの釉を搔き取る。16世紀代に降る景德鎮窯系の青磁であろう。

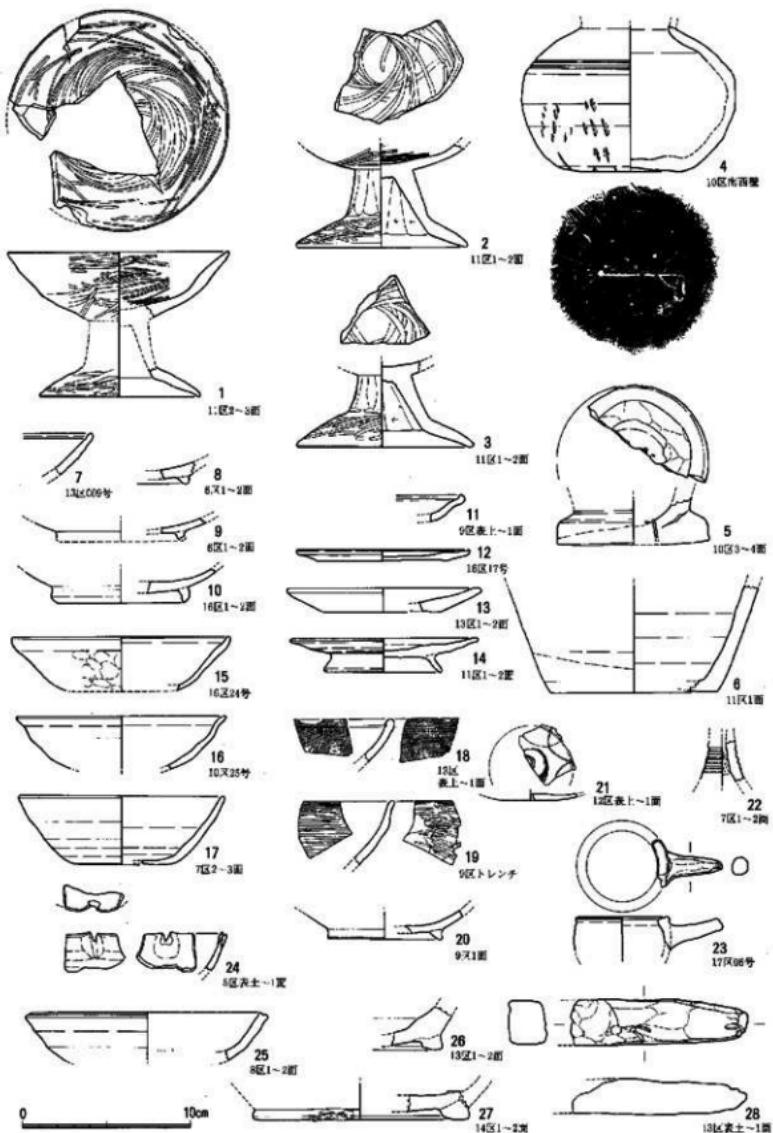
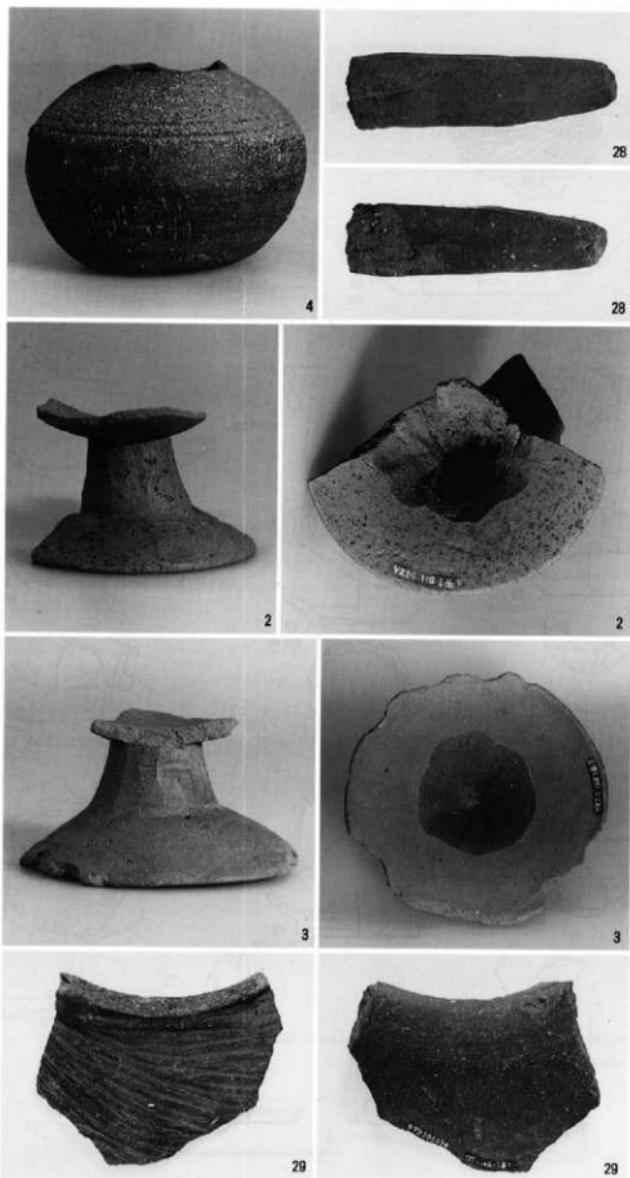


Fig.186 その他の出土遺物実測図 1 (1/3)



Ph. 208 その他の出土遺物 1

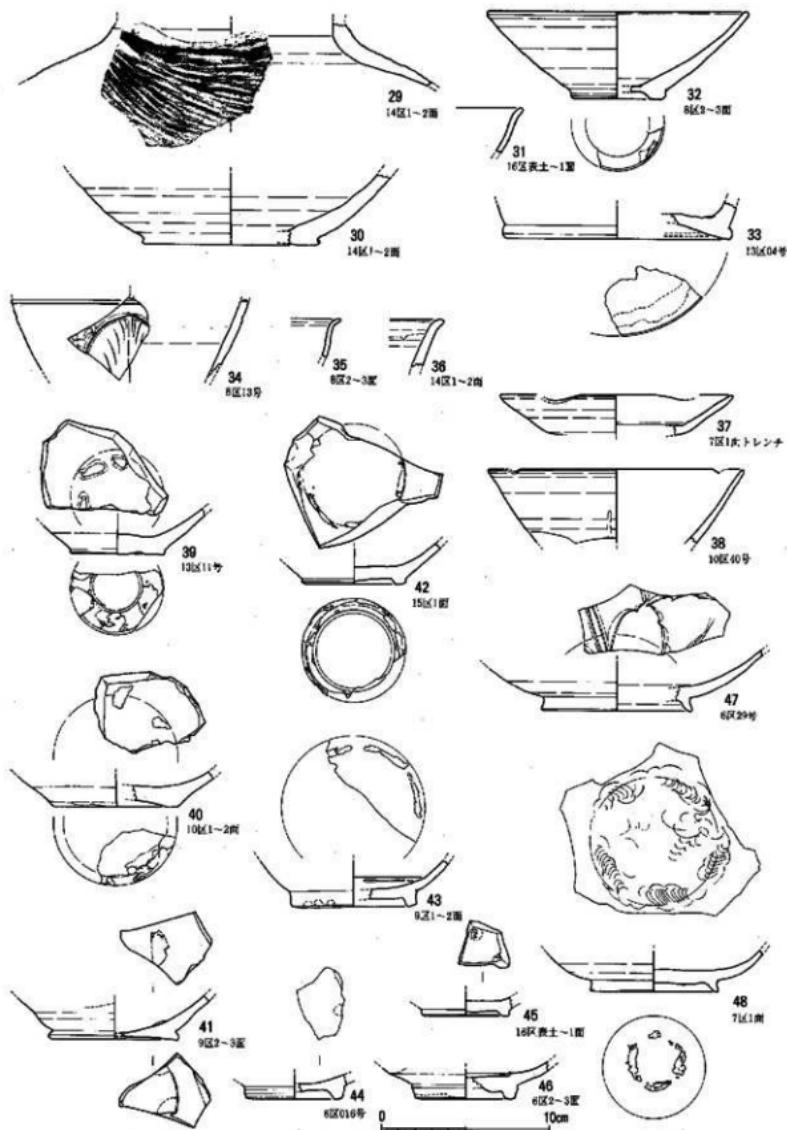
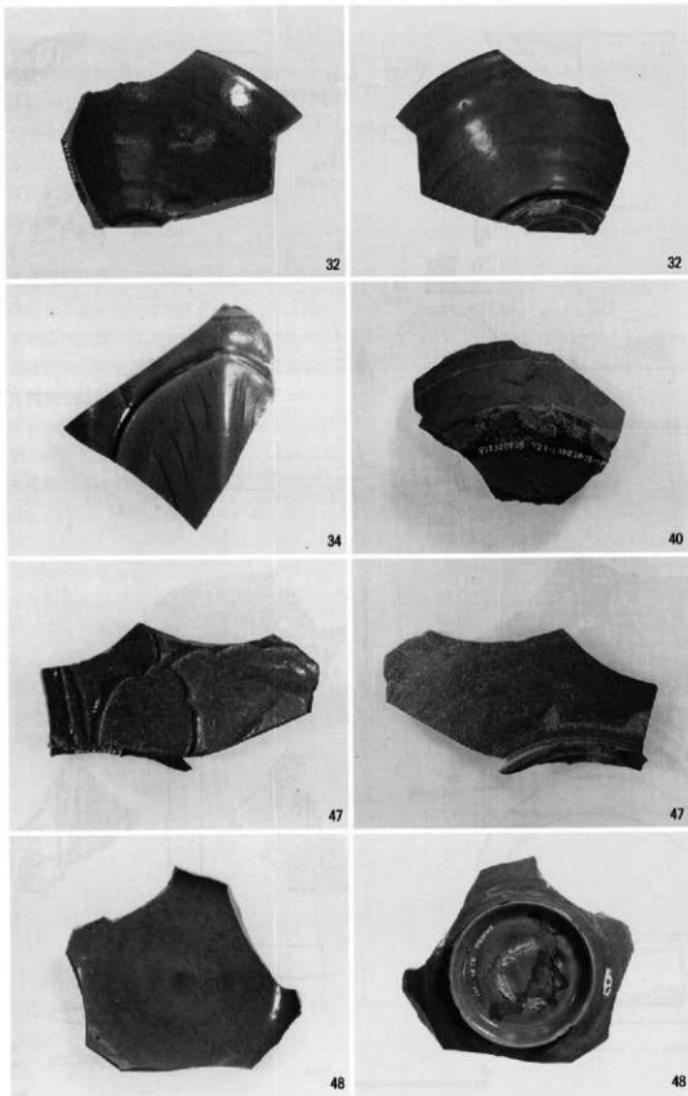


Fig.187 その他の出土遺物実測図 2 (1/3)



Ph.209 その他の出土遺物 2

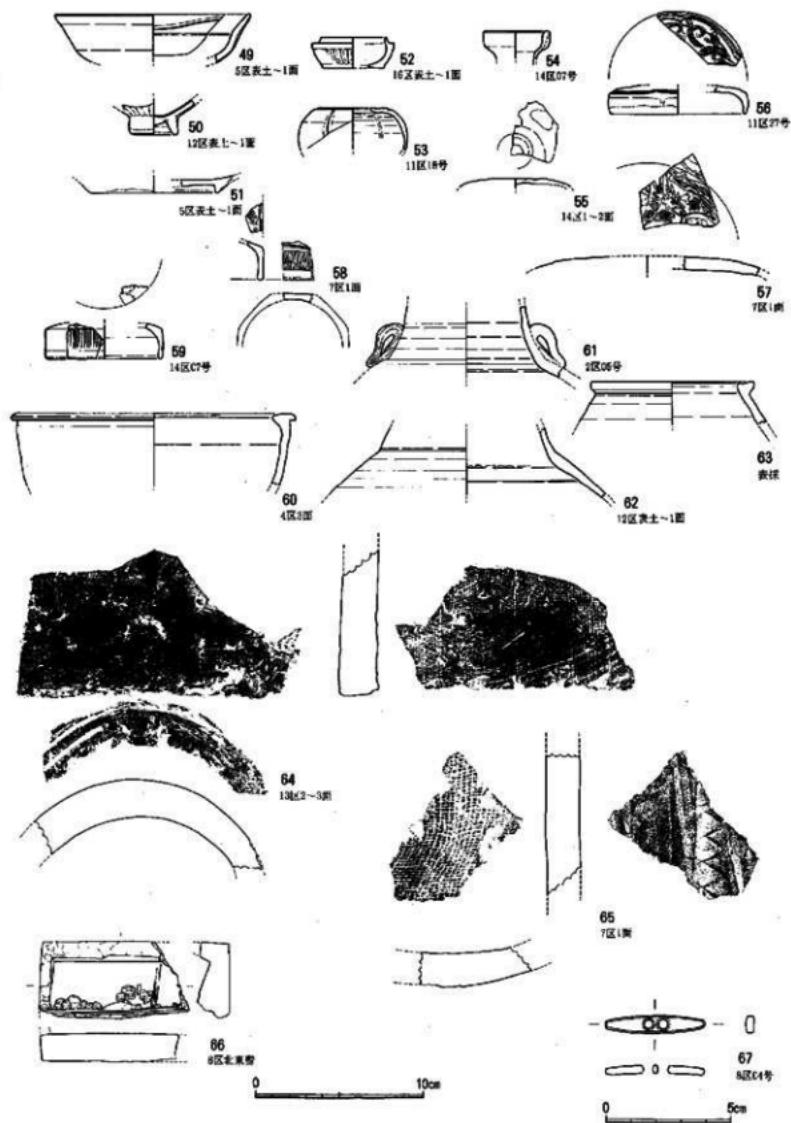


Fig.168 その他の出土遺物実測図 3 (1/3, 67-1/2)

52・53は白磁である。52は、合子の身である。側面には、菊弁を陽刻する。53は、小壺である。体部には瓜形にへこみを入れる。

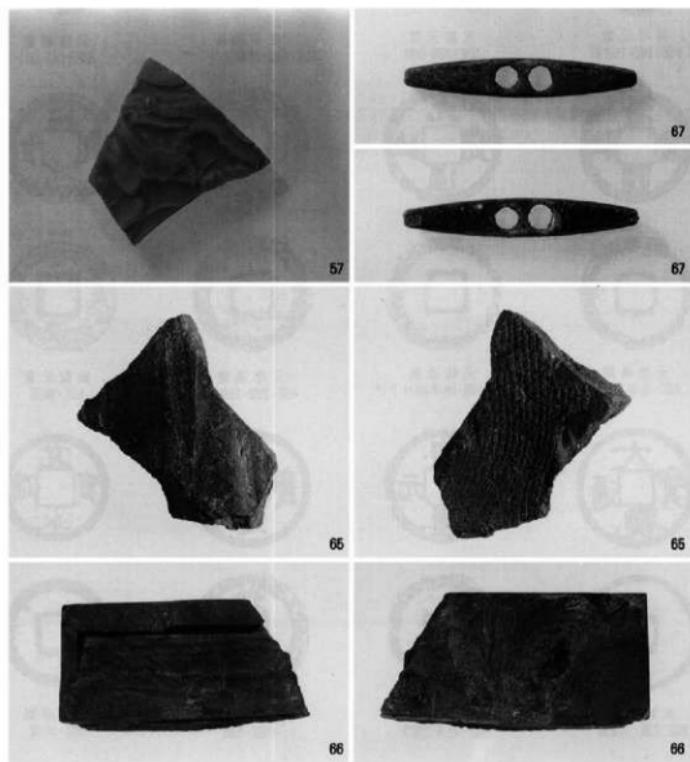
54～57は、青白磁である。54は、整口の袋物の口縁部である。55は、合子の蓋である。同心円文があしらわれている。56も合子の蓋である。天井部に印花文を押す。合口部分の軸は、斜めに削り落とされている。57は、壺の肩であろう。印花文が見られる。

58～63は、陶器である。58・59は、茶褐色の合子蓋である。天井部にはわずかに印花文がうかがわれる。60は、灰縁軸の鉢である。61は、褐軸の壺である。62は無軸の壺で、内面にはガラスが付着していた。ガラス培塗として転用された物と思われる。63は、無軸の瓶である。

64・65は瓦である。64は丸瓦で上面は撫で、下面には布目がみられる。65は、平瓦である。上面には布目、下面には叩き痕跡が残る。古代の瓦であろう。

66は、石製品である。赤間石の硯を再加工した物で、擦り込みをいれ、そこから折り取っている。加工途中の未製品である。

67は、銅製金具である。紐を通す止め具であろう。



Ph.210 その他の出土遺物 3

銅錢

吉塚祝町遺跡第1次調査では、25枚の銅錢が出土した。その内訳と拓本を、Tab.2・3、Fig.189に示す。

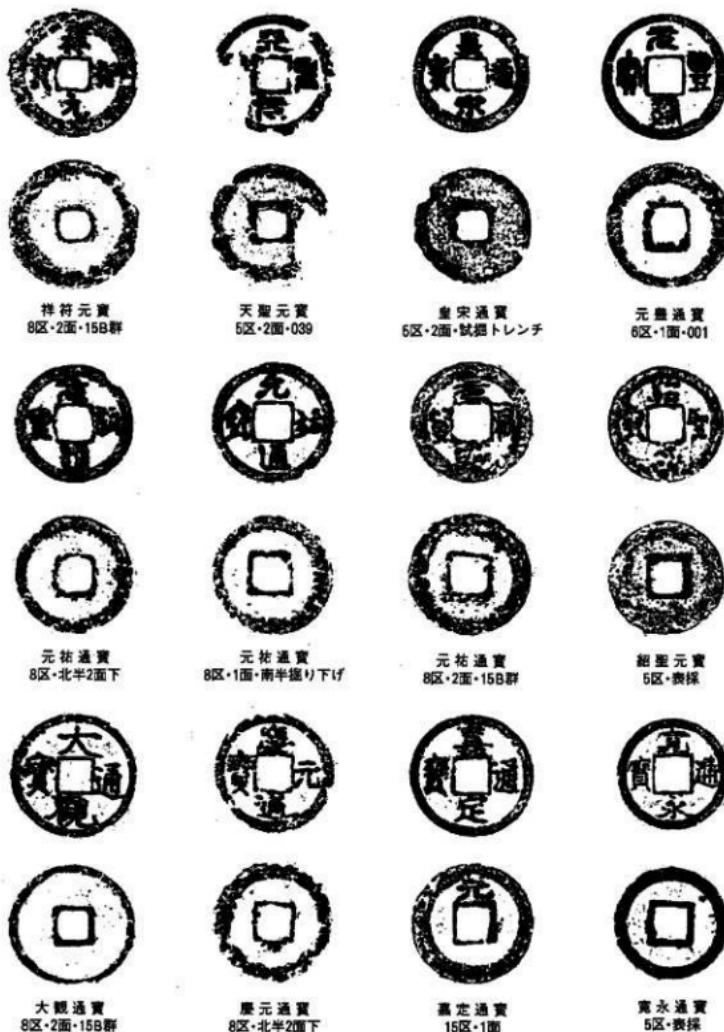


Fig.189 出土銅錢拓本 (1/1)

Tab. 2 出上銅錢一覽表

総出上枚数 25枚

錢貨名	西暦	王朝名	初鑄年	枚数	錢貨名	西暦	王朝名	初鑄年	枚数
開元通寶	621	唐	武德4年	1	大觀通寶	1107	北宋	大觀元年	1
祥符元寶	1008	北宋	大中祥符元年	1	慶元通寶	1195	南宋	慶元元年	1
天聖元寶	1023	北宋	天聖元年	1	嘉定通寶	1208	南宋	嘉定元年	1
皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	5	寛永通寶	1626	(日本)	寛永3年	1
元豐通寶	1078	北宋	元豐元年	1	1錢		(日本)		1
元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	5	近代錢解就不能		(日本)		2
紹聖元寶	1094	北宋	紹聖元年	1	解読不能				3

Tab. 3 遺構出土銅錢一覽表

区	面	遺構番号	錢貨名	枚数	備考	区	面	遺構番号	錢貨名	枚数	備考
5区	表	2面 039	天聖元寶	1		8区	3面	014	元祐通寶	1	
			紹聖元寶	1				015B群	元祐通寶	1	
			寛永通寶	1					大觀通寶	1	縦
			解読不能	1	近代錢				祥符元寶	1	
6区	包	合層	解読不能	1		8区	1面	067～カクラン	皇宋通寶	1	
		001	元豈通寶	1				南半掘り下げ	元祐通寶	1	
		010	開元通寶	1					元祐通寶	1	
		030	元祐通寶	1					慶元通寶	1	
7区	試掘トレンチ	北半1面下	解読不能	2		9区	包	北半	皇宋通寶	1	
		カペ	1錢	1	近代錢			南東カベ10層	解読不能	1	
		012	皇宋通寶	1					13区 包	1	
8区	2面								15区 壁	1	背「元」

第三章 まとめ

吉塚祝町遺跡第1次調査の報告を終えるに当たって、調査成果の簡単なまとめを行い、若干の整理と検討を加えたい。

(弥生時代)

吉塚祝町遺跡に残る遺構は、弥生時代中期中頃の壺棺墓に遡る。弥生時代の壺棺墓が出土したのは、第14区と第16区であり、その中間の第15区においても弥生土器片が散見できたことから、この付近に壺棺墓の墓域が展開していたことが推測される。今回の発掘調査で出土した壺棺が、日常土器の転用棺で、いわゆる小児用壺棺の範疇にとどまっていることも、周辺に成人棺・大型壺棺が存在するであろうことを予感させる。当然どこかに集落も存在したはずである。

(古墳時代)

弥生時代中期の壺棺以降、古墳時代になっても、あまり顕著な遺構は見当たらない。ところが、古墳時代後期になって、第10区・11区・13区において横穴式石室、石棺墓、土塚墓などの埋葬施設が出現する。古墳時代の住居跡は、第17区において検出した。5世紀中頃の土坑の下位より検出した竪穴住居跡がそれである。この住居跡の時期は出土遺物に恵まれず確定できないが、土坑の年代より遡ることは間違いない。また、第16区では7世紀後半頃の土坑も検出されている。

(古代)

古代になると、遺構密度こそそれほどではないが、ほぼ全体的に遺構が分布するようになる。ただし、土師器片と須恵器片が出土しているが、小片のため時期が決めがたい柱穴などがこの時期に属するとすれば、掘立柱建物が散在している景観を復元する事が可能となる。一方、8世紀代の竪穴住居跡と推測した遺構は、第14区に集中している。集落としての核は第14区付近にあり、これと性格を共にする掘立柱建物が点在していたと言うことであろうか。ここで見過せないのは、越州窯系青磁の出土量の多さである。今回の発掘調査では、全体で、73点の越州窯系青磁が出土した。そのうち、37点が精品である。分布的には、どの調査区からも数点程度出土しているが、第7区～第10区と第14区あたりで最も多い。福岡平野周辺の遺跡の場合、越州窯系青磁が出土したからと言って、ただちにこれを公的な遺跡と位置づけることはできない。集落の核とも思われる第14区で多いとの、掘立柱建物部分が多いということの間には、両者の性格の違い・質的な違いがあるのだろうか。この点については、今回の発掘調査の範囲では何も論すべき資料・手がかりは得られていないと思うので、今後の周辺の発掘調査成果に期待したい。

(中世)

中世の遺構は、ほぼ万遍なく分布している。ただし、時期的にこれを見ると、最も多くみられるのは、13世紀～14世紀前半の遺構であり、ついで11世紀後半前後が多く、12世紀～13世紀初頭の遺構はやや少ない感がある。14世紀後半以後の遺構にいたっては、第6区で15世紀の井戸が調査されているが、ほとんど皆無と言っても良い状況である。本遺跡の最盛期が13世紀～14世紀前半にあり、一気に途絶したことを示すと言って過言ではなかろう。さて、第8区において土師器の廃棄土坑が集中していたと言う点は、注目されて良いだろう。他にこれに類する遺構を求めれば、第4区の19号遺構(溝)、第7区の01号遺構、第15区の07号遺構が上げられるのみである。この状況を考えれば、第8区付近に土師器皿・坏を多量に消費する施設があったことを示すと言えるのではなかろうか。全体に、福岡平

野周辺では（西日本では）土師器皿・壺には日常土器としての側面が強く、必ずしも非日常の土器、具体的には饗宴に際して使い捨てされる一過性の強い器とは言い切れない。本遺跡においても、出土遺物の中心は土師器の皿・壺であり、決して特殊な出土状況を示さない。その一方で、大量一括発掘遺構も確実に存在し、饗宴の場で使い捨てにされたと言う使用法を肯定する状況もある。これはすなわち、土師器皿・壺が使用された場面の差に起因すると思われる。日常生活の場では大切に使い回し、儀礼的な饗宴の場では使い捨てにして多量に消費する、ということではなかろうか。そう考えると、必然的に第8区付近に土師器を非日常的な使い方をする場=しばしば宴席が持たれる場があったことになる。これも今回の調査成果のみから結論づけるべき事柄ではない。ただ、本調査区内に性格を異にする場が含まれていると言う事実を指摘するにとどめて置く。

中世に関しては、本調査地点の「マチ」的な様相についても触れてはならない。今回の発掘調査では、道路上の遺構が、2条調査されている。第8区の01号遺構（14世紀）と、第14区の18号遺構（13世紀以前）である。両者は、時期的にみて無関係である。一方、溝状遺構や掘立柱の柱筋では、東西方向を見るものが多く、第8区の道路状遺構とも平行する。今回の各調査区が、北西から南東に斜めに分布しているにもかかわらず、大部分の調査区での軸線が採用されているとしたら、少なくとも今回の調査区の分布範囲を対角線とした南北200メートル、東西130メートルの範囲では、東西・南北の主軸に規制された道路配置、敷地区画（溝による）、建物配置が行われていたことになる。さらに、ほとんどの調査区で、生活面が累重して包含層を為していたと言うことは、この範囲内では盛り土整地が行われていたことを意味する。この様な状況を「マチ」と呼ぶことが、考古学的に可能かどうかについては疑問が残るが、集落の範疇には含め難いと思われる。

さて、もう一点、古瀬戸の出土点数が多いことについても触れておこう。今回の発掘調査で出土した古瀬戸は、10点に達する。器形は、入子皿、卸皿、折縁深皿、柄付片口、瓶、壺など多岐にわたっている。かつて、九州出土の古瀬戸を整理する機会を得たが、九州全体的に古瀬戸段階での出土例は希で、その過半が、博多・大宰府に集中している。また、博多・大宰府を除けば一遺跡で複数点出土することは希である。さらに、その器形は圧倒的に卸皿に片寄っている。こうしてみると、吉塚祝町遺跡での古瀬戸の出土状況は明らかに異質であり、「博多的」とも言える。同様な点は畿内産瓦器の出土についても言えよう。

貿易陶磁器はもとより、古瀬戸や畿内産瓦器も博多を経由して持ち込まれたものだろう。その「マチ」的な様相を含めて、中世都市「博多」の衛星都市的な位置を占めていたのかもしれない。

吉塚祝町遺跡は、今回あらためて存在がしられた新発見の遺跡である。その調査対象地が遺跡の推定範囲を継続するという、最初に遺跡の内容を探るにはもってこいの発掘調査であったにも関わらず、様々な制約から寸断された狭小な調査区を疎らに設定しただけの調査にとどまってしまった。発掘調査担当者としては、遺跡全体の姿に手がかりを付けるという、第1次調査を行うものが負う責任を果たせなかつた自責の念でいっぱいである。とは言え、今回の発掘調査では、古墳の発見など予想だにしていなかった成果を上げることもできた。今回の調査の原因となつた都市計画道路が開通すれば、確実に開発の手が伸び、発掘調査を実施する場面も訪れるだろう。その時、今回の成果が少しでも参考となり、吉塚祝町遺跡の本格的な調査・解明への一助となれば幸いである。

吉塚祝町1

福岡市埋蔵文化財調査報告書
第624集

平成12年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 大光印刷株式会社
福岡市南区那の川1丁目13番16号